

大県・大県南遺跡

一下水道管渠埋設工事に伴う—

1985年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市では、本年度も旧国道170号線沿いで下水道管渠埋設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。この地域は生駒山系の南端に位置する通称東山の山麓部にあたり、原始・古代から歴史の舞台となってきたところです。

『統日本紀』などの文献資料からは、奈良、平安時代のこの地域の様子を断片的に散見することができます。江戸時代の付け替え以前の大和川を挟み、対岸に河内国府を望み、都と地方とを結ぶ重要な交通路として竜田道、業平道、東高野街道などが東西、南北に通じていたと云われています。また、こうした街道に面し、「河内六寺」と称された古代寺院が数を並べ、その中に日本三大仏の一つ、「河内二郎」と呼ばれた高さ六丈の大仏を本尊とした知識寺も記されています。これらの古代寺院は、多くは平安～鎌倉時代に廃絶してしまいましたが、現在では、わずかに観音寺が知識寺の法燈を伝えるものとして知られています。

ところで、ここ数年の発掘調査では、こうした文献に記される以前の歴史や、文献に記された古代寺院の具体的な姿が次第に明らかになってきています。例えばナイフ形石器や縄文土器の発見は、先土器、縄文時代からこの地域で人々が生活していたことを教えるものであり、弥生時代の石器製作址、古墳時代の鉄製品製造址などは、それぞれの時代に特殊な生産に携わった大規模な村が営まれていたことを示すものであります。特に、本年度は大県遺跡から「大里寺」と墨書きされた土器が出土し、これまで不明であった「河内六寺」の位置や規模などの解明に迫る有力な手懸りを得ることができました。

このように発掘調査を通して郷土の歴史は次第に解き明かされてきており、これは将来の柏原をになう私達の子孫に残すべき大きな遺産です。従って、文化財の保存、調査は、それに関わる者だけでなく、市民一人一人の責任であるともいえましょう。今後とも市民各位の理解と協力を希望するものです。

昭和60年3月

柏原市教育委員会

例　言

1. 本書は柏原市教育委員会が柏原市建設部下水道課の依頼を受けて実施した、昭和58年度の下水道管渠埋設工事に伴う事前緊急発掘調査の概要報告書である。
1. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課、北野　重、桑野一幸が担当した。
1. 本書は各調査担当者が執筆した。全体の監修は柏原市教育委員会 竹下 賢が担当した。
1. 付章には柏原市教育委員会が実施した1984年度市内遺跡群発掘調査一覧を掲載した。
1. 調査の実施、本書の作成にあたっては帝塚山短期大学 山本 昭氏、大谷女子大学 中村 浩氏、奈良国立文化財研究所 岩本正二氏、大阪文化財センター 広瀬和雄氏、堺市教育委員会 森村建一、白神典之氏、日本鋼管 広田 稔、落合正一氏に御指導、御教授を賜わった。記して感謝の意を表します。
1. 調査の実施と整理においては以下の諸氏の協力を得た。（順不同、敬称略）
安村俊史、田中久雄、広岡 勉、秋田大介、伊藤泰臣、森田好則、井宮好彦、上條裕典、麻栄三郎、奥野 清、川端長三郎、谷口鉄治、西岡武重、分才春信、道旗基蔵、森口喜信、山田貞一、山本芳一、井上岩次郎、朝田行雄、松田光代、椋本幸枝、松村富子、森下尚美、中田ゆかり、藤本直美、今西泰子、乃一敏恵、松成早苗、坂本道子、横関勢津子、吉居豊子
1. 本調査では柏原市下水道課、尺松組、上田組、弁天組の工事関係者、および地元住民の方々に多大な御協力を賜わった。記して謝意を表します。
1. 本調査にあたっては写真、実測図などの記録を作製するとともに、カラースライドを作製した。また、出土した遺物は柏原市教育委員会で保管するとともに、柏原市歴史資料館で展示している。

目　次

は　じ　め　に

例　言

I 調査に至る経過.....	1
II 大県遺跡 84-1次調査.....	3
III 大県南遺跡 83-6次調査 (A～D区)	55
(E区)	76
付章 1984年度市内遺跡群発掘調査一覧.....	83

I 調査に至る経過

下水道管渠埋設工事は、生駒山地西麓に南北に連なる山ノ井、平野、大畠、太平寺、安堂地区の下水や雨水を恩智川に流入させるためのものであり、かつては山地から西下する小河川や溝であった水路を暗渠として利用しようとするものである。また、一部道路の拡幅を計ろうとするものもある。

昭和58年度は、昨年度の施工区間の延長工事として2ヶ所の施行計画があった。いずれも大畠遺跡、大畠南遺跡という周知の遺跡内にあたるため、柏原市教育委員会では、昭和58年度の事業として市建設部下水道課から依頼を受け、両遺跡における事前緊急発掘調査を実施した。

調査地周辺は、地形的には旧大和川と生駒山地に挟まれた小規模な谷口扁状地の中央部にある。そのため、昨年度までの調査で明らかになったように、土砂の堆積作用が激しく、灰色～青灰色の粘質土層が厚く堆積し、地表下約2m以下では湧水が著しい（図-1、2）。

この地域は、奈良、平安時代から河内国府に近く、竜田道、渋川道、業平道、東高野街道などの主要交通路が交錯し、さらに「河内六寺」が所在するなど歴史上極めて重要な地域とされている。しかし、現在では民家が密集しており、しかも遺物包含層の深度が深いこともあって、これまで十分な調査が行なわれてきたとはいえない。ようやく昨年度、一昨年度の下水道関係の調査によって、寺院以前の弥生、古墳時代の集落を把握しつつあるという状況である。

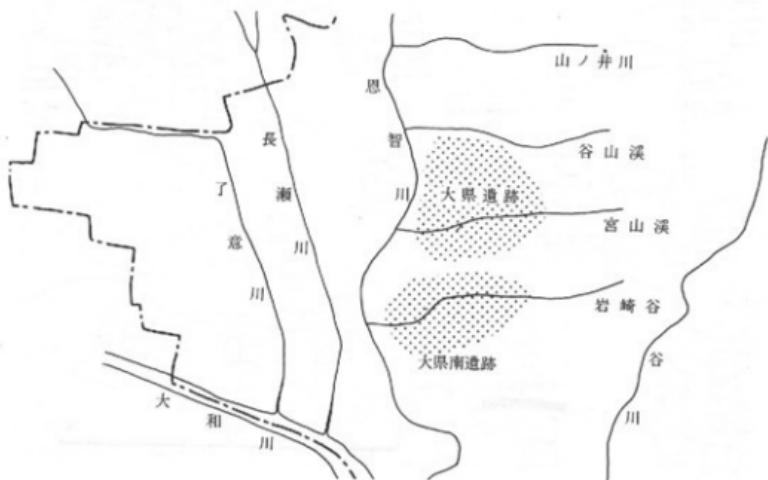


図-1 柏原市の水系と大畠、大畠南遺跡

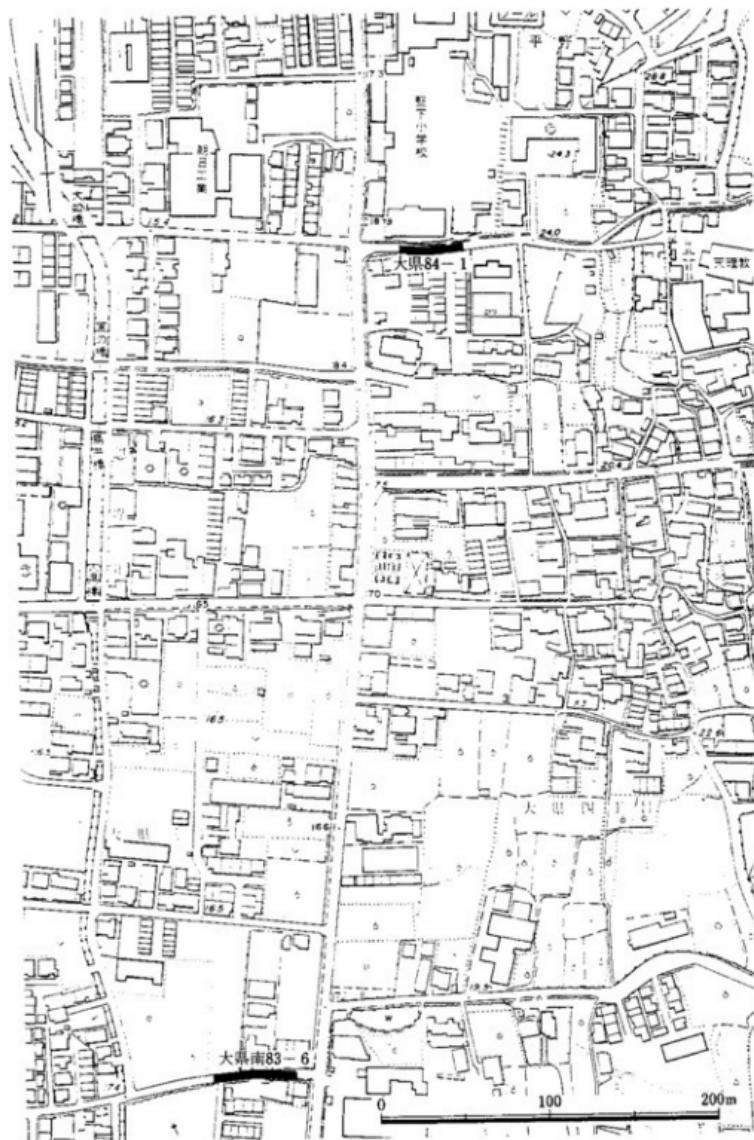


図-2 調査区付近地図

II 大県遺跡

84—1 次調査区（宮の橋線）

- ・調査地区所在地 柏原市大県4丁目
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 昭和59年1月6日～2月25日
- ・調査面積 150 / 180m²

第1節 調査概要

調査は、下水道管理設置予定地内に、幅2.5m、長さ72mの細長い調査区を設定。遺跡の深度が深い為、矢板の打ち込みを行なった後東側からA～D区に大別した。また、各区の中でさらに区切り、3mを単位とする小区に細別した。つまり、A-1～7区、B-1～7区、C-1～7区、D-1～3区である。

上層の盛土及び旧表土は重機によって掘削し、遺物包含層は人力によって掘り下げた。層序は、現地表下1.5～2.5mまでが盛土及び旧表土で、1.5～4.5mまでが遺物包含層である。遺物包含層は、上層より出土遺物の時期区分を行ない次の4時期に分層した。各層の分離は、それぞれ特徴を持つ事から明白である。上層からA層、B層、C層、D層を基準とした。

A層……瓦を含む層を含め、石をあまり含まない遺物包含層である。

B層……6世紀後半から7世紀初頭までの遺物包含層である。この層中10～30cm大自然石が多量に含まれる。短期間の堆積である。

C層……5世紀中頃から6世紀後半までの遺物包含層である。鐵冶関係遺物が多量に出土。

D層……弥生時代の遺物包含層で、A区においてのみ検出した。

調査の実施にあたってはさらに分層した。

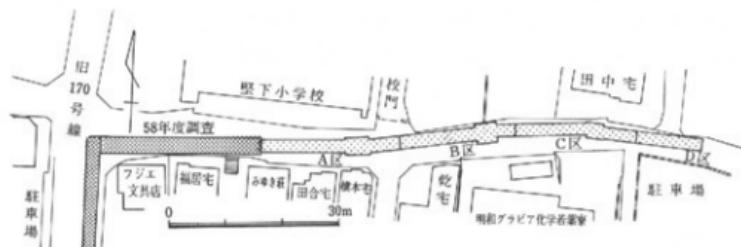


図-3 調査位置と地区設定図

1. A区の遺構

A区は昨年度の続きである。当区のA層については、後世の水路によってほとんど削平され検出されなかった。しかし、水路の埋土中から若干の瓦が出土した。B層の堆積厚は、20~50cmを確認した。10~30cm大石が非常に多く含まれ、全面にわたり検出した。石の中には多くの遺物が混入し、土師器、須恵器、鉄滓等が出土した。A-6~7区の南端で、30~50cm大石が4~5個南面して並べられていたのが、B層に関わる唯一の遺構状のものである。

C層は、B区掘削後、ほとんど石を含まない層として検出した。北側に高く、南側に低くなっている。遺構は、溝-1、2、鍛冶炉-1、炭層-1、2がある。出土遺物は、各遺構を含め、土師器、須恵器、鉄滓、輪羽口、砥石、製塙土器、獸骨、石器等が出土した。D層は、溝-1の北側からのみ検出した。C層掘削後検出し、南西向きの緩斜面地である。遺構は検出されなかった。出土遺物は、弥生土器、石器等が出土した。

石列-1 A-6、7区の南側から4~6個東西方向に並べた石列を検出した。南側を面とし、北側は、石の間に小さな石を詰め込んでいる。石の大きさは、10~50cmである。西側の石列は検出されなかった。石は一段のみで、下層はC層となる。この石列は、溝-2の埋土上層になり、ほぼ同一方向である。

溝-1 A区の東西方向中央部に走る溝で、A-3~7区まで検出した。A-7区ではほとんど溝とならず、A-6区では浅く、幅の狭い溝となり西へ行くに従い八の字状に拡がり、深くなる。A-6区で、横幅40~50cm深さ5~15cmを測る。埋土は、上層が茶褐色粘質土、下層は明茶褐色の鉄分を多く含んだ土層である。北側の段上には多くの鉄滓層があり、東側に鍛冶炉がある事から鍛冶に関わる遺構であろう。埋土中からはほとんど遺物が出土せず、下層には多量の鉄分がたまっていた。

溝-2 A-5~7区の南端に検出した溝で、その北側だけを検出した。東西方向から東に向うにしたがって北側に湾曲している。深さは、80cm以上である。埋土は、青灰色粘質土である。鍛冶炉の南側では炭や灰が非常に多く含まれており、鍛冶炉の操業中に灰原として埋没したものと考えられる。埋土中からは土師器、須恵器、鉄滓、輪羽口、砥石、製塙土器、獸骨、木器等が出土した。

鍛冶炉-1 A-7区中央部に溝-1と溝-2との間の平坦地

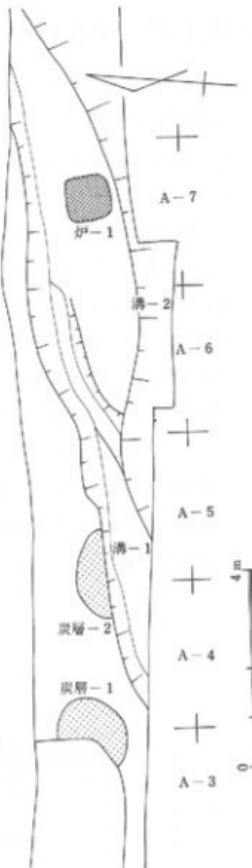
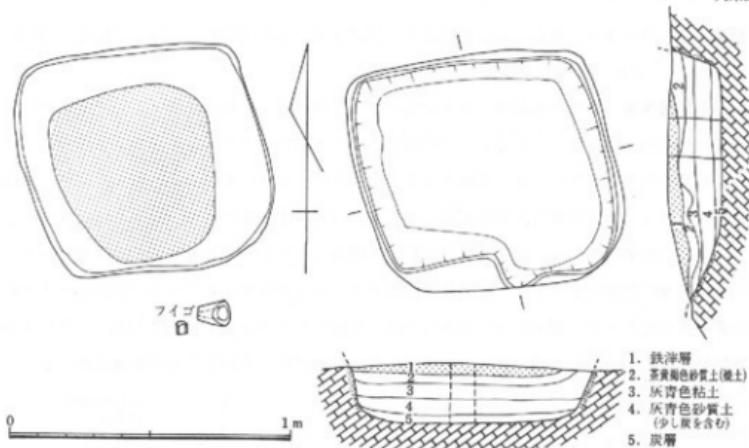


図-4 A区遺構



中央部に検出した。溝一から南へ50cm、溝二まで約20cmの位置である。

B層を掘削後検出したもので、南北方向0.85m、東西方向0.86m、深さ0.25mを測る隅丸方形の炉で、半地下式に掘窪めている。炉自体上部を欠損するが、下部は遺存状態が良好である。内壁は、厚さ約3cm位の粘土を張り付けて壁としている。この壁は、高熱を受け赤茶褐色に酸化し硬化している。胎土は、金雲母と砂粒を多く含む生駒西麓産の粘土で、鞴羽口のそれと同じである。壁の傾斜は、北壁が 79.5° 外側へ傾き、上端はやや内側へ屈曲気味である。南側の壁は、約 25.0° と他の壁と違い傾斜が緩くなっている。この南側壁の直ぐ南側は溝二の肩部となり落ち込んでいる。恐らく焚口となるのである。その焚口を中心として溝二の埋土には多量の炭と灰が含まれていた。炭の含まれている範囲は広く、西側へ6m以上、東側へ5m位である。炉の周辺の埋土中にもかなりの量の炭と灰が含まれ離れる程減少する。焚口は、他の壁よりも焼成が甘く、遺存状態は悪い。東西の壁は、それぞれ 67.5° 、 78.0° を測る。

炉の埋土は、上層からスラグ状の鉄滓層、茶黄褐色砂質土、灰青色粘土、灰青色砂質土、炭層が各土層ともほぼ水平堆積している。茶黄褐色砂質土中には壁土と同様の焼土が混入していたが量的には少なく、炉底や側壁の上部構造を知り得る資料はなかった。灰青色砂質土中にも炭が多少含まれる。最下層の炭層中には炭の小破片が多く含まれ、堆積厚さは約5cmを測る。灰青色粘土より下層には鉄滓の混入が認められない。鞴羽口が周辺から多く出土している。ほとんどが八の字状に擴がる形態のものである。

炭層一 溝一の北側段上に検出されたもので、 1.4×1.5 mの範囲で認められた。約2~5cm位の厚さを測る。割合堅く縮まっている。A-3区から検出した。

炭層—2 A—4区と5区の間で検出した。段の上端にあり半円形を呈する。規模は、 0.5×1.8 mを測る。炭層は5cm以下である。

A—4区横断面 B層を掘削後、A区全域にわたり鉄滓層と炭層が瓦層となっている面を検出した。鉄滓層は堅く敷き詰めるように堆積し、厚さ7cm以下である。炭層は、鉄滓層と鉄滓層の間層及びその下層から、2~6cmの厚さでみられた。全体に東側から西側へ、北側から南側へ傾いている。鉄滓層及び炭層の下層には、茶褐色粘質土、黄灰色粘土が部分的にみられ、ブロック状に堆積している。前者は炭を含むが、後者は炭や他の土層を含まない土層である。最下層は、青灰色粘質土である。その上部は非常に多くの炭を含んでいる。**銀冶炉—1** の南側の溝—2の埋土とよく類似して、調査区の直ぐ北側に炉が存在する可能性が強い。その下層に薄茶褐色粘質土がある。25~35cmの堆積である。弥生時代の遺物包含層のD層である。

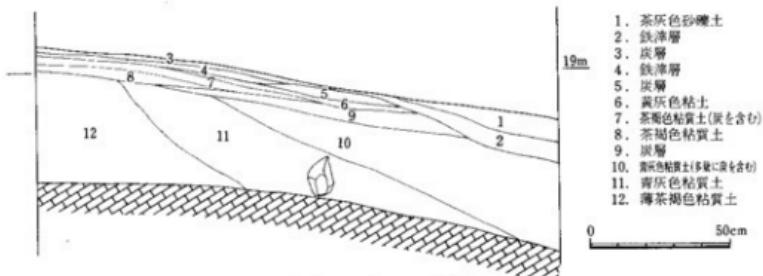


図-6 A-4区横断面

2. B区の調査

A区の東側の調査区であり、さらに山裾寄りの緩斜面地である。盛土及び旧表土が約2.0~2.5mあり、この土層をA区と同様重機によって掘削した。A層については、調査区の南側に割合良好に堆積し、30~45cm見られた。このA層は2層に分層出来、上層が青灰色粘土、下層が茶褐色粘質土と黒茶褐色粘土の混層である。出土遺物は、上層より瓦、土師器、須恵器等が出土した。ほとんど瓦が占め、他は細片多かった。下層からは瓦が出土していない。この層中にはほとんど石が入らず下層のB層と明瞭に分層される。調査区の北側は後世の水路によって削平されており、A層が続くかどうかは明白でない。南側については、ほぼ水平方向に伸びる事が考えられる。B層上面の標高は、T、P、19.5~20.5mである。

B層については、1~7区まで全域で検出した。厚さは、40~120cmあり、北側程厚くなる。造構は、A区からの溝—2が統いており、南側肩部を検出した。肩部といつても明瞭なものではなく、その傾斜の変換点のあたりである。B層は2層に分類される。上層が暗青茶褐色粘質土下層が青灰色砂質土である。両土層中には多量の20~50cm大石を含む。下層の青灰色砂質土中に鉄滓が多く含まれ、炭層も部分的に見られた。両土層とも溝—2の中へ流れ込むように堆積

している。B層上面でB-1、2区にわたり南北方向の溝を検出した。C層は、溝-2の埋土としても堆積する。厚さは50~60cmを測る。水の淀んだ時の堆積土を呈し、青灰色粘土である。出土遺物は、土師器、須恵器、鉄滓、輪羽口、砥石、獸骨、木器等多数あり、全体に炭の混入が顯著である。

溝-2 A区からの続きの溝で、主にその南側肩部を検出した。A区では北東向きに方向を向けていたが、徐々に東から南東方向に向きを変える。さらに、B-6、7区あたりで北東向きに再度方向を変える。調査区全体から見れば、この溝は東西方向にはほぼ直線的であるが、小区についてみれば波状に小さく曲がりくねる。溝幅は、調査区が幅狭いため明白でない。

溝-3 B-1、2区の南側に検出した溝で、幅約2m、長さ約1mを測る。深さは、約5cmである。溝は、傾斜地の段の屈折点に位置し、西側に緩く、東側に急な傾斜地となっている。埋土は、茶灰色砂土である。南側から北側へ向かう溝と考えられる。

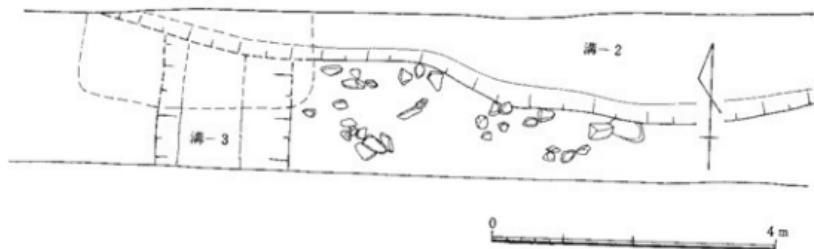


図-7 B区の遺構

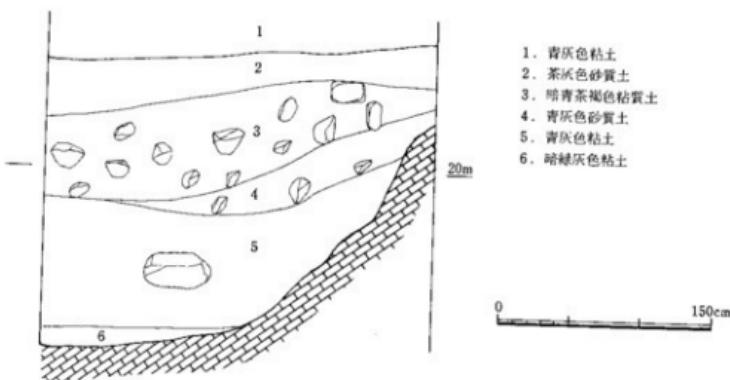


図-8 B-3、4区横断面

3. C区の調査

C区は、B区のさらに東寄りの部分である。当区のA層については、後世の水路によってほとんど削平され、部分的に検出したのみである。水路中から瓦が出土したが、量的にA、B区の約半分以下である。

B層については、全区にわたり、10~50cmの厚さで確認した。溝一2の埋土上層に続き、溝が深い場所ではその分厚く堆積している。10~30cm大の石が非常に多く含まれる。出土遺物は、土師器、須恵器、鉄滓、繩羽口、砥石等が出土した。

遺構は、B層上面から井戸を検出した。C層については、溝一2の肩部から北側へ落ち込んだ状態で堆積している。溝一2がB区と同様に波状に曲がりながらその南肩部付近が出入りする。遺構は、C-3、4区において溝一4を検出する。

溝一2の下層は部分的に深く、矢板の長さの関係から掘削が出来なかった。遺物は、土師器、須恵器、鉄滓、繩羽口、砥石、獸骨、木器、製塙土器等が多く出土した。D層については、検出されなかったが、溝一2の最下層の遺物の中に数点の弥生土器が含まれていた。

溝一2 C区全域から検出された。その南端だけを検出したのみで、構幅や深さは不明である。上層では、B層である茶褐色粘質土（石を多く含む）が堆積し、溝の中央部には、青灰色粗砂が1m以上堆積する。この土層中には、自然木や植物遺体を検出するのみで、土器類の出土はほとんど見られなかった。溝の肩部には、暗灰色粘土が40~50cm堆積し、非常に多くの遺物が出土した。遺物は、土師器、須恵器、鉄滓、繩羽口、砥石、獸骨、木器、製塙土器等がある。溝最下層に青灰色細砂土があり、多くの自然木及び木器が出土した。木器の中には、田舟が半截されたものがある。この砂層からは、土師器、須恵器の土器類が出土しなかった。

溝一4 C-3、4区にかけて検出した。溝は、幅約40cm、長さ1.4m、深さ約20cmを測り、北東方向に向けて真直ぐ伸び、溝一2の肩に直交するように落ち込んでいる。地山（緑灰色粘質土）を掘削したもので、埋土は、茶灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

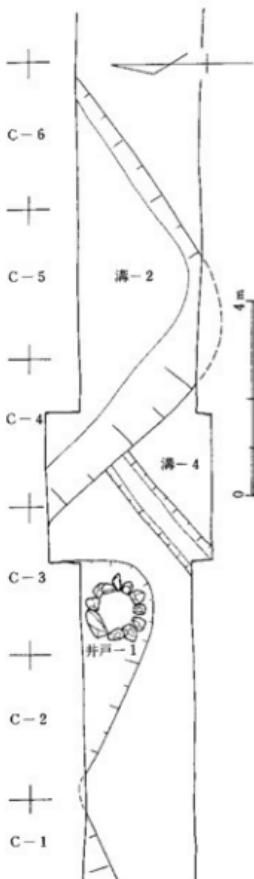


図-9 C区の遺構

井戸-1 C-4区北側に検出した石囲いの井戸である。石は、主に花崗岩質のもので、加工の施こない自然礫である。上層部は後世の水路によって削平され、B層の掘削時に発見した。井戸のある場所は、溝-2の肩から底部にかけての溝内にあり、井戸掘削時には溝はほぼ全部が埋没していたと思われる。溝下層には砂土の堆積がある事から水脈があったのだろう。

平面的にはほぼ円形を呈する。上面で、内径65cm、下面では40cmである。深さは、検出面より165cmを測る。掘方は、石組みの石の端部とほぼ接して掘り込まれてほぼ円形である。掘方径120cm位と考えられる。石組みは、下段よりラセン状に積み上げたものであり、左回りに構築する。埋土は、主に砂土と花崗岩の風化土及び粘土である。上層部は多量の遺物が詰まっている。上層は約40cm位掘り下げ、その下層については、15~20cmごとに掘り下げ遺物の取り上げを実施した。遺物は、各種のものがあり、復元しうる完形の土器が多数出土した。土師器須恵器、墨書き器、瓦、種子、木器、金環等がある。出土遺物は、6世紀末から7世紀初頭の時期から8世紀後半の時期のものまで含まれる。上層の遺物が排棄されるまで約200年間の存続が考えられる。また、出土遺物の排棄された数量は、8世紀を前後する時期を境にして、前半期は少なく、後半期が非常に多くなる傾向がある。

4. D区の調査

D区は、調査区の最も東の端にある。A~C区までは21m (3m×7区) あったが、D区は10m弱である。西側に比べると、遺物包含層自体薄くなっているようである。A層は、総体的によく遺存しており、盛土及び旧表土を約1m掘り下げた段階で検出した。上層は、青灰色粘土質土、下層は茶灰色砂質土である。南北方向にはほぼ水平を成し、東西方向に緩斜面である。A層の下層に、20~80cmの整地層がある。遺物は含まない。茶灰色砂質土、同砂礫土、青灰色砂土である。B層は、この整地層の下層の北側寄りに検出した。暗緑灰色砂質粘土で石が多く含む。遺物は、土師器、須恵器、鉄滓、輪羽口等が出土した。C層は、暗緑灰色粘土である。南側で約10cm、北側では厚くなり約40cmを測る。出土遺物は少なく、土師器、須恵器等が少量出土した。遺構は南側から2つの土塁を検出した。

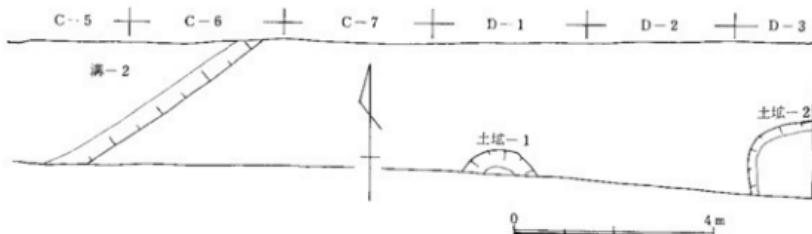


図-10 D区遺構図

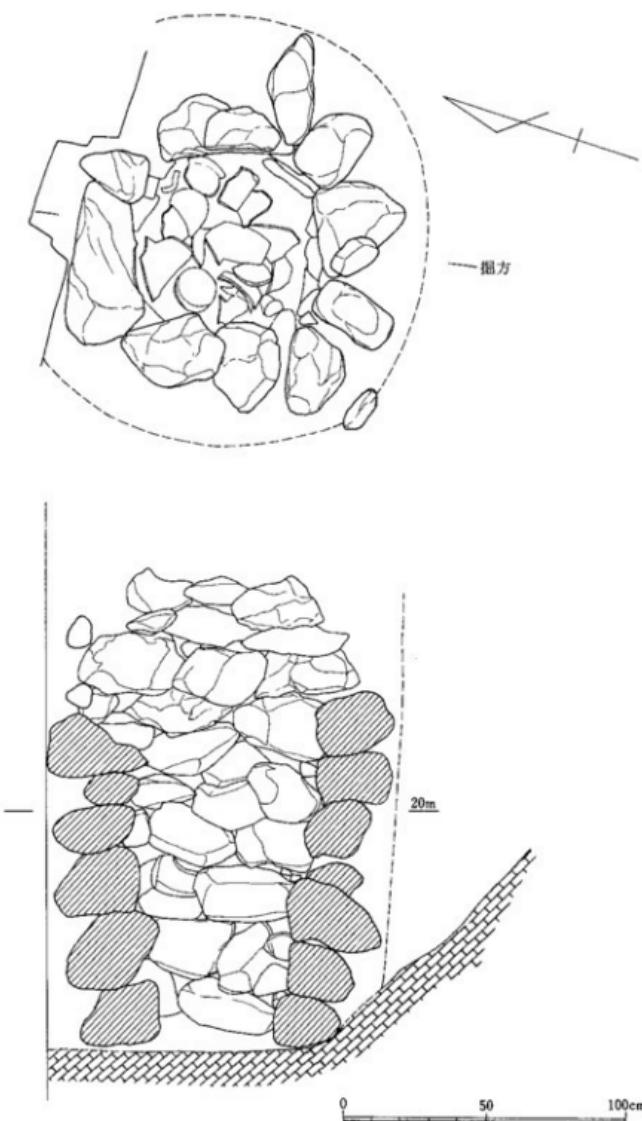


図-11

溝—2 C—6区において溝—2の南側肩部が北東方向に曲がり消滅する。深さ120cm以上を測る。D区においてもわずかにその肩部が継続する。

土塙—1 D—1区南西部において検出した。その大半が調査区外である。円弧状にまわる。径80cm以上、深さ14cm以上である。埋土は、青灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土塙—2 D—3区南東隅で検出した。径80cm以上の隅丸状の土塙である。底部は平底であり、深さは40cm強測る。埋土は、茶灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

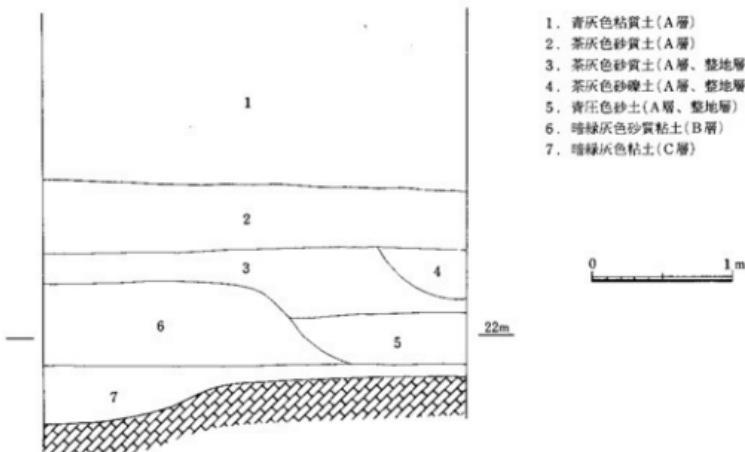


図-12 D-3区横断面

第2節 出土遺物

A～D区までの調査区において、遺構及び遺物包含層から多量の遺物が出土した。コンテナ箱188箱出土した。生活雑器の土師器、須恵器類は、160箱を数え、以下、鉄滓、繩羽口、砥石等銀冶関係遺物15箱、瓦5箱、歎骨4箱、木器4箱等である。A～D区までの土師器と須恵器を説明し、その他の遺物はまとめて後述したい。

1. A区出土遺物

A区から出土した遺物を上層からA～C層の遺物包含層及び遺構から順次簡単に述べていきたい。

A層 A区ではこの包含層は少なく遺物はめぐまれなかった。瓦と共に出土した遺物はなく、瓦を含まない下層から出土したものである。（図-13）

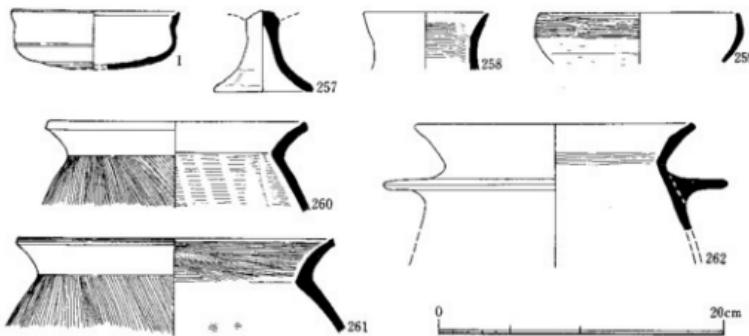


図-13 A区 A層出土遺物

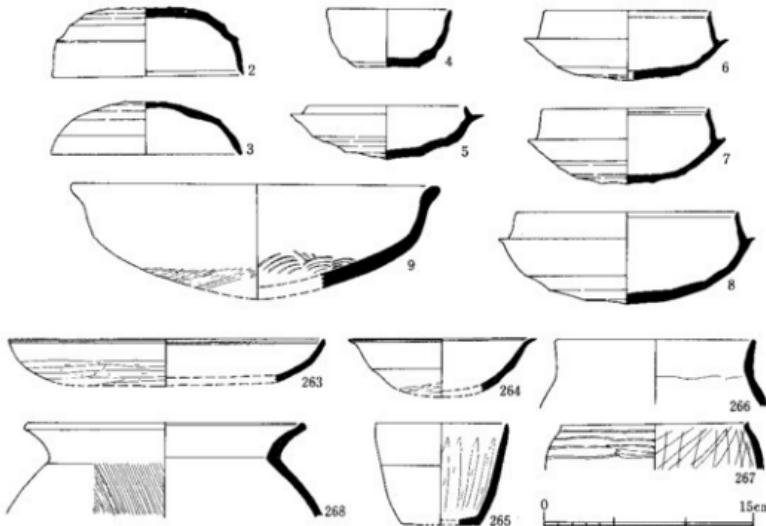
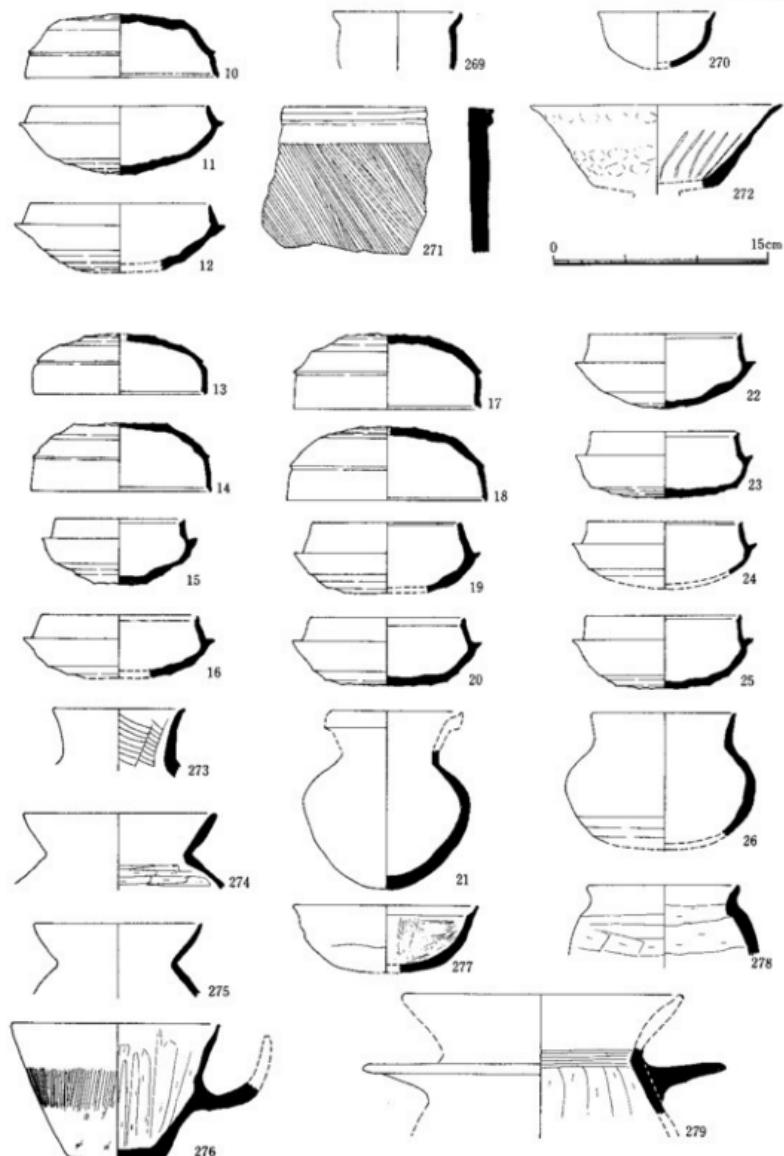


図-14 A区 B層出土遺物

B層 須恵器は杯と器台がある。杯蓋は、稜が形骸化したものとまったく消滅したものがある。杯身は、口縁端部が内傾する段を有するものとかえりが消滅したものがある。器台は内底面に同心円文叩きを施こし、外面には斜方向の平行叩きが見られる。脚部は出土しなかった。土師器は、杯類はハラ削りを施すものが多く、鉢は、外面にヘラ磨きと内面に交差する放射状の暗文があるものがある。

溝-1出土遺物の中に、埴輪の破片が出土した。内面は横方向のケズリで、くずれた台形の



図一十五 A区 溝一I・C層出土遺物

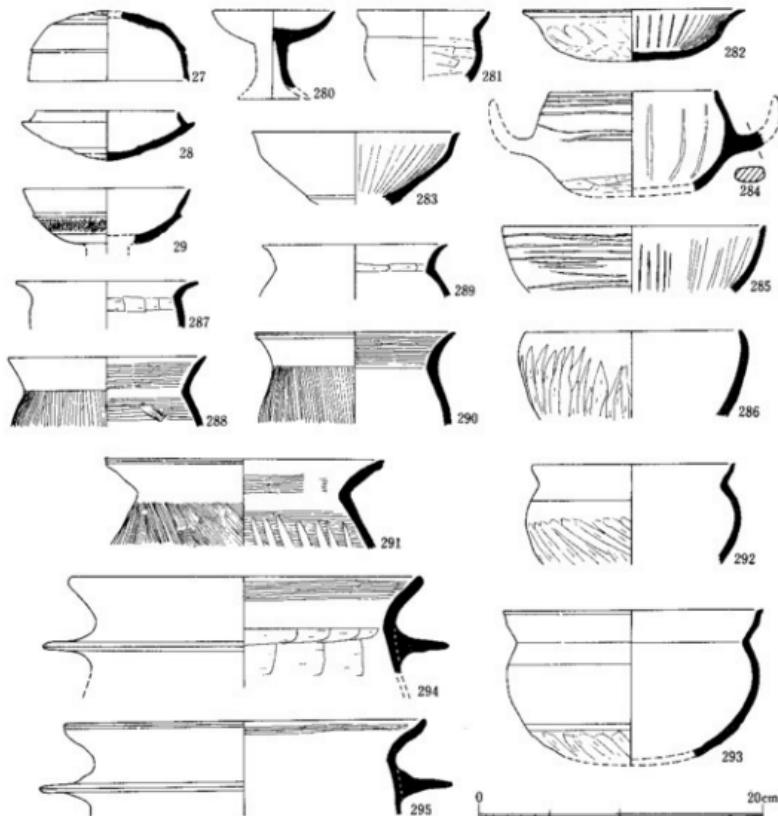


図-16 A区 包含層出土遺物

タガを持つ。

C層 須恵器には、杯、壺がある。杯の口縁は、全部内傾する段を持ち、蓋には明瞭な稜を造すものが多い。口径は、9.0～14.0cmを測り、その範囲は大きい。全体に作りは丁寧なものが多いが、大きい口径のものは粗雑な作りである。器壁は薄い。19は、その中でも器壁が厚く口縁端部が水平に平坦な面を持つもので、この中では古相を示す。土師器は、杯、壺、把手付壺、土釜がある。調整手法は、ヘラ削りを主体にして、ハケ目調整と板ナデ調整がある。

包含層 須恵器は、杯、高杯がある。杯は、口縁端部が内傾する段を有し、明瞭な稜を持つ蓋とたちあがりが短く内傾する身がある。若干の時期幅がある。土師器は、杯、壺、甕、鉢、土釜等がある。

2. B区出土遺物

A層 須恵器は、杯身蓋がある。蓋は、天井部と口縁部の境にある稜はまったくその痕跡をこさないもので、口縁端部にも内傾する段もみられなくなり丸く仕上げている。また、全体に器高が低く扁平な感じとなる。身は、蓋と同様口縁端部は丸く、短かい立ちあがりを持つ形態のものである。この形態の杯類がこの他にも割合多い。また、細片で微量しかみられないが擬宝珠様つまみが付く形態のものも出土している。

土師器は、杯、甕、土釜、鍋が出土した。杯は、内面に暗文がみられるものと見られないものがある。口縁端部は外反気味で内傾する平面を持つ。内面に暗文のあるものはもちろんであるが、ないものにも内面を器壁調整し密な仕上げを行なう。外面は割合雑な仕上げのものが多い。甕や土釜、鍋は、外反する口縁部を持ち、端部は丸い。調整は、主にハケ目と板ナデである。時期が新らしくなる遺物は須恵器と同様細片が多く、A層の時期を示す主体であるべきものが少ない。

B層 須恵器は、杯がほとんどを占め、その他に高杯、台付鉢がある。杯蓋は口縁端部が内傾する段と口縁部と天井部の境に明瞭な段を有するものと口縁端部に段があるものの丸く仕上げたもの、端部は丸くなり、稜もまったくみられなくなったものがある。数量的には、前者は

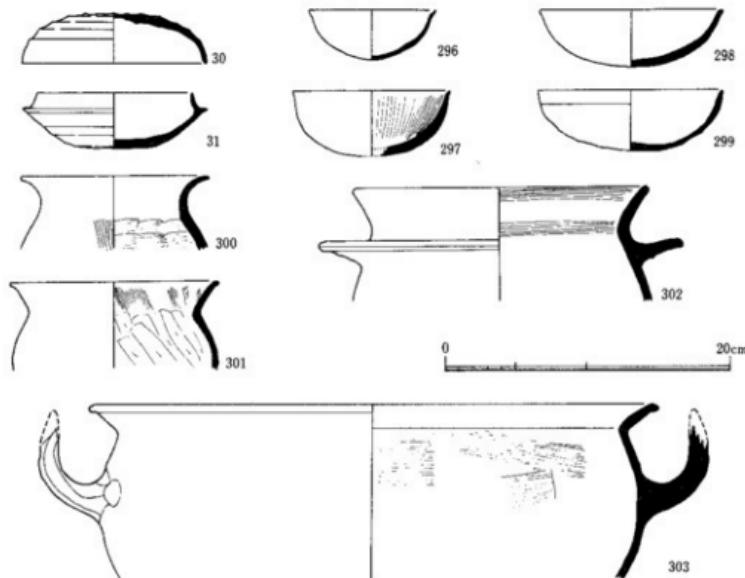


図-17 B区 A層出土遺物

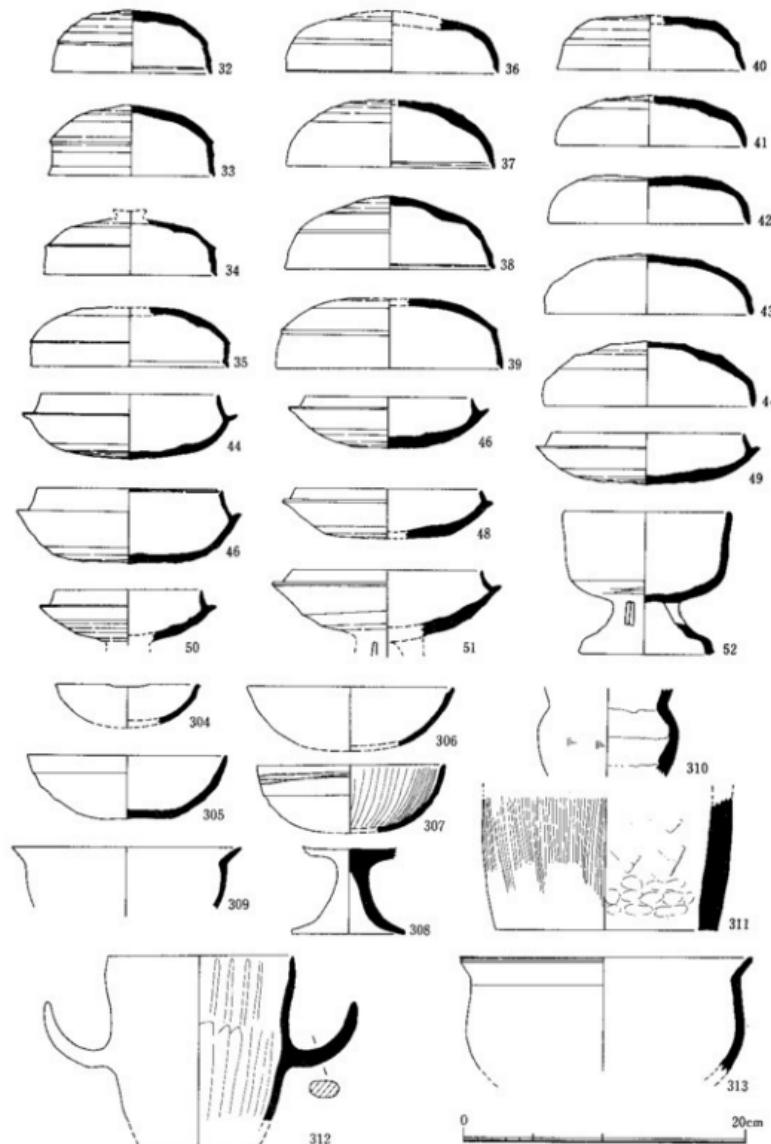


図-18 B区 B層出土遺物

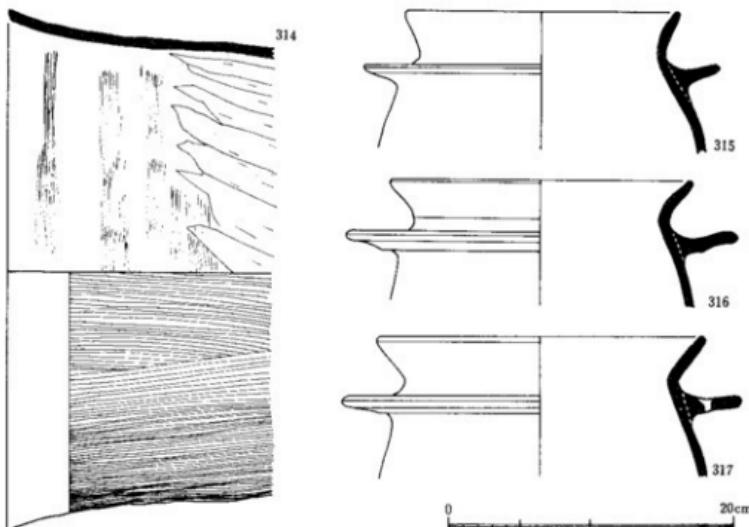


図-19 B区 B層出土遺物

少なく、中後者が大半を占める。杯身も同様の傾向を示す。たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。底部は回転ヘラ削りを行ない、安定性のよいものが多い。高杯は、長脚2段透しの脚部を持つものがある。土師器は、杯、高杯、壺、甕、把手付鉢、土釜、櫃がある。310は、小型直口壺の体部である。内面は粘土の輪積みされた痕跡が明瞭にのこり、器壁は大層厚いものである。外面はハケ目後ヘラナデ又はヨコナデ調整を施す。311は、円筒埴輪の底部である。外面はタテハケ目で、内面を板ナデによっている。胎土には、金雲母が中量含まれ、他の土師器の胎土と類似する。317は、鉢部に径1cm位の対になると思われる穴が穿たれている。

溝-2 須恵器は、杯蓋身、甕、壺、器台が出土した。杯蓋は、最も新らしい要素を持つものとして、53は、擬宝珠様つまみが付くと思われる。層位的にB層が形成する直前に埋没した溝であり、口縁部と天井部の境の稜が消滅した形態のものは、B層の遺物として大過ないものである。杯蓋は、口縁部と天井部との境の稜が明確なものから徐々に退化が始まるものがその主流を占める。

杯身は、口縁端部が内傾する段を持つものから徐々に丸味を帯びるようになり、たちあがりも次第に短くなる。甕は、口縁部を欠損し、体部はよく肩が張り、やや上方に波状文を施す。波状文の中心に円孔が1穴穿たれている。甕や器台の口縁部にも波状文の文様帶を多く使用している。土師器は、細片が多く実測しえるものは少ない。甕口縁部は、外反した後に短く上方へ屈曲して小さい段を持つ。

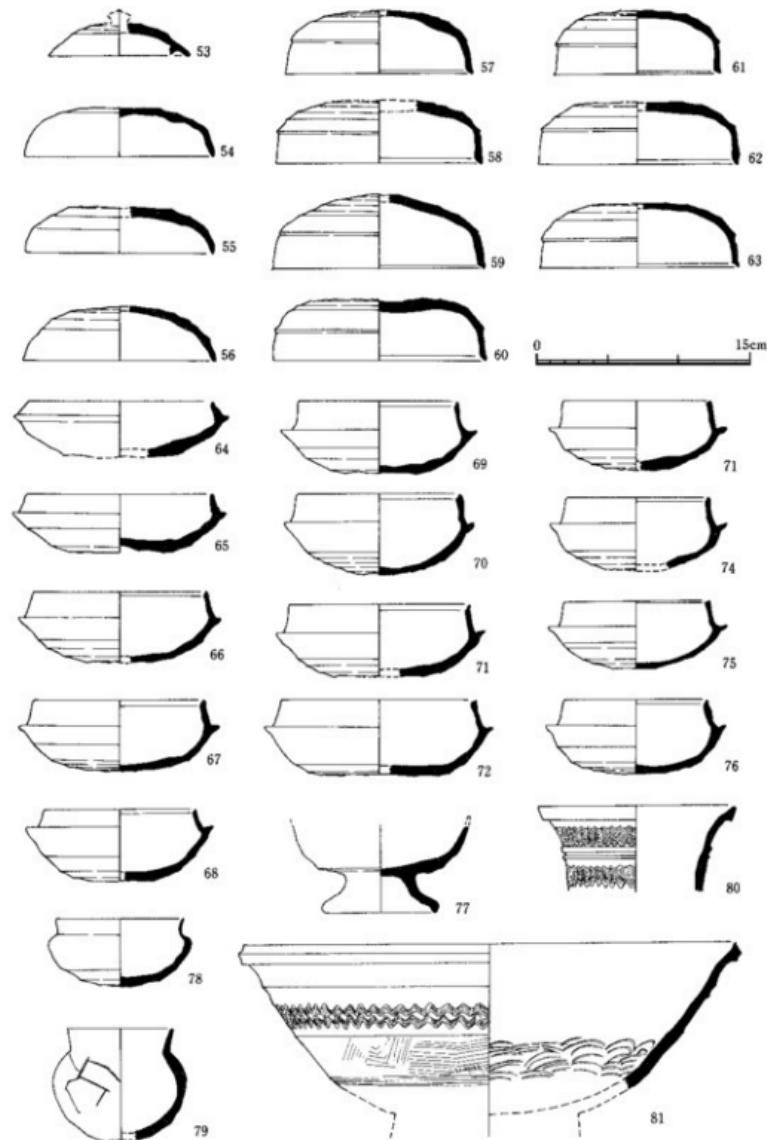


図-20 B区 溝一2出土遺物

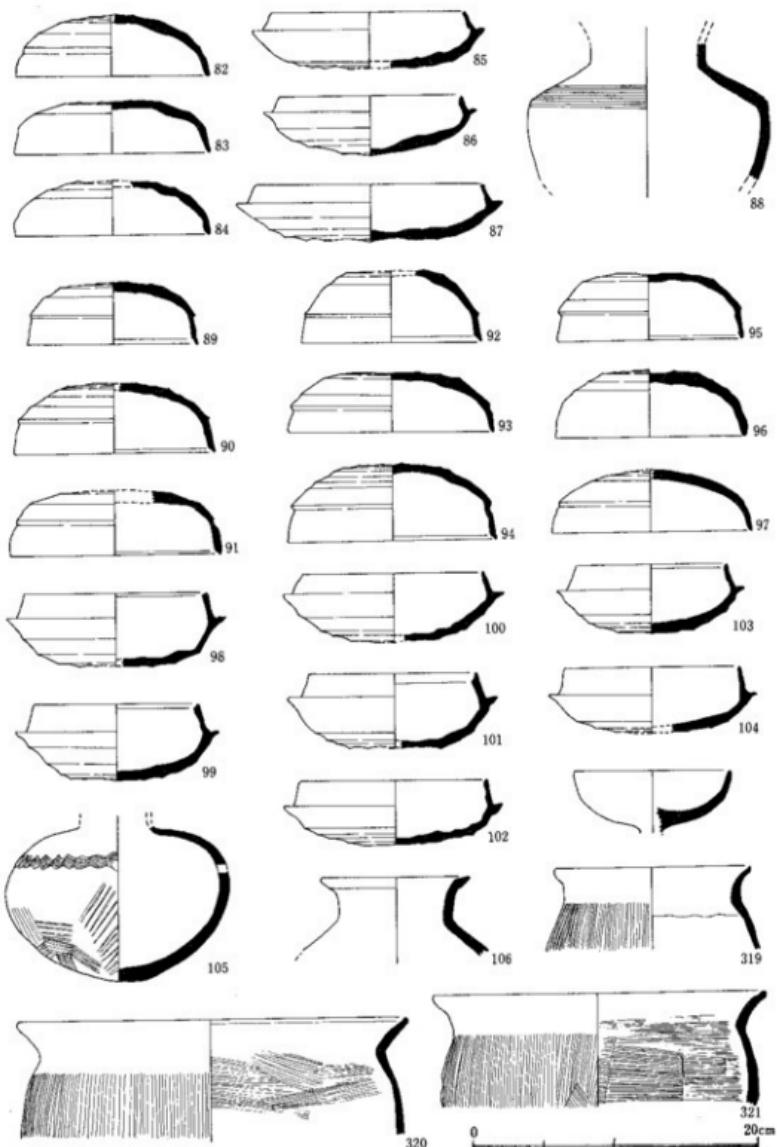


図-21 B区 溝-2出土遺物

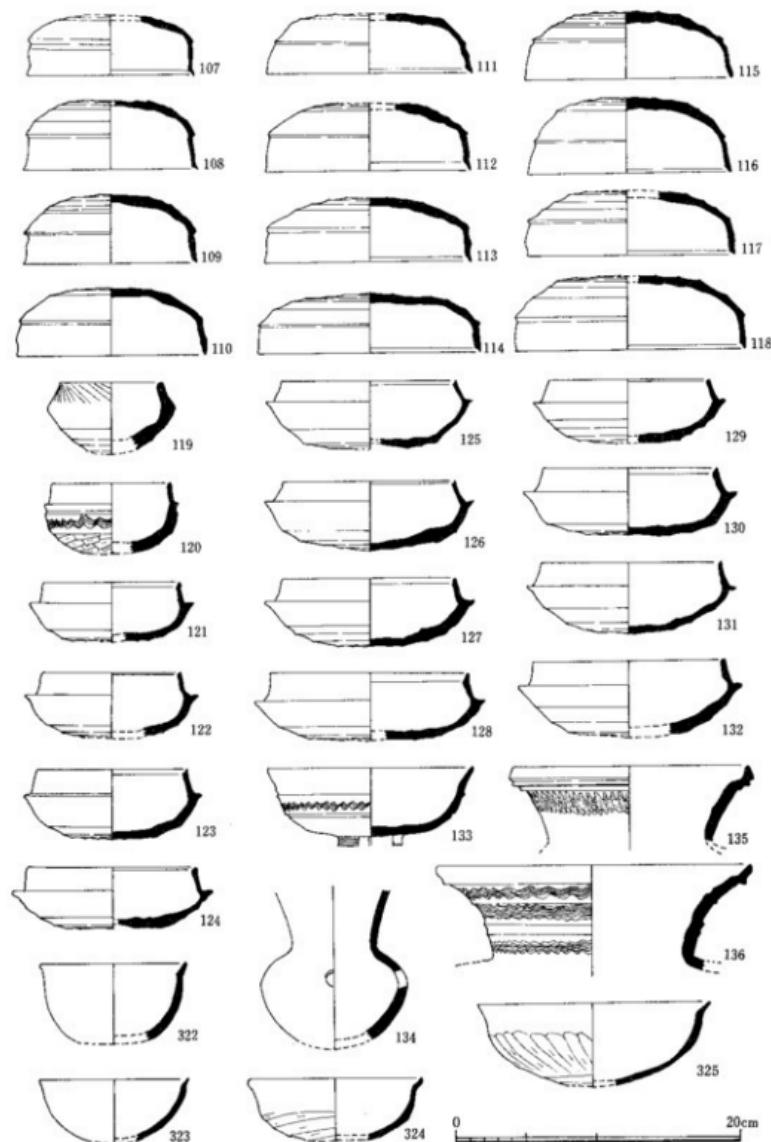


図-22 B区 C層出土遺物

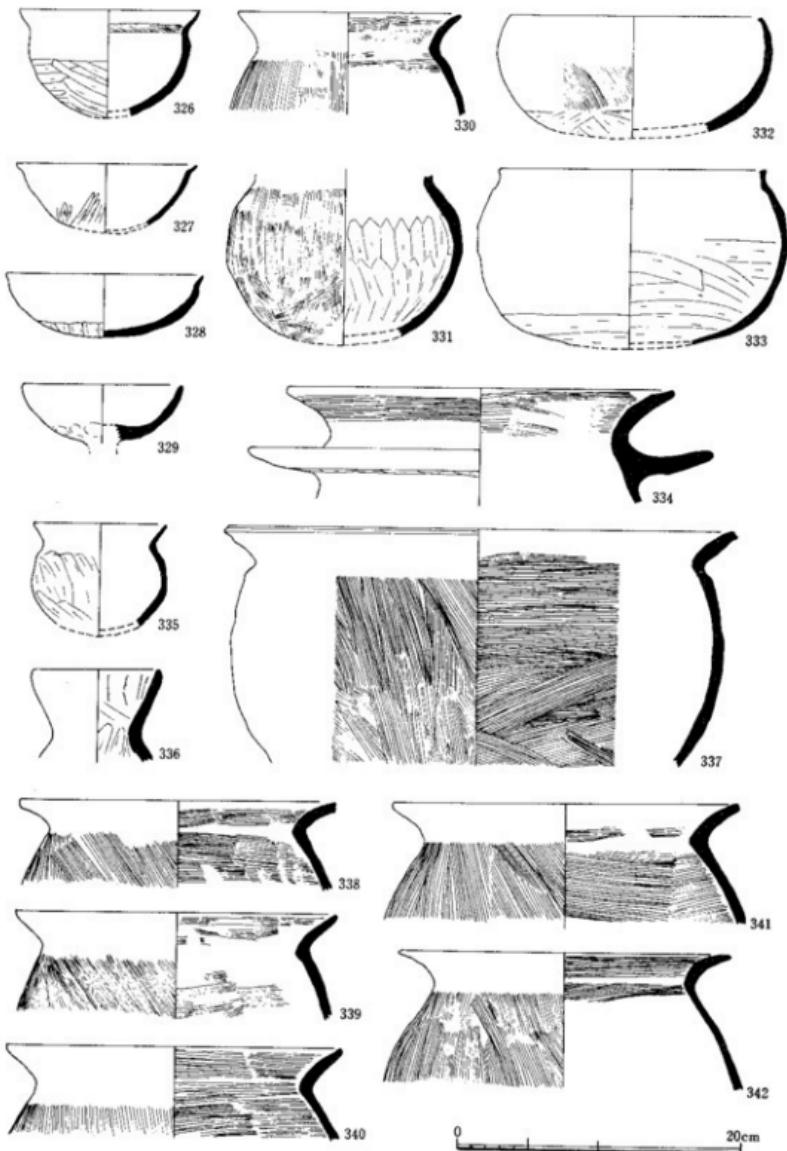


図-23 B区 C層出土遺物

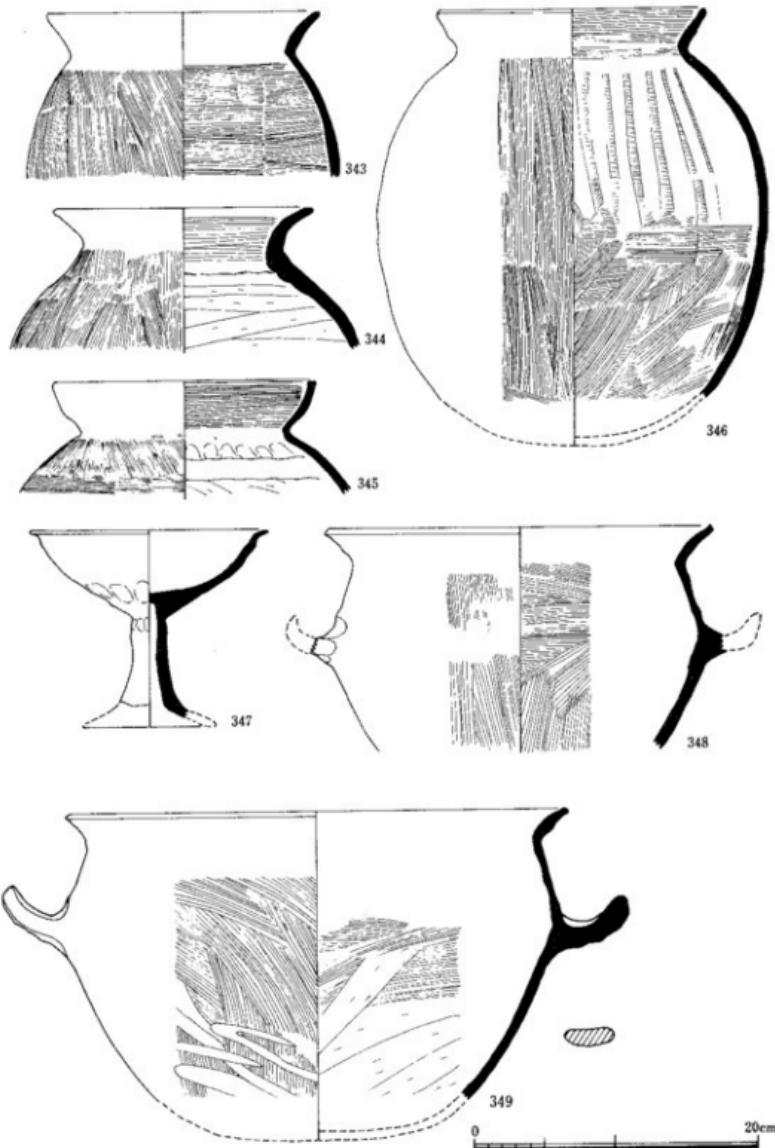


図-24 B区 C層出土遺物

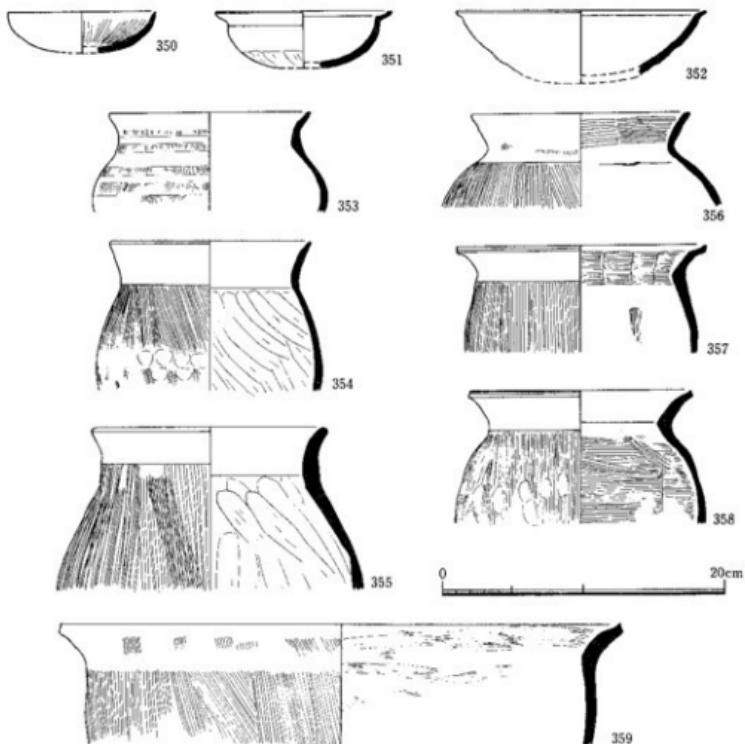


図-25 B区 包含層出土遺物

C層 須恵器は、杯、高杯、壺、甕がある。杯蓋は、明瞭な棱が付くものが大半を占め、わずかに形骸化したものがある。後者は、口縁端部の内傾する段がからうじて認められる程丸く仕上げている。杯身も蓋と同様の傾向を示す。高杯、甕には、ややシャープな感じの凸線がみられこの間に波状文が多く施されている。土師器は、杯、高杯、壺、甕、鉢、鍋、土釜がある。調整方法は、ハケ目とヘラ削りが多用されるが、杯や鉢、小型の壺は、板ナデによって表面を密にナデて仕上げる。

包含層 土師器は、杯、壺、甕、鍋がある。杯は、内面に放射状暗文を施すものと施さないものがある。後者は、口縁端部が外側に屈曲し、内面は板ナデ調整をする。板ナデの始まりは板当痕のがこりわざかな段が付いている。壺は、口縁端部を丸くおさめるものが多く、体部の調整は、外面をハケ目調整、内面を板ナデとヘラ削り調整を行なう。甕及び鍋については内外面をハケ目調整するものが多い。

3. C区出土遺物

A層 須恵器は、杯身がある。たちあがりは短く直立する。底部は回転ヘラ削りを行なう。土師器は、高杯、蓋、土釜がある。高杯は、杯部は大きく外反し、口縁端部にわずかな沈線がまわる。内底面にハケ目がみられる。長頸壺は、頸部及び体部外面にヘラ磨きが施されている。広口壺には、外面をヨコナデしたものとハケ目を施したものがある。

B層 須恵器は、杯、高杯、平瓶、器台、壺、甕等がある。杯は、口縁端部が内傾する明瞭な段を有するものと丸く終るものがある。154は、底部を回転ヘラ切りしており、新らしい要素を持つものである。高杯は、脚部だけが遺存している。短脚で、長方形の三ないし四方透し窓を持つ。前者は、138の杯と後者は、148の杯と対応する。平瓶は、小型のものである。口縁端部のみ欠損する。器台は、くずれた波状文帯を多く使用する。端部は丸い。甕は平行叩きを施すものが多い。土師器は、杯、壺、甕、甌等がある。杯は、内外面を板ナデし底部をヘラ削りする。直口壺は、368は369よりやや古相を示す。甕の口縁端部は、内傾する段又は平面又は水平な平担面を持つかコの字状に終るものが多い。鉢は、外面ハケ目後ヘラ磨きを施している。

溝—2 B層出土遺物よりやや古くなるが、時期的にそれ程の差は見られない。須恵器杯は口縁端部が鋭い角を持つものから丸く変化する変換期にあたる。土師器では、器壁の厚い直口壺が割合多い。内面は粘土雜目が明瞭に違う。385は表面を朱塗りする。

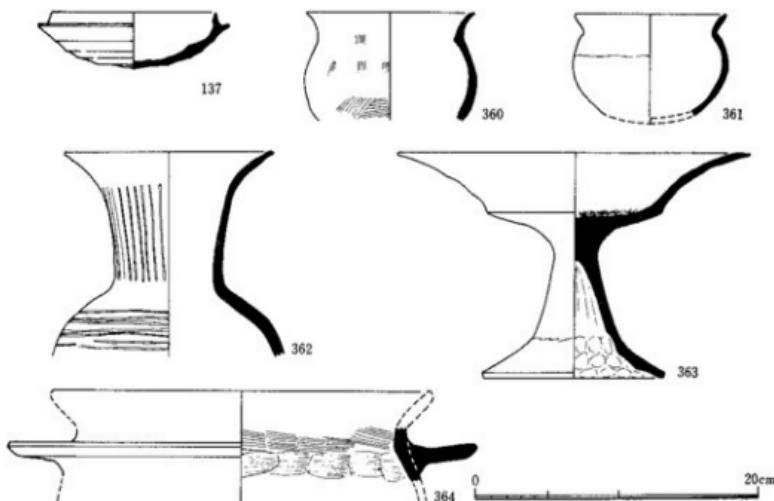
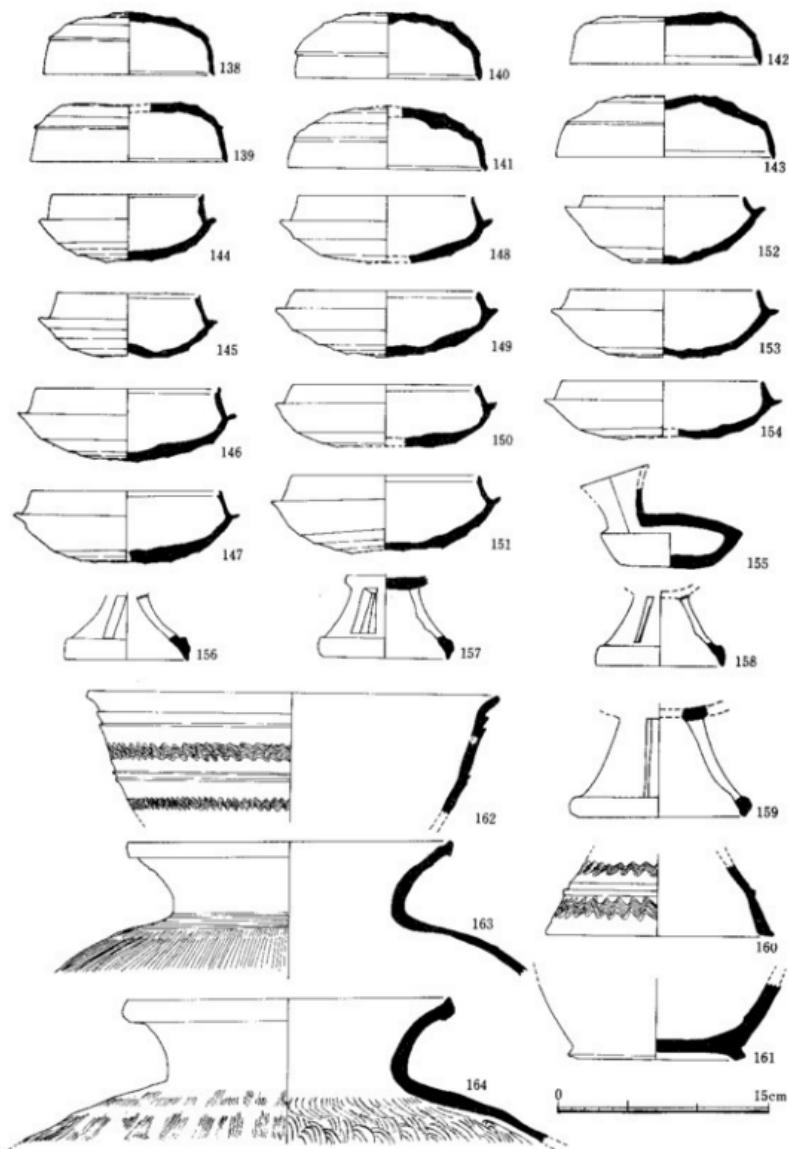


図-26 C区 A層出土遺物



図一27 C区 B層出土遺物

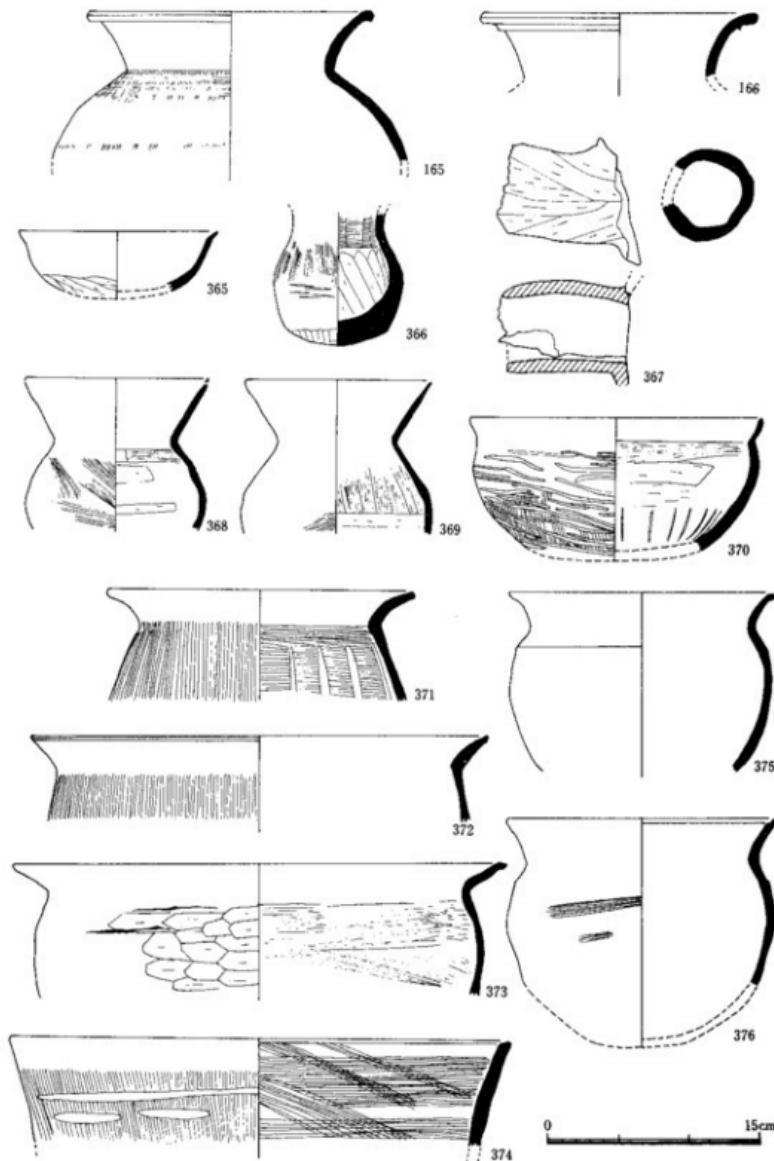


図-28 C区 B層出土遺物

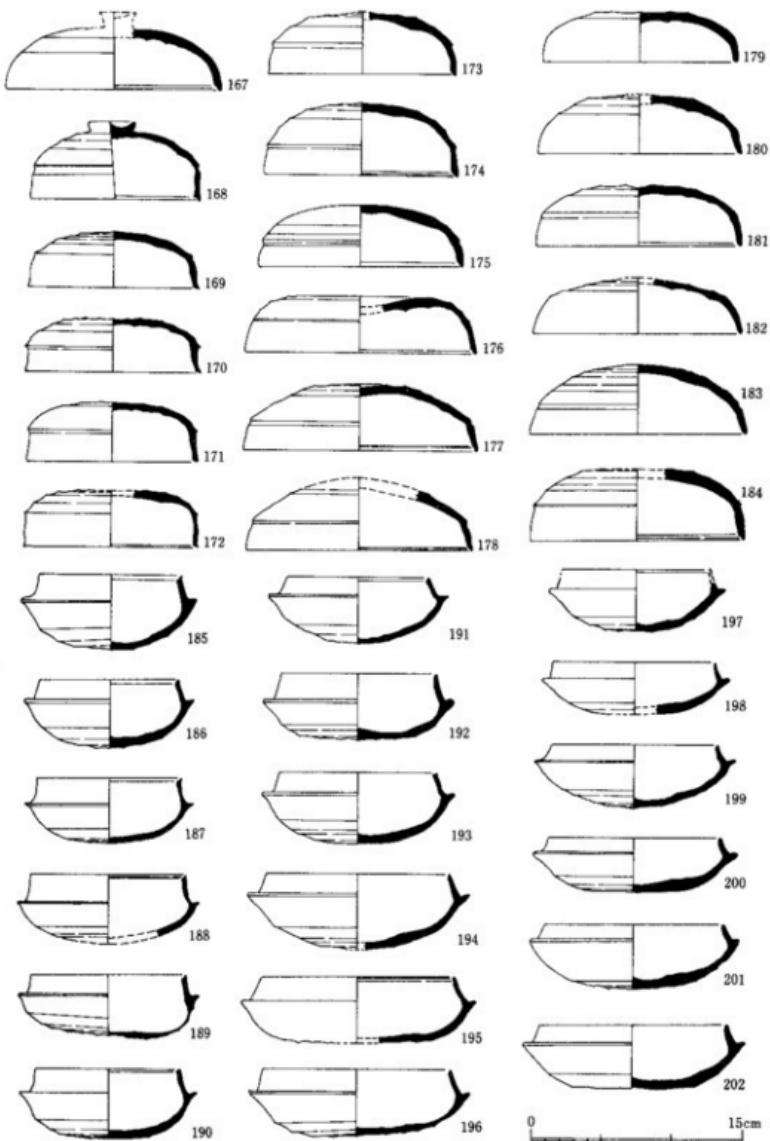


図-29 C区 溝-2 出土遺物

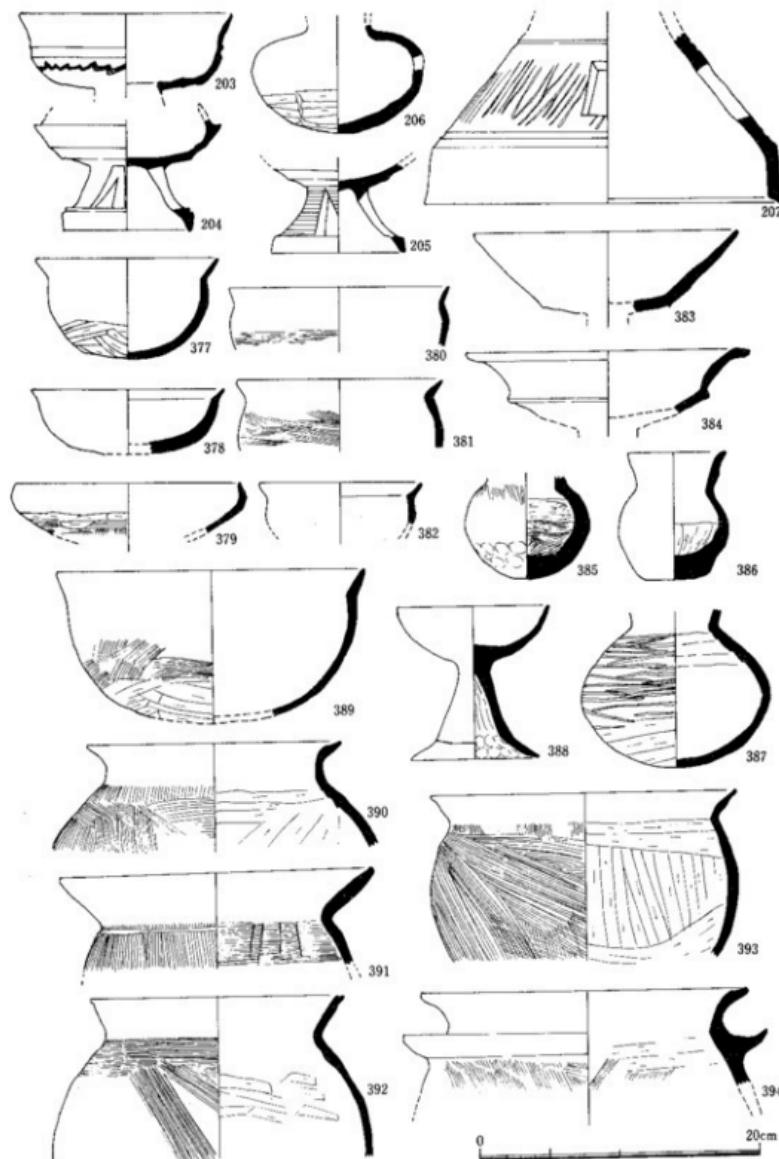


図-30 C区 溝-2出土遺物

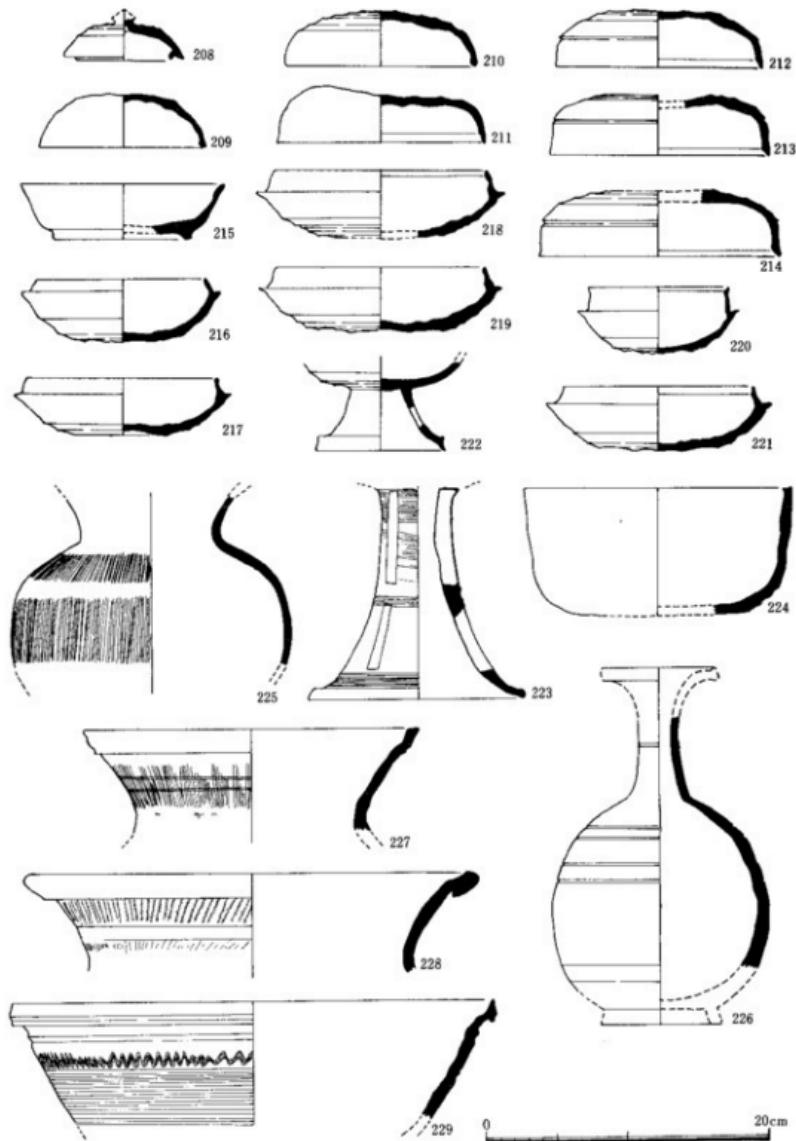


図-31 C区 包含層出土遺物

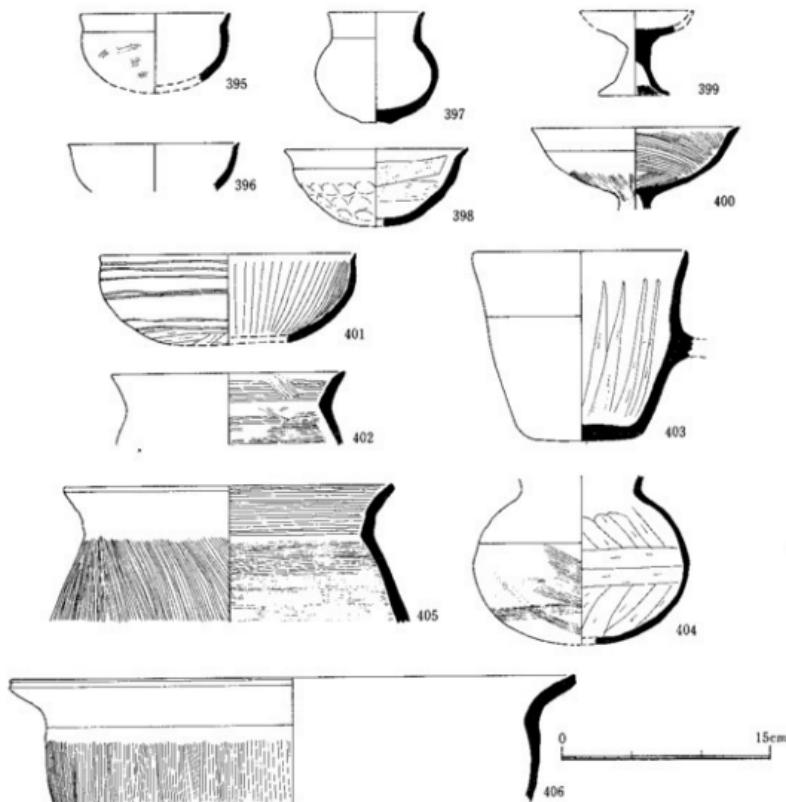


図-32 C区 包含層出土遺物

包含層 土師器は、杯、高杯、壺、鉢、把手付鉢、甕、鍋がある。杯は、口縁端部が短く外反し、内傾する平面を持つ。内面は板ナデ調整によってきれいに仕上げるが、外面は粗面である。高杯は、小型の手捏ねのものの中型の椀状の杯部を持つものがある。前者の脚部内面には布目压痕がみられる。後者は、内面及び外底面をハケ目調整する。397の壺は、底部はわずかに平底である。胎土は生駒西麓産のもので弥生土器かもしれない。404の壺体部は、内面は荒いヘラ削りによって器壁を薄く仕上げ、外面はハケ目とヨコナデによって密な表面調整を施す。甕は、主にハケ目調整を行なう。

4. D区出土遺物

須恵器と土師器が少量出土した。A～C区の出土遺物と同様の遺物が多い。その中で、須恵器の杯蓋身は、須恵器出現の初期に属するものである。蓋は、口縁部外面に波状文を施こし、天井部は手持ちのヘラ削りである。内面はカキ目調整を施す。身は、受部下方に杯と同様に、波状文を施す。不整方向のヘラ削りとカキ目調整がある。両方共に器壁が厚く重量感がある。胎土は、砂粒が非常に少ない精良な粘土を使用し、色調は、灰青色を呈する。

5. 井戸一1出土遺物

C—4区北側から検出した石組みの井戸の埋土から多量の遺物が出土した。若干の説明を加えたい。遺物の取り上げは、上層から約15～40cmを単位に第1～10層に分層した。1層を上層とし、2～4層までを中層、5～10層までを下層とする。

須恵器232は、体部から底部にかけての壺である。外面は格子叩き、内面は同心円文叩きを施す。233は、口縁部が外反し、端部は外下方へ屈曲する。7世紀初頭のもので、この他に横瓶の把手が形骸化したものが2点出土している。235、236は、広口壺の口縁部であろう。235は、端部を上方につまみあげておさめる。236は、水平方向に伸び先は尖がる形状である。237は、杯蓋である。端部は丸く、稜はほとんど退化しきられない。238は、杯身で、たちあがりは短く内傾し、受部は水平に伸びる。やや細片であるが、237とセット関係をもつものと考えられる。以上が下層出土須恵器である。7世紀前半に含まれるものであろう。

239は、壺の口縁で、わずかに外反し、口縁端部は断面三角形を呈し、体部外面に3条の凸帯がめぐる。241は、横瓶の体部である。長径23.1cmを測る大型品である。242と243は、広口壺である。端部は大きく外反し、外下方に短く伸び再び上方へ折曲げる。体部には回転ヘラ削りを施す。底部には小さな方形の高台が付く。以上が中層出土須恵器である。

上層から出土した須恵器は、割合多く時期も古いものから新らしいものまでが混合している。244から250までは、杯蓋身である。口縁端部が内傾する段又は平面を持ち、稜も比較的鋭く丁寧な造りのものと中層出土の237と238と同形態のものがある。これらは、5世紀後半期のものと7世紀初頭のものである。251は直口壺で、口縁は直立し、端部はやや丸く内傾する面を持つ。体部には波状文を施す。底部はヘラ切りにより、その端部をヘラ削りしている。253は双耳壺である。焼成はやや軟質で白灰色を呈する。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸い。最大腹径よりやや下方に双耳が付く。この双耳が付く場所にはカキ目が施されている。これより下方は回転ヘラ削り調整を行なう。高台はしっかりと外ふんばりである。254と256は、広口壺である。口縁部は、242と同一形態のものである。

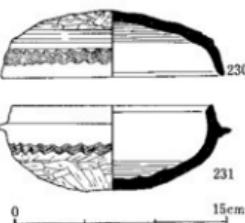


図-33 D区出土遺物

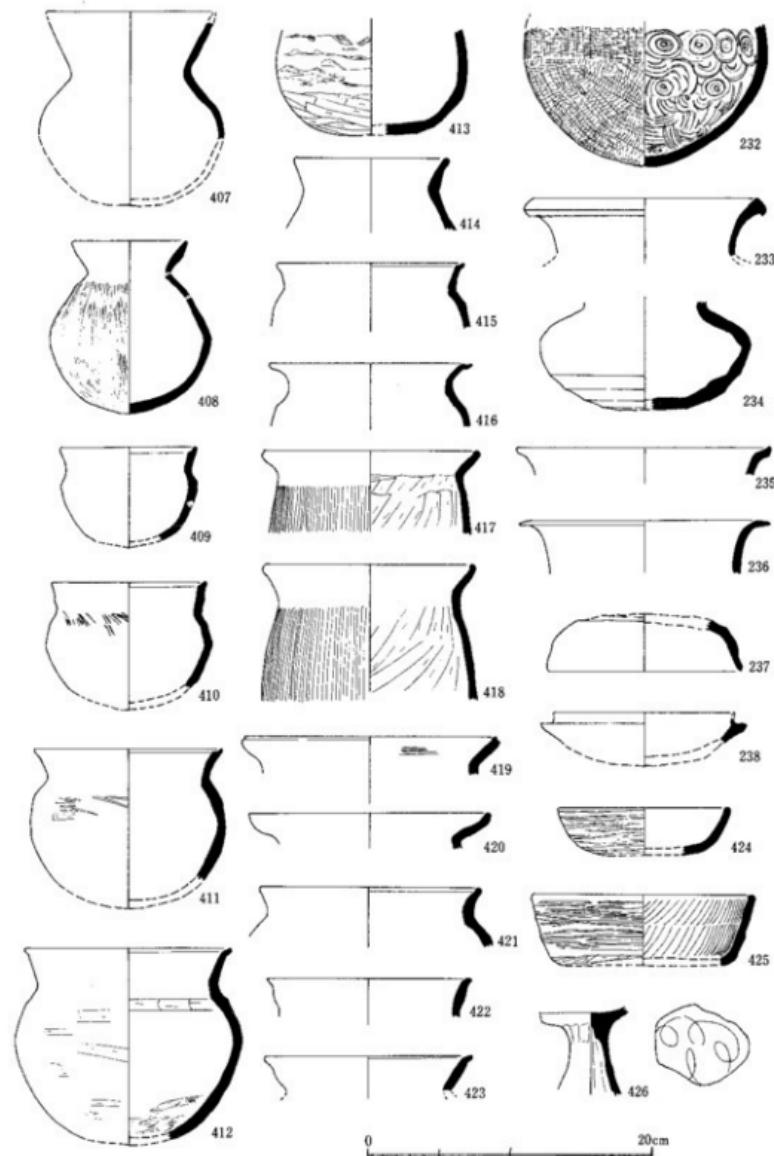


図-34 井戸下層出土遺物

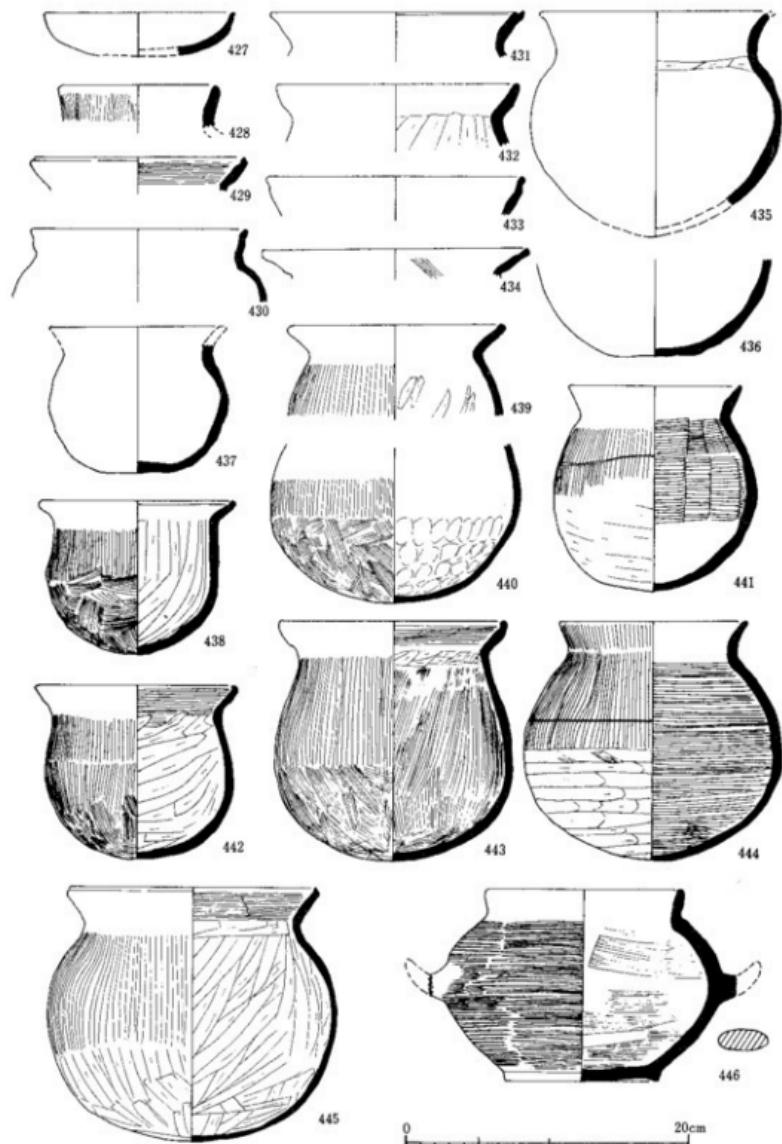


図-35 井戸1 中層出土遺物

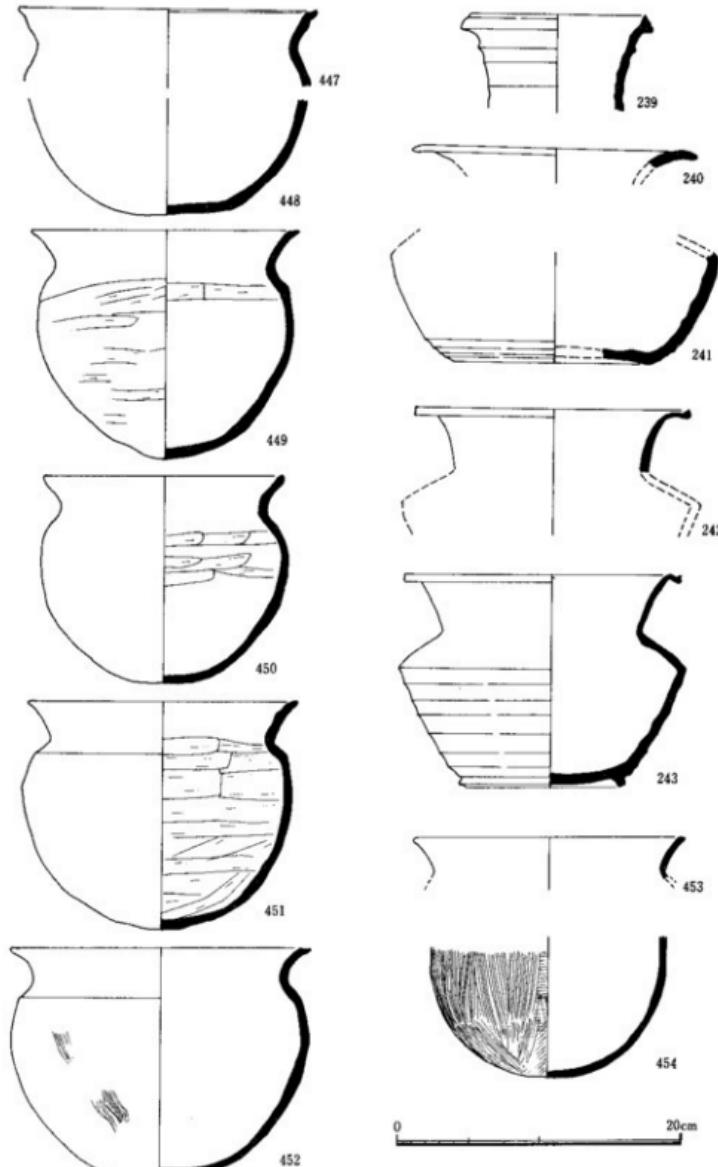


図-36 井戸1 中層出土遺物

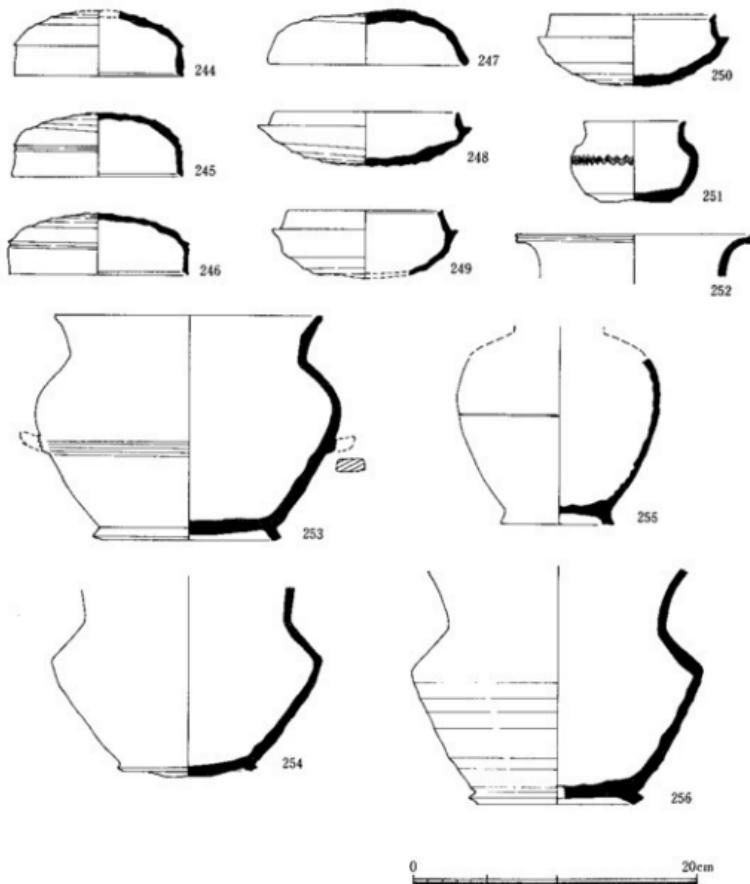


図-37 井戸一上層出土遺物

土師器 407は、外方へ真直ぐ伸びる口縁部を持つ壺である。体部上半部はナデ調整で、下半はヘラ削りである。体部内面下半もヘラ削りを行なう。色調は、明茶灰色で、胎土は、金雲母をわずかに含む精良な粘土を使用している。413は、平底気味の底部を持つ壺の下半部である。色調や胎土は407と同様である。調整は、体部外面を上方よりタテハケ目とヨコハケ目後ヘラ磨きを行ない、下半はヘラ削り調整である。内面は板ナデによってきれいにならる。

408は、壺である。口縁部は短かく外上方に立ちあがり、端部は丸くおさめる。体部は扁球形を成す。体部外面の調整は、上半はタテハケ目、下半は上半のハケ目より荒い原体のものを

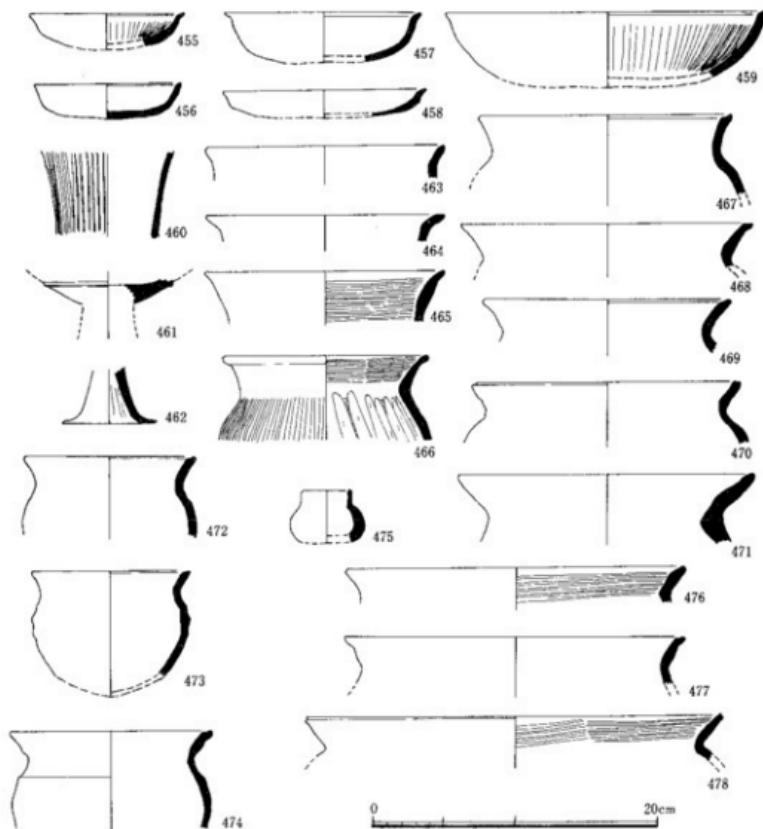


図-38 井戸一-1 上層出土遺物

使用し、方向も一定しなく重複して交差させている。内面は、板ナデにより、下半は指揮え痕が顕著に付いている。色調は、茶灰色を呈し、微砂粒を含む。409～412は、壺である。口縁は直立気味に立ちあがり、端部はわずかに外反し内傾する段又は平面を持つ。口径は、やや小さく、9.4～14.4cmまでを測る。底部は平底気味になると思われる。内面は板ナデによりきれいに仕上げる。412の内面口縁部下付近にヘラ削りを行なう。この種の壺は、ナデを主体とし、指揮え、布目痕、わずかなヘラ磨きの痕跡をこす。しかし、外面は粗面であるものが多い。

甕には各種のものがある。414は、外上方へ真直ぐ伸び端部は丸く終るもの、外上方に伸びるが内湾し内側へ折れ曲げるものの（417、418）、端部外面に沈線が入るもの（419）等がある。内湾する口縁を持つ甕の体部は、外面ハケ目、内面ヘラ削り調整を施こす。

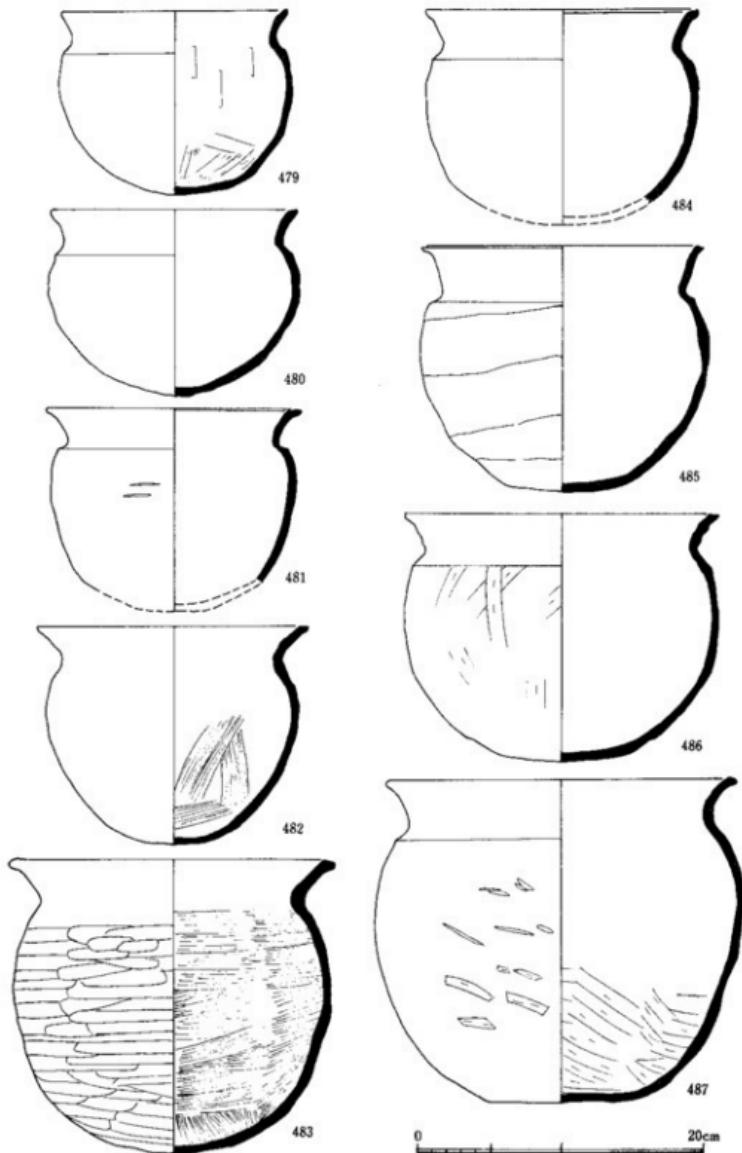


図-39 井戸-1 上層出土遺物

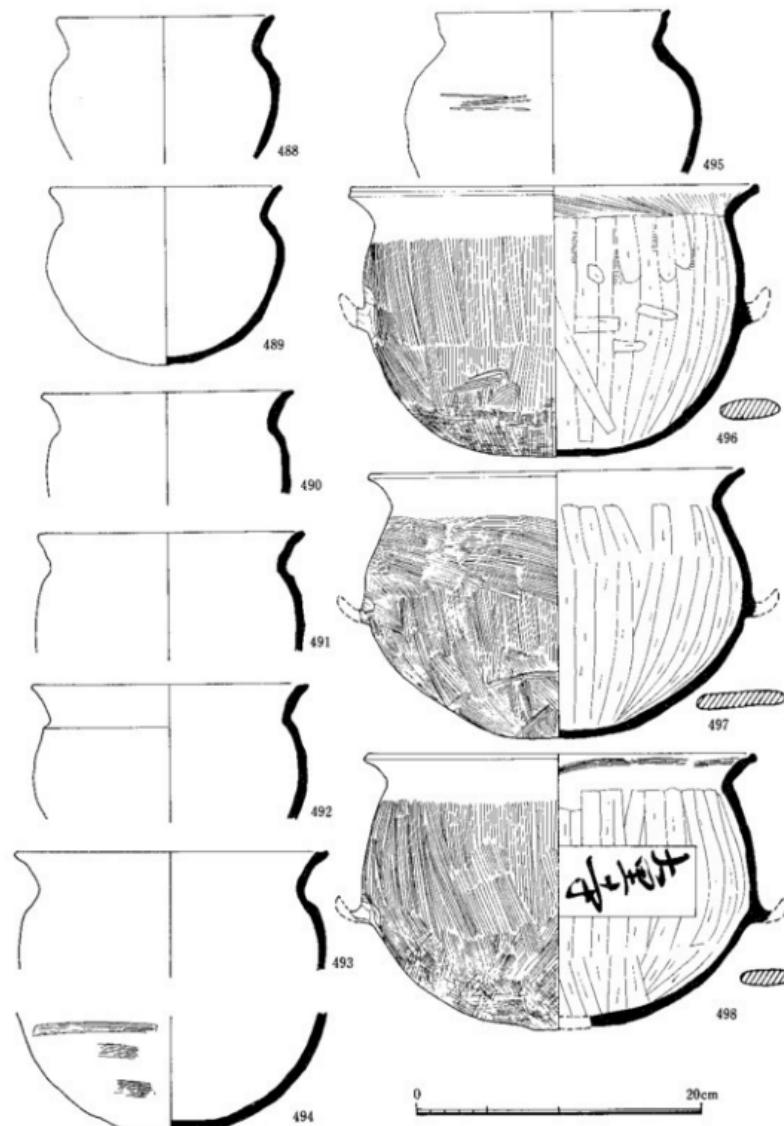


図-40 井戸一 1 上層出土遺物

杯には、424と425の2点があり、前者は、外面に密なヘラ磨きを施こし、底部はヘラ削りを施こす。内面は暗文がみられず、板ナデ調整である。後者は、内面に2段の放射状暗文を施こす。口縁端部はわずかに内側に屈曲する。426は、高杯の破片である。杯部内底面に螺旋状暗文がみられる。以上が下層出土の土師器である。

中層から出土した遺物は、壺と甕が大部分を占め、その器種構成は単純である。その他の器種として杯が1点あるのみである。杯（427）はやや扁平な形のもので、内面をナデ調整、外側を板ナデ調整する。色調は、茶灰色で、胎土は、白色微砂粒を少し含み、金雲母、くさり礫が混入している。壺は3点ある。直立気味の口縁部を持つ430と437は、底部が平底である。内面を板ナデ調整する。外面は粗面である。もう1点は、把手付壺である。口縁は短かく直立し、端部は水平の平坦面を持つ。肩の張りはあまり強くなく、器高の中程の腹径が一番大きくその両端に把手を付ける。体部は横方向に長軸を持つ橢円形を呈する。把手は外上方に内湾気味に伸びるものであろう。底部には断面三角形の小さな高台が付く。外面は密なヘラ磨きをし、内面は、ハケ目状の板ナデ調整を行なう。色調は、沈んだ感じの茶褐色を呈し、胎土は、金雲母白色砂粒を少し含むが、精良な粘土を使用したものである。全体の作りは、器壁が厚く、安定感がよく重量感のあるものである。また、長年にわたり使用された事がその摩耗の度合いからも十分見受けられる。その他のものは、小形の甕がほとんどを占める。

口縁端部は各種のものがあり、短かく真直ぐ伸びるもの、外方に内湾気味に伸びるもの、外反するもの等がある。前2者は、体部外面にハケ目調整を施こし、内面は、ハケ目又はヘラ削りである。後者は、体部外面をナデ又はヘラ削り調整をし、内面をヘラ削り又は板ナデを行なう。前2者の体部の最大腹径は、中程より下側にあり、後者のものはその上側にある。また、後者の中で、肩部にあたる部分がやや角ばるものも多い。

上層から出土した遺物は、甕、杯、高杯、壺、塙とやや器種が多くなる。しかし、その中の甕の量は大部分を占める。甕は、口縁部が内湾気味のものや真直ぐ伸びるもののが少くなり、外反する口縁のものが多くなる。前2者のものは細片が多く、口縁部のみが実測しえる程度であるが、後者は、完形に近いものが圧倒的に多い。前2者の調整は、ナデとハケ目が主体である。後者は、内面を板ナデによってきれいに仕上げる。ナデ方向はほとんどが水平方向である。外面は、ナデ調整を基調とし、ヘラ削り、指押え、板ナデによっている。しかし、外表面は凹凸が激しく粗面で、粘土織目が顕著にのこるものが多い。また、口径の大きなものには2次焼成痕がみられる（483、485、487）。

杯類は、小型のものが多く、口径は、10.5~13.8cmを測る。口縁端部はわずかに外反し、内傾する段を持つ。455のみが放射状暗文がみられる。459は、鉢である。杯と同様の口縁端部がみられ、内面に放射状暗文がみられる。高杯は、杯部と脚部がある。杯部外面に段を有するもので、内面に暗文が施こされている。脚部は小型のものである。

壺は、長頸壺、広口壺、小壺がある。460は、長頸壺の頸部である。外面にヘラ磨きを施す。472～474は広口壺である。壺の小型化したものである。形態や調整方法は壺と同様である。475は、小型壺である。口径4.7cm、器高5.3cmを測る。口縁は短く直立し、体部は扁平球で底部は平底である。外面はナデ、内面をヘラ削りする。色調は、明茶色、胎土は雲母と砂粒を少し含む。仕上げはやや雑である。

壺は3点ある。498は、短く大きく外反する口縁で、体部最大腹径の場所に把手が付く。調整は、外面の中程までタテハケ目、下半は不整方向のハケ目である。内面は、口縁部付近をハケ目をし、体部はヘラ削りである。色調は、明茶灰色、胎土は、金雲母、白色砂粒を少し含む。仕上げはやや雑である。体部には墨書きで鮮明に「大里寺」と書かれている。字の大きさ（縦×横）は、大が（ $2.6 \times 2.7\text{ cm}$ ）、里が（ $2.2 \times 2.6\text{ cm}$ ）、寺が（ $3.7 \times 4.0\text{ cm}$ ）を測る。正當位にして左下がり約 20° 横方向に書かれている。字体は、初唐の嵐を強く取り入れている行書である。その筆跡は落着いた作風である。河内六・大寺の大里寺の寺域内にあたり、その意義が大きい。この他に、A層遺物包含層から、同様の字体が記されたものが出土している。また、奈良時代後半期のものとして書道史上にも重要な資料を提供するものであろう。496、497は498よりもやや丸味を帯びた口縁を持つ。ハケ目とヘラ削りを主体とした調整を行なう。色調は灰茶色を呈し、胎土は、金雲母と微砂粒を割合多く含む。それぞれの壺は、破片が半分以上遺存している。

6. 製塙土器

A～D区のC層から多くの製塙土器が出土した。実測したものは、83点を数える。これらの造物について形態分類を行なう。分類方法は、口径と器高の大小と口縁部形態によって、I～VI類に分けた。

I類 口径と器高が復元しえる遺物において、口径4.2～4.9cm、器高6.3～7.3cmを測る。口径が器高よりも小さく、口径を器高によって割った比率は、0.58～0.72を示す。体部は、垂直又は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はそのまま垂直に伸びるものと再び内湾するものがある。底部は平底と丸底のものがある。各個体はそのまで自立に立つものが多いが、やや安定性は悪い。器壁は、2mm前後のものが最も多く、3mm以上のものはやや少ない。胎土は、金雲母を含み生駒西麓産と思われるものと砂粒をほとんど含まない精良な粘土を使用しているものがある。後者のものは器壁が薄い。色調は、前者が茶褐色ないし灰褐色を呈し、後者はピンク色又は白灰色である。それぞれ2次焼成を受け、黒色化及び赤色化気味のものが多い。調整は、内面を板ナデ、ハケ目、ナデ調整を行ない、外面は平行叩きとナデ調整である。

II類 I類と同様口径が器高よりも小さく、口径3.9～5.4cm、器高6.6～7.9cmを測る。I類と同様の比率は、0.49～0.83である。体部は、垂直のものと内湾するものがあり、口縁端部はいずれも体部からそのまま直立ぐ伸びる。底部は、平底のものが多いようである。I類よ

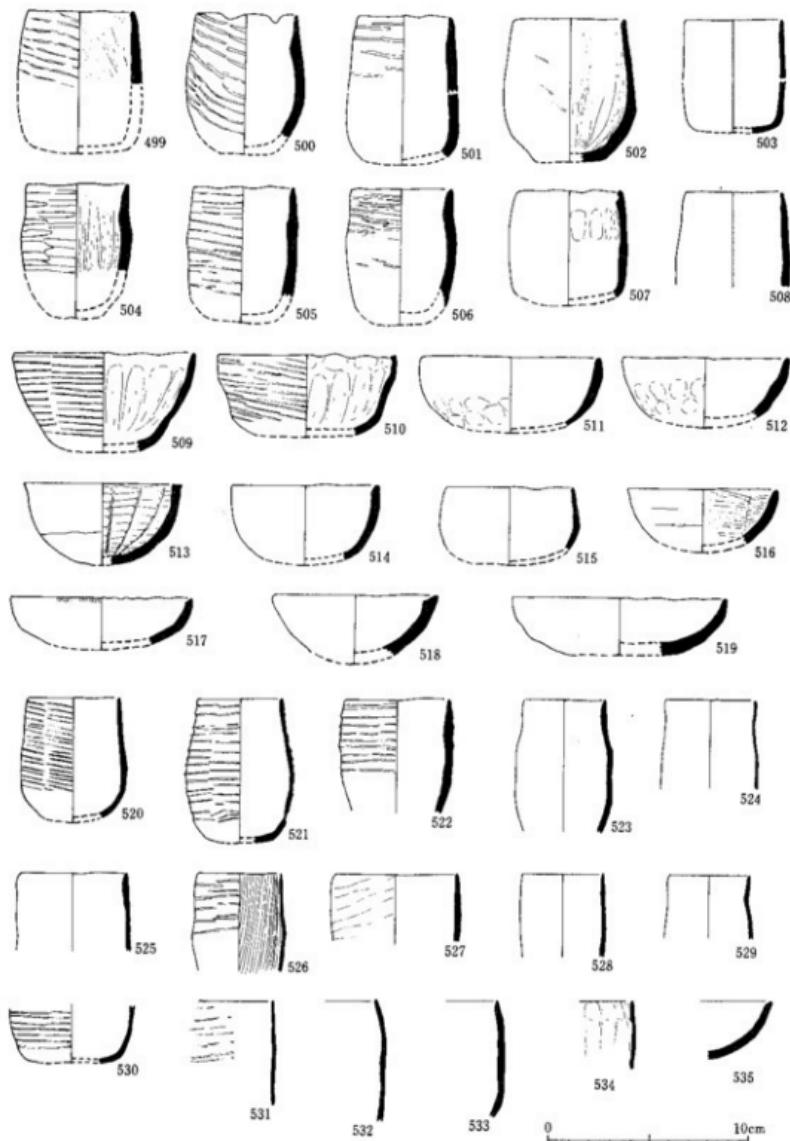


図-41 製塙土器

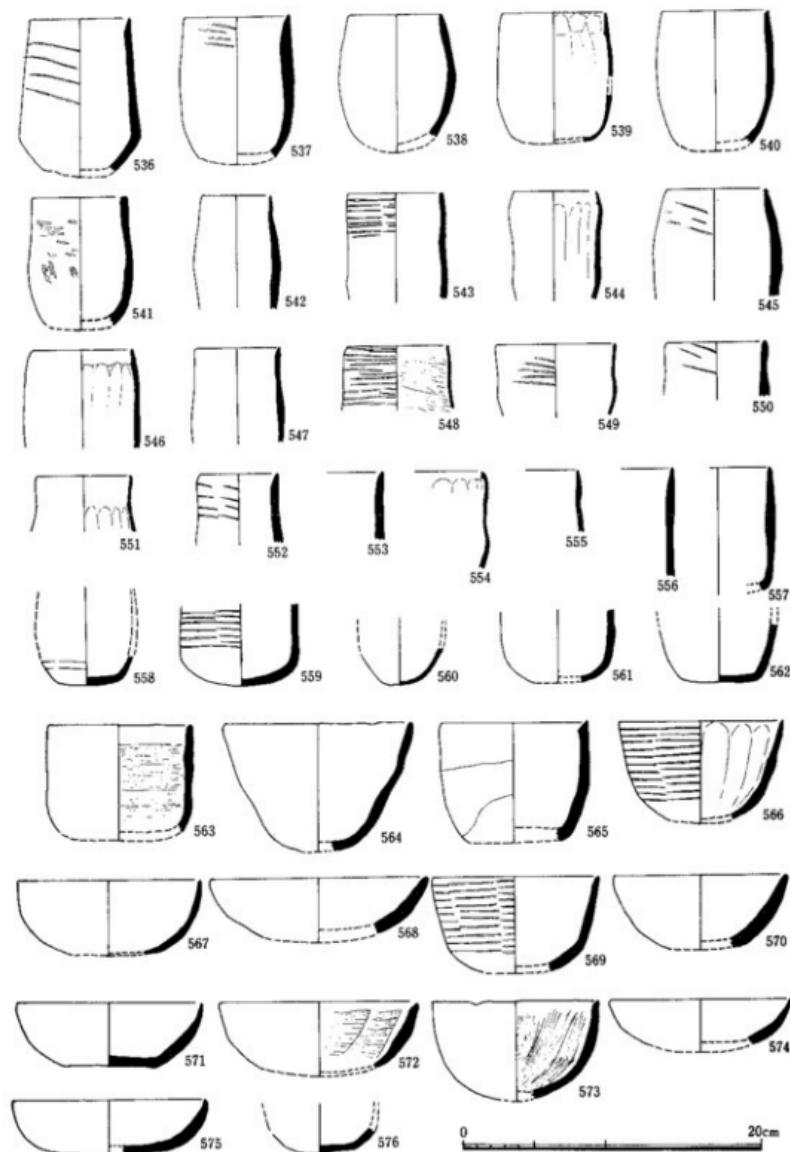


図-42 製塙土器

りも安定性はよい。器壁は、2mm位のものが少なくなり、3～5mm程度のものが多くなる。生駒西麓産の胎土のものが多くなる。その中でも砂粒を多く含むものと含まれないものがある。ピンク色ないし白灰色のものは少ない。ほとんどのものが茶褐色又は灰褐色系統である。調整は内面を板ナデとナデ調整による。外面は、平行叩き、板ナデ、ナデ調整である。平行叩きを施こした後にナデ調整をするものが多い。

III類 口径と器高が同程度の大きさであり、口径5.0～7.1cm、器高4.0～6.0cmを測る。比率は、0.86～1.55である。体部はほぼ真直ぐ伸び、口縁端部は、真直ぐか内湾気味である。底部は平底である。器壁は、2mm位のものもあるが、3～5mm位のものが多い。生駒西麓産のものがほとんどを占める。また、砂粒を多く含むものと含まれないものがある。色調は、茶褐色及び灰褐色である。調整は、内面を板ナデとナデ調整、外面を板ナデとナデ調整によっている。

IV類 口径が器高よりも大きくなり、口径7.2～9.3cm、器高4.0～6.4cmを測る。口径はIII類よりも大きくなる。比率は、1.45～2.07である。体部は、外上方に真直ぐ伸びるか内湾気味に立ち上がる。口縁端部は体部からそのまで終る。底部は、平底と丸底がある。断面形は、逆台形又は半円形を呈する。器壁は、3～4mmを測る。生駒西麓産のものと雲母を含まない精良な胎土のものがある。色調は、茶褐色と灰褐色のものと灰白色と赤橙色のものがある。調整は、内面を板ナデ、貝殻条痕、ナデ調整により、外面を平行叩きとナデ調整を行なう。

V類 口径が器高よりもさらに大きくなる。そして、さらに偏平な形となる。口径は、7.5～9.9cmと徐々に大きくなり、器高は、3.1～3.9cmを測る。体部は、内湾気味に外上方へ伸び、口縁部もそのまま終る。底部は、丸底のものとわずかに平底状を呈するものがある。器壁は、3～5mm程度である。胎土は、生駒西麓産のものを使用して、色調は、茶褐色及び灰褐色である。微砂粒を多く含むものと含まれないものがある。調整は、内面を板ナデ、ナデ調整により、外面を板ナデ、ナデ調整を行なう。比率は、2.18～3.0である。

VI類 口径は最大となり9.0～10.8cm、器高は最小となり2.6～3.2cmを測る。比率は、3.30～3.59。器形は最も偏平化したものである。体部や口縁部付近はV類と同じで、底部はほとんど平底に近く安定性がよい。器壁は、3～6mmを測る。胎土は、生駒西麓産のものを使用し、茶褐色及び灰褐色である。調整は、内面を板ナデ、ナデ調整により、外面はナデ調整を施こし、布目痕のあるものもある。

遺存の良好なものについては復元を試みた。その容量は次の通りである。（単位は、cc）

I類 520 (106) 522 (95)

II類 536 (120) 537 (110) 538 (80)

III類 565 (157)

IV類 513 (120) 566 (124) 569 (135) 573 (110)

V類 511 (95) 571 (159)

7. 弥生土器

弥生土器は、A区D層の遺物包含層から主に出土した。コンテナ整理箱2箱分を数える。出土土器は全部生駒西麓の胎土である。

577は、完形の小型高杯である。口縁端部は水平に平坦な面を持つ。表面は密なナデ調整である。579と580、581は、壺の口縁である。口縁部は、頸部から直立気味に立ち上がり外上方へ外反する。端部はそのまま角を持ち終るものとわずかに肥厚するものがある。内外面ヘラ磨きによって仕上げる。579は、頸部上方に櫛描文が施されている。583は、壺の体部である。頸部下方に櫛描文がある。胴部は、球形に近く縱に長い。肩の張りはなく、最大腹径は胴部の中程である。口径は、上述の口縁部と同様で腹径よりも小さいものと考えられる。体部は内外面ヘラ磨きによっている。

584と585は、壺口縁部である。体部から直立した後水平近くまで大きく外反する。端部は方形のまま終るかやや丸味を持つ。器壁は、壺のそれより薄く約半分位である。内外面ヘラ磨きを施すが、板ナデ状の痕跡もみられる。第Ⅱ様式に属する。

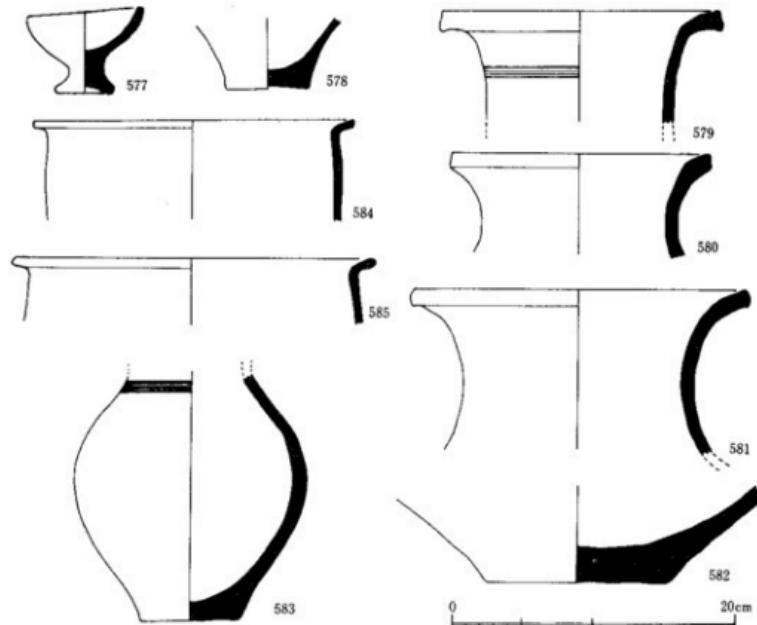


図-43 弥生土器

8. 鉄滓

鉄滓の総出土量は、重量にして、154.3 kgコンテナ整理箱9箱分である。出土場所は、量の多少はあるが全調査区から出土した。出土層位は、主にBとC層及び各遺構からである。D層からは出土しなかった。

鉄滓は、大小の破片が多量に出土した。折損したものもあるが、排棄された当時の形状を呈するものもある。大きい規模のものは、鍛冶によって炉底部出来るいわゆる椀形滓である。小さいものは、球形やレモン状の形状のものが多い。鉄の含有の多いものとやや軽量で素手によつても簡単に割る事が出来るものまである。昨年度、新日本製鉄の大澤正巳氏の化学分析によつて、鉄の含有率が65%を越えるものがあり、これと大差なく同種のものである。

1. 長径3.2～7.1cm 短径3.0～5.6cm 重量 0～100g

2. 長径6.9～9.9cm 短径5.0～8.2cm 重量 100～400g

3. 長径9.0～12.6cm 短径7.3～10.7cm 重量 400～1000g

4. 長径13.5～17.0cm 短径7.0～11.2cm 重量 1000～2000g

9. 輪羽口

輪羽口は、コンテナ箱5箱分出土した。破損したものが多く、両端部分も完存しているものは少量である。出土地点と出土層位は、鉄滓のそれと比例するようである。

形態は2分類出来る。I類は、「八」の字形に先端がすぼまる形態のものである。この形態のものは、先端部分だけが欠損するだけで全体がよく遺存しているものが多い。II類は、円筒形の両端部がほぼ同一太さのものである。I・II類共に周辺の粘土を使用しており、金雲母と砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。先端部分は溶着金属が付着し、炉の内側に出ていた事がわかる。それより下方は、高熱を受け須恵質の灰青色に変色している。I類は共伴須恵器から5世紀中頃から6世紀頃、II類は、6世紀後半以降から7世紀頃と考えられる。輪羽口の形態変化は、鍛冶炉の構造変化を示すものと考えられる。

10. 砥石

砥石は、総数38個出土した。出土地点、出土層位は鉄滓のそれと同じである。どの砥石もよく使い込まれたものであり、半截されたものが多い。石材は、砂岩、花崗岩、流紋岩があり、石材によって、鉄器の研磨する段階があったと思われる。荒砥は、砂岩、花崗岩、中砥は、砂岩、安山岩、仕上砥は、流紋岩である。砥石面は、4面、5面、6面のものが主流を占め、多いものは、11面まである。安山岩製の砥石は、遺物自体大きい砥石が多く、砂岩や流紋岩の砥石は割合小さい砥石である。小さい砥石は、よく使用され、中央部が細くなつた部分で折損している。砥石面は研ぐ方向に湾曲しているものが多く、研ぐ際に生じたと思われる傷も多数みられる。研ぐ対象物は不明であるが、砥石面が直線的なものが多い事からみて、長方形の形状をした鉄器であった可能性が強い。

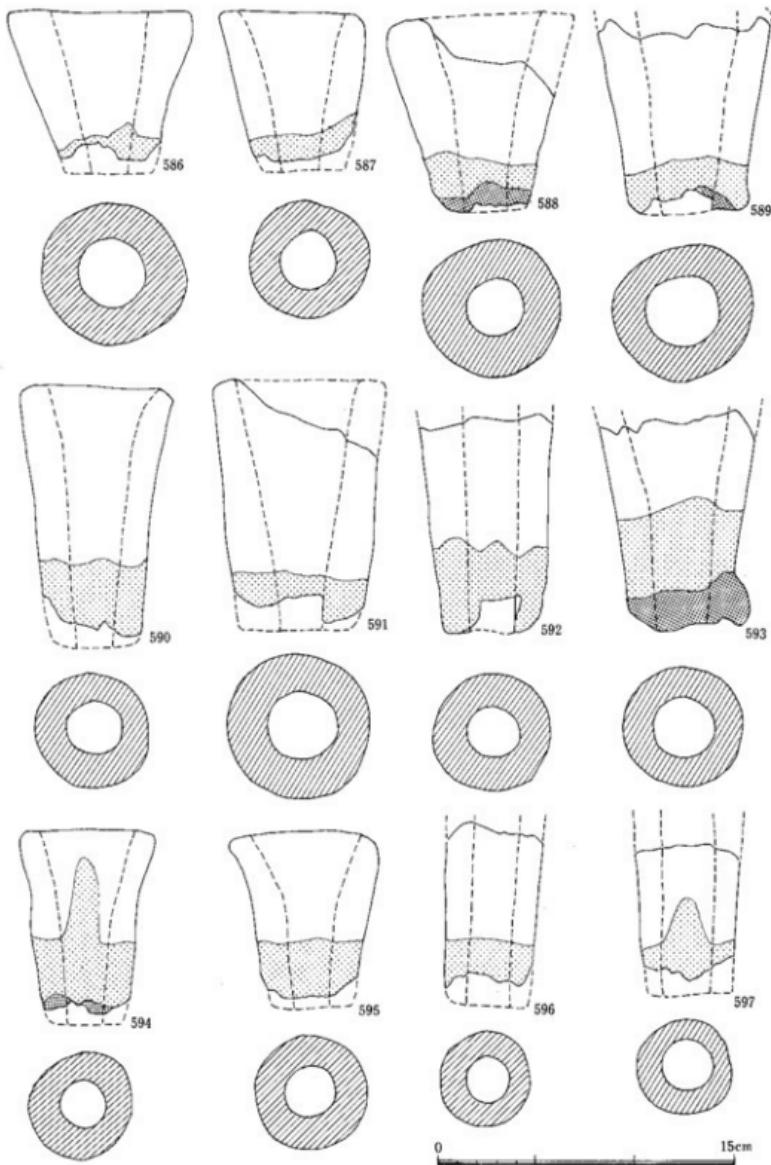


図-44 輸羽口

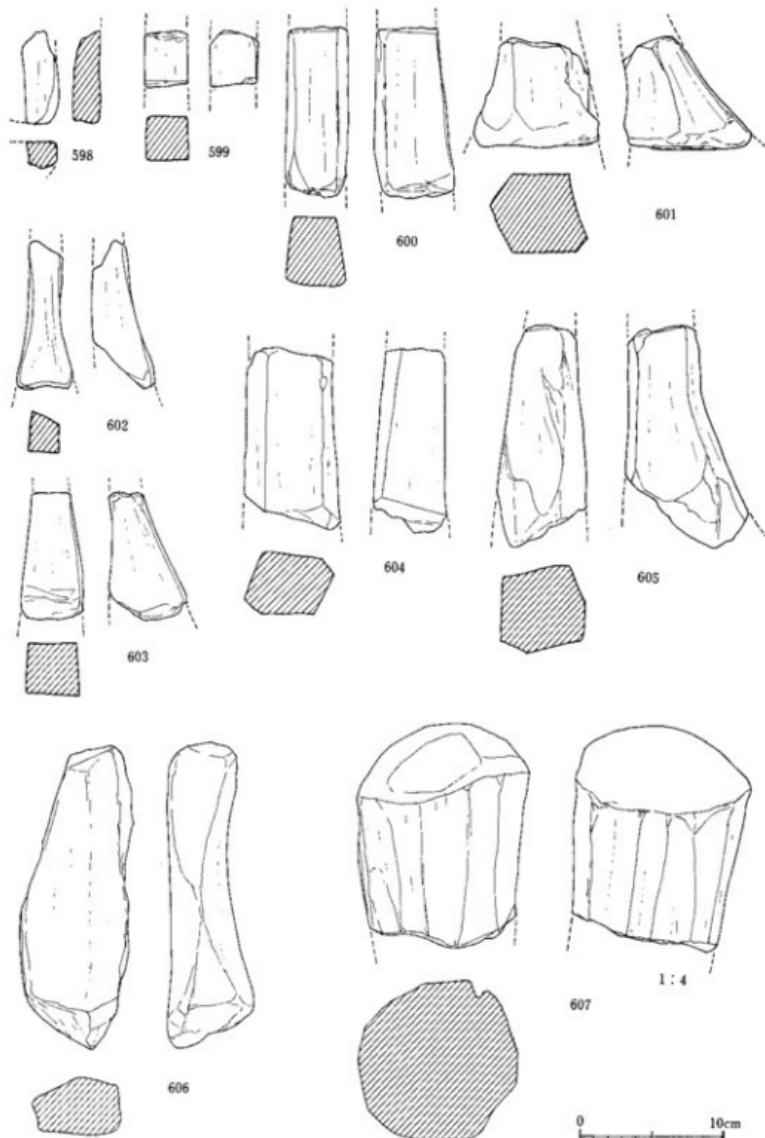


図-45 石

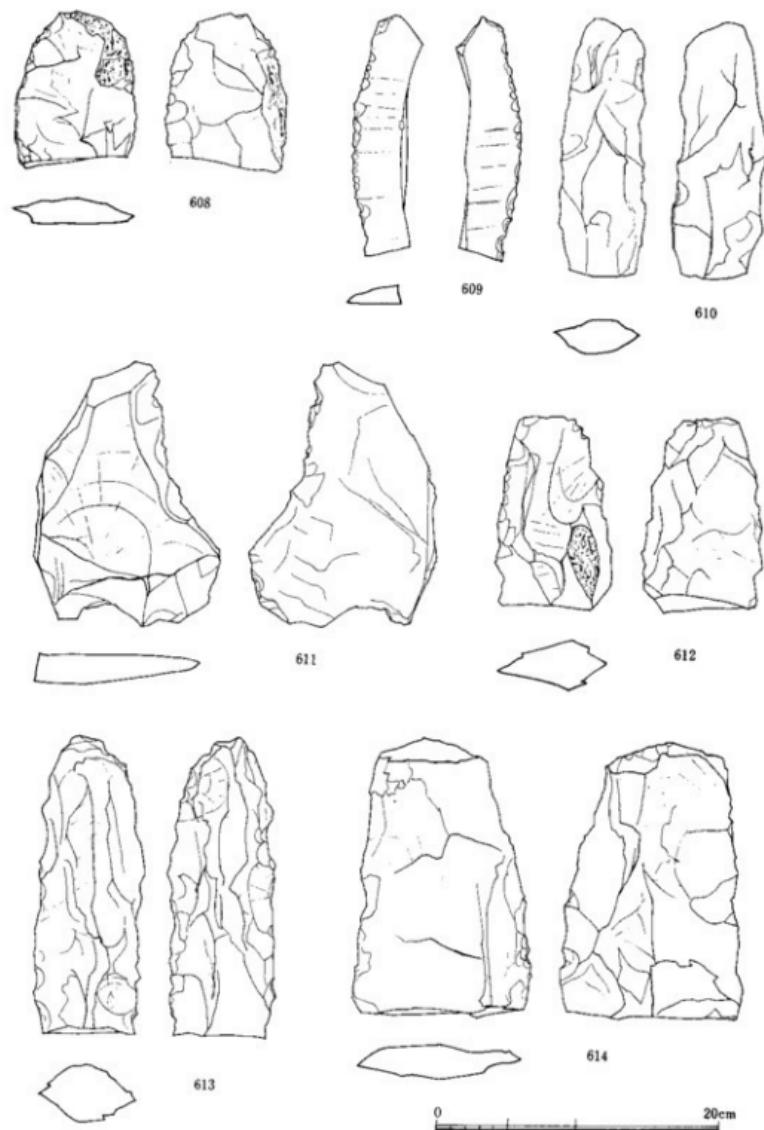


図-46 石器

11. 石器

サヌカイト製の石器が弥生時代の包含層から出土した。割合多量の剝片や石核が出土しており、製品が少ない。製作途中で製品になり得ない剝片が遺棄されたものと考えられる。若干の説明を加えたい。608は、石槍又は石刃の先端部分である。先端には一部自然面を残す。609は、横長剝片で湾曲した片方に細い刃をつけている。唯一の製品に近いものである。610は、綫長剝片の石槍の未製品である。細かい調整ではなく、大剝離をよくのこし、ほぼ石槍の形態に近い。611は、石刃である。部分的に簡単な刃を付けている。612は、石槍の未製品である。両端部が欠損し、一部自然面をのこしている。製作途上で折損した為遺棄されたのであろう。613は、石槍の未製品である。ほぼ概形は出来上がっているが、細部の調整が行なわれていない。製作途中で欠損したためだろうか。614は、石刃である。両端は部分的な刃を付けている。これらの石器は、共伴遺物から時期は第Ⅱ様式に属する。

12. 瓦

軒丸瓦が2点、軒平瓦が1点出土した。615は、単弁16葉蓮花軒丸瓦である。中房は欠損し、蓮子数は不明であるが、中房径は割合大きいものである。各子葉を包み込むように凸線が囲む。色調は、黄茶色を呈し、やや軟質の焼成である。胎土は、金雲母とくさり礫を含み、白色砂粒を割合多く含む。内区と外区の境に細い1本の園線が巡る。外区は素縁でやや高い。復元径16.3cm。616は、単弁7弁蓮花文軒丸瓦である。これも中房が欠損している。これまでの出土例から、割合小さい中房であり、蓮子は、1+4である。蓮弁はやや細長で内部に小さな子葉がみられる。外区は、3重巻である。色調は、青灰色。胎土は、金雲母と白色砂粒を多く含み、須恵質のものである。この同形式のものは、当寺院南側300mにある山下寺から出土している。617は、均整唐草文軒平瓦である。外区の下方には連珠がみられる。色調は、灰色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質である。

13. 木器

木器は、溝一、2及び井戸一より出土している。618~621は、小破の木切れに刃物痕が顕著にみられる。622は杭である。丸木を裁断し、一方を尖らしている。623は完形品である。625は、上面を断面台形状に削り、下面を丸く仕上げた不明木器で、切断した端部から約5cmのところに上面から円柱の穴を穿つ。穴は下面まで抜けない。626~628は、曲物の破片である。629は、B区C層から出土した用途不明木器の完形品である。形状は、細長のハゴ板状を呈する。板内には、縦横に3列の方形穴が9個穿たれている。把手付近に円孔があり、把手中央と端部に方形孔が2穴ある。全長18.7cm、630は、井戸一出土。釈状の完形品である。端は、約1cmの間は斜方向に削られ、他端に近い場所に1穴があけられている。631、632は、先端を尖らした加工木である。前者は井戸一、後者はB区C層より出土した。634、635は田舟の折損部である。前者はC区溝一2下層、後者はB区C層出土。

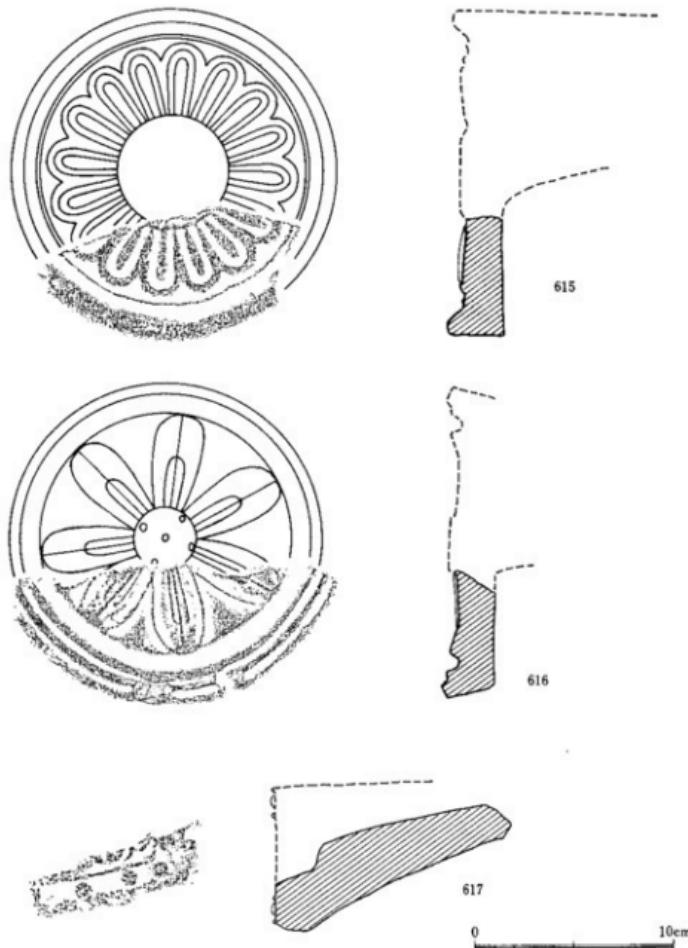


図-47 瓦

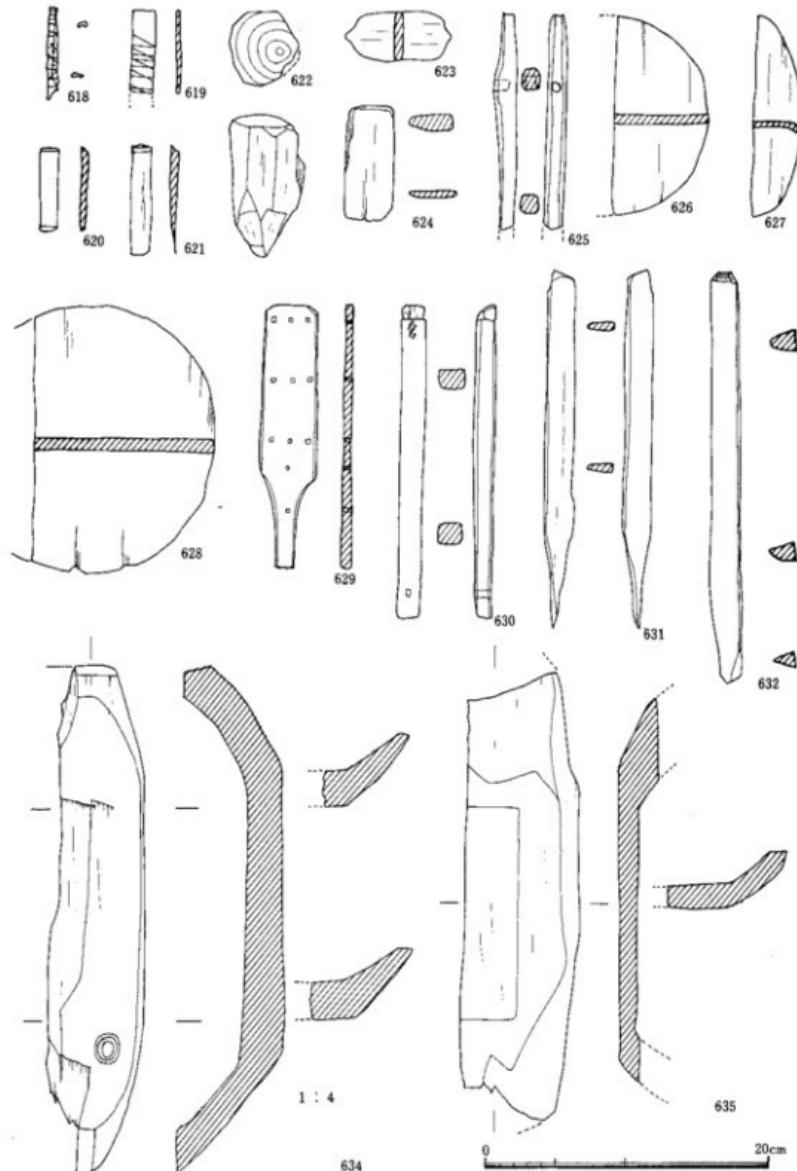


図-48 木器

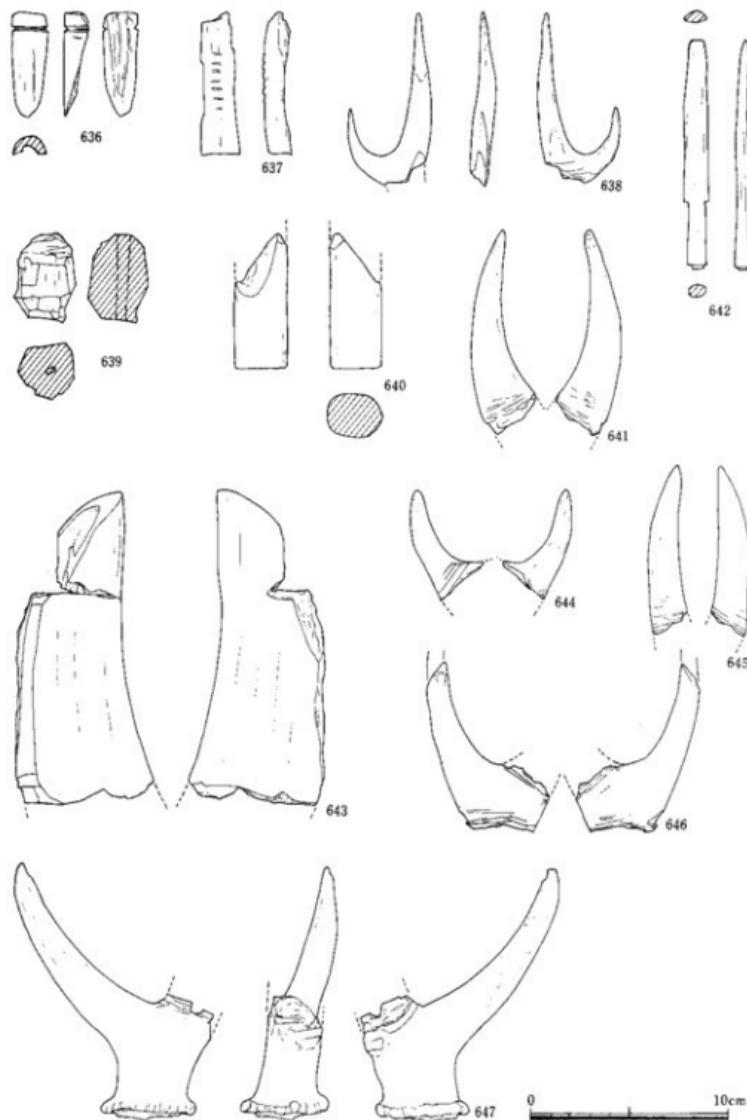


図-49 獣骨

14. 獣骨

各調査区から多量の獣骨が出土した。その中のほとんどのものが馬の骨である。四肢骨や骨格、頭骨がある。これらの骨は、各遺構や包含層中に土器類と共に排棄された状態のもので、まとまりのある出土ではない。しかし、保存状態がよく遺存している。今回の報告は、その骨の中で人為的な加工痕をとどめる骨について弱干の説明を加えたい。

636は、棒状の加工骨で、先端を平担に削りそのや下方に1条の沈線を入れる。637は、鋸によったと思われる刃跡が付いている。638、641、644～647は、鹿の角である。刀子状のもので5～7方向からの削り痕がある。角が分岐する場所を何らかの道具に使用したらしくその残りの遺棄分である。639は、その削り取られた部分である。両端を鋭利な刃物で削り取ったものである。どのような用途のものかは不明である。640は、円筒状のもので一端を切断し丁寧に調整している。642は、刀子状の形状をした完形品である。643は、鋭利な刃物による切断痕が遺る。

15. 桃核

今回の調査において特に目付いた種子に桃の種子がある。大溝の埋土や井戸ー1から出土した。総数83ヶを検出し、完形41ヶ、半分17ヶ、かじり癌のあるもの25ヶである。井戸出土の種子については、出土層位ごとに若干の相違がみられる。出土したのは、上下層まんべんなく出土し、1層(1ヶ)、4層(9ヶ)、5層(27ヶ)、6層(7ヶ)、8層(16ヶ)、9層(2ヶ)合計62個を数える。大きさの比較を試みた。9、8層出土の種子は、小さい部類から大きい部類に変化する。7層では出土せず、何らかの断絶が生じたと考えられる。6～4層出土の種子は、それぞれの長さや幅は同様の範囲内に含まれるが、大きくなる傾向を示す。

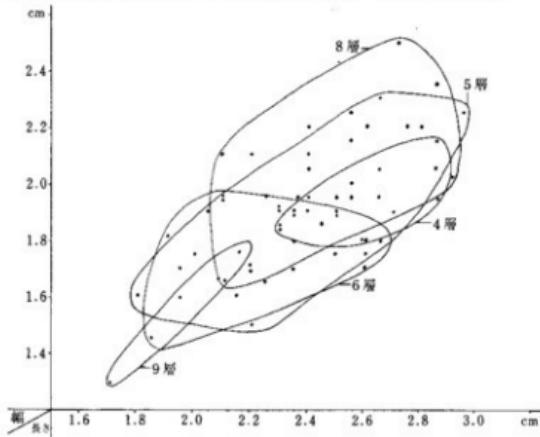


表-1 井戸ー1出土桃核

番号	層位	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	番号	層位	長さ	幅	厚さ	長さ/幅
1	9層	2.15	1.75	1.25	1.229	32	5層	2.65	1.80	1.30	1.472
2	タ	1.70	(1.30)	1.10	1.308	33	タ	2.60	1.95	1.50	1.333
3	8層	2.90	2.00	1.65	1.450	34	タ	2.60	1.80	1.35	1.444
4	タ	2.85	2.35	1.80	1.213	35	タ	2.55	2.15	1.60	1.186
5	タ	2.70	2.50	1.95	1.080	36	タ	2.55	(2.00)	1.55	1.275
6	タ	2.70	2.00	1.45	1.350	37	タ	2.55	(1.95)	1.70	1.308
7	タ	2.60	2.20	1.90	1.182	38	タ	2.50	1.95	1.55	1.282
8	タ	2.55	2.25	1.80	1.133	39	タ	2.50	1.75	1.50	1.429
9	タ	2.50	(1.90)	1.45	1.316	40	タ	2.40	2.10	1.65	1.143
10	タ	2.40	(2.20)	1.70	1.091	41	タ	2.40	1.90	1.35	1.263
11	タ	2.40	2.05	1.60	1.171	42	タ	2.35	(1.80)	1.50	1.306
12	タ	2.35	(1.95)	1.45	1.205	43	タ	2.35	1.70	1.50	1.382
13	タ	2.30	(1.90)	1.60	1.211	44	タ	2.30	1.90	1.60	1.212
14	タ	2.20	1.70	1.50	1.294	45	タ	2.25	(1.95)	1.60	1.154
15	タ	2.20	1.70	1.40	1.294	46	タ	2.25	1.65	1.25	1.364
16	タ	2.10	2.10	1.90	1.000	47	タ	2.20	(1.50)	1.30	1.467
17	タ	2.10	1.75	1.55	1.077	48	タ	2.10	1.65	1.35	1.273
18	タ	2.10	(1.65)	1.40	1.273	49	タ	2.05	(1.90)	1.70	1.079
19	6層	(2.60)	1.75	(1.40)	1.486	50	タ	1.95	(1.70)	1.50	1.147
20	タ	2.60	1.70	1.30	1.529	51	タ	1.95	(1.60)	1.45	1.219
21	タ	2.50	1.90	1.45	1.316	52	タ	1.80	(1.60)	1.40	1.125
22	タ	2.45	1.85	1.85	1.324	53	4層	2.85	(2.15)	1.75	1.326
23	タ	2.15	(1.60)	(1.45)	1.344	54	タ	2.85	1.95	1.60	1.462
24	タ	2.10	1.95	1.65	1.077	55	タ	2.65	2.05	1.60	1.293
25	タ	1.85	1.45	0.85	1.276	56	タ	2.65	1.95	1.60	1.359
26	5層	2.95	2.25	1.75	1.311	57	タ	2.60	1.80	1.35	1.444
27	タ	2.85	2.05	1.55	1.390	58	タ	2.40	1.95	1.40	1.231
28	タ	2.80	2.20	1.65	1.273	59	タ	2.35	(1.90)	1.25	1.237
29	タ	2.75	2.20	1.75	1.250	60	タ	2.30	(1.85)	1.55	1.243
30	タ	2.70	1.90	1.40	1.421	61	タ	2.30	1.85	1.45	1.243
31	タ	2.65	2.30	1.70	1.152	62	1層	2.20	(2.10)	1.65	1.048

表-1 井戸-1 出土桃核

III 大 県 南 遺 跡

83—6次調査区(岩崎谷線) (A～D区)

- 調査地所在地 柏原市大県 3丁目
- 調査担当者 北野 重
- 調査期間 昭和58年11月22日～昭和59年1月31日
- 調査面積 100 / 142.8m²

第1節 調査の概要

調査位置は、大県南遺跡の南西部の旧170号線（東高野街道）から西方に伸びた岩崎谷線の道路内である。恩智川に接した下水路の改修工事に伴なうもので、本年度で2年目にあたる。昨年度は、6世紀から8世紀にかかる遺物と13世紀代の遺物が多数出土し、弱干の遺構も検出した。本年度は、遺跡深度が少し浅くなった事から、遺構に伴なう遺物も多数出土した。恩智川寄りから東へA～D区までの4区を設定し、A・B区とC・D区の2回に分けて実施した。

A・B区の調査

両区での基本層序は、上層から、盛土、淡褐色砂土、青灰色粘土、暗青褐色粘質土、暗青灰色粘質土、暗青灰色砂質粘土がある。淡褐色砂土は、洪水状に流れ出た土層であり、A区東側で南北方向の溝を検出した。青灰色粘土は、水田の耕作土とも考えられる。B区南側で、東西方向の畦畔を検出し、溝の両側側面に道状遺構を検出した。また、A区道状遺構の西側では、同じような方向の溝を検出した。暗青灰色粘質土除去後に、B区では、土塹、ピット、溝を検出した。B区西側からA区にかけては大きな落ち込みとなっており、下層の確認まで至らなかった事から部分的に4ヶ所のつぼ掘りを実施するにとどめた。

溝-1 南北方向の溝で、A区東端で検出した。横幅1.3m、深さ1.0mを測る。埋土は、全部淡褐色砂土である。砂土は、中粒砂から粗砂が10～20cm単位に互層となって堆積している。遺物はほとんど出土しなかった。

畦畔-1 B区南端に検出した畦畔で、東西方向4.5m、幅45cm以上、高さ10～15cmを測る。土層は、茶灰色粘質土で鉱物質の無機物斑点が混入している。

道状遺構 溝-1の両側に検出した道路敷である。水田が行なわれていた時期に使用されていたものだろう。埋土は、茶褐色砂礫土と茶灰色粘質土が約10cm位堆積している。砂礫土は、3～5cmの小石が多く非常に堅く版築した状態で検出した。この中には、土器類も多く含まれていたが、それぞれ粉粹されており、破片も角がよくとれ破片が激しい。溝-1の西側の道路

敷は、0.9~1.3m幅があり、南西から北東にやや傾く。溝-1の東側の道路敷は、0.4~1.1m幅ではほぼ南北方向である。

溝-2 A区の西側道状遺構の西側で検出した溝で、ほぼ平行して真直ぐ伸びる。溝幅約2m、深さ12cmを測り緩い円弧状に浅く落ち込む。埋土は、青灰色粘質土である。遺物は、須恵器や土師器の細片に混じって瓦器の出土も見られた。

土塙-1 B区中央部で、地山（緑灰色シルト）を垂直に近く掘削した土塙である。検出は、南側半分だけである。径1.8m、深さ0.65mを測る。底部は九味のある平底である。埋土は、暗青緑灰色粘質土である。遺物は、土師器片が少量出土した。

ピット-1 土塙-1の東側に検出した隅丸方径を呈するピットである。径0.8~0.9m、深さ0.35mを測る。埋土は、暗青緑灰色粘質土である。遺物は、須恵器杯蓋の半截品が底部に納置されている状態で出土した。

溝-3 B区東端で検出した溝である。調査区の東から西に向かって流れ、徐々に方向を北に変える。横幅0.7~1.0m、深さは、西に深く0.3mを測る。埋土は、青灰色粘質土であるが、部分的に砂土が溜った状態で見られた。

落ち込み 4ヶ所のサブトレレンチを入れた。断面図に示した如く結果を得た。西端のサブトレレンチにおいて、暗青灰色砂質土上面から須恵器杯と土師質釜が同時に排棄された状態で検出した。

以上の遺構は、水田と道状遺構と溝-2は鎌倉時代、土塙-1、ピット-1、溝-3は6世紀代である。その他に、各土層中より須恵器や土師器が多量に出土した。昨年度と同様の時期の遺物である。



図-50 調査位置と地区設定図

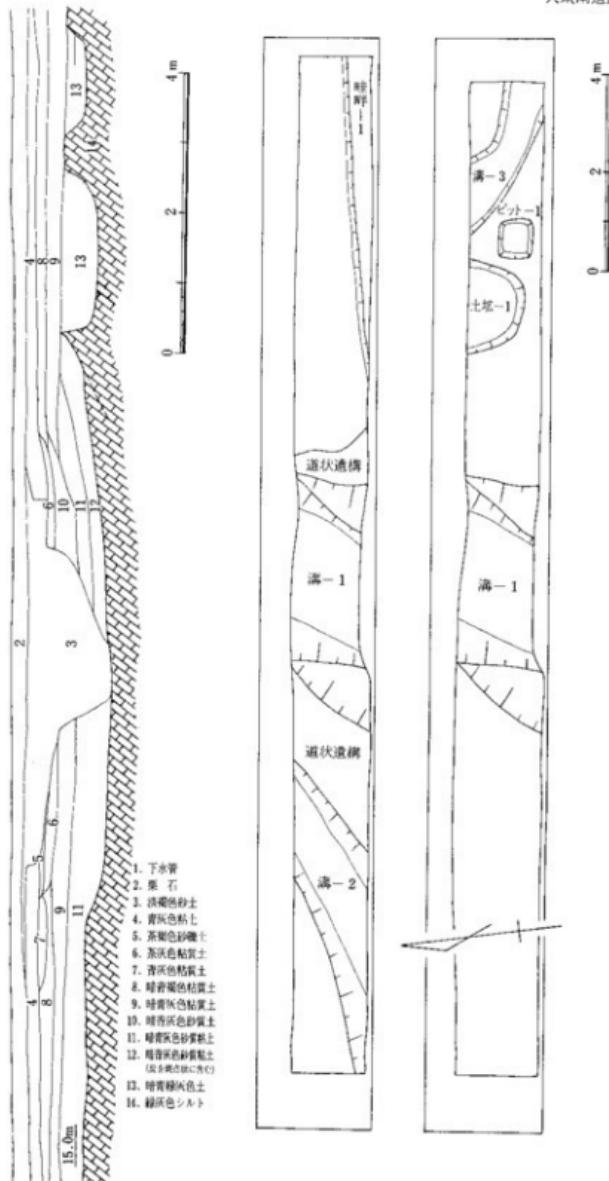


図-51 A、B区平面図、断面図

C・D区の調査

両区では、基本土層が割合単純な水平堆積を呈する。上層から、盛土、灰色粘土、淡褐色砂土、緑灰色粘質土、暗緑灰色粘土、暗緑灰色砂質土、黒灰色粘土がある。灰色粘土は、A・B区では検出されなかつたが、淡褐色砂土の上層に水田として使用された耕作土であろう。淡褐色砂土は西から東へ行くに従い厚く堆積する。D区西端に溝-4を検出した。砂土除去後にC区南側に溝-5を検出した。D区では溝-6を検出した。緑灰色粘質土はC区全域にみられ、D区東端に一部認められただけである。この土層は、水田の底土で、C区南側に畦畔を検出した。除去後C区ほぼ全域に溝-7を検出した。暗緑灰色粘土上面にて鍛冶炉-1、2と土壌-2を検出した。暗緑灰色砂質土除去後に、C区では溝-8、土壌-2、ピット-2、3、4、5、6、7、8、D区では溝-9を検出した。

溝-4 溝-1とよく似た溝で、南北方向の幅3m、深さ1mを測る。埋土は、淡褐色砂土が全部を占める。砂土の堆積状況も溝-1と同様である。遺物は、植物遺体が若干見られたが、土器類は出土しなかつた。

溝-5 A区南側に検出した溝で、その北側端部が東西方向に伸びる。中央部で細い溝が北方へ向けて流れ出る。埋土は、青灰色粘土で、遺物が出土しなかつた。深土は、5~15cmを測る。どのような用途の溝か不明である。

溝-6 D区中央部から東端にかけて括がる溝である。その西側肩だけを検出した。底は平底で東へそのまま調査区外へ続く。埋土は、暗灰色砂土で、遺物は、土師器や須恵器の細片が非常に多く出土した。遺物は故意に粉碎されたものと思われる。

畦畔-2 B区から続いた畦畔-1と続くものであろう。C区南半にはば東西方向に溝-4の直ぐ近くまで伸びている。横幅0.6m以上、長さ15.5m、高さ20cmを測る。土層は、緑灰色粘土である。茶褐色の無機物の斑点が多くみられる。

溝-7 A区全域に南東から北西に向て流れる溝である。深さ15cmを測り、溝というより暗緑灰色粘土上に堆積した上層である。

鍛冶炉-1 溝-7の下層から検出した鍛冶炉で、橢円形を呈するものである。埋土は、黒灰色粘質土で、炭や鉄滓が混入していた。東西90cm、南北0.25m以上を測る。底部は円弧状を呈する。周辺に炭層が取り巻き、鉄滓や礪羽口の出土も見られた。

鍛冶炉-2 溝-7と4の間で検出された鍛冶炉で、炉-1よりやや小さく、周辺に炭層が括がる。炉の構造は同じである。埋土は、黒灰色粘質土で炭や灰が多く含まれ、鉄滓の出土も見た。この炉も半截されており、東西28cm、南北26cm、深さ7cmを測る。

土壌-2 C区西側端部に検出した大きな土壌である。調査区の南北にまだ伸びているが、両端の底部が次第に浅くなっている事から、溝ではなく橢円形の土壌と考えられる。東西2.6m、南北1.5m以上である。最深部約1mを測る。埋土は、暗灰色粘質土で、下層に多量の遺物を

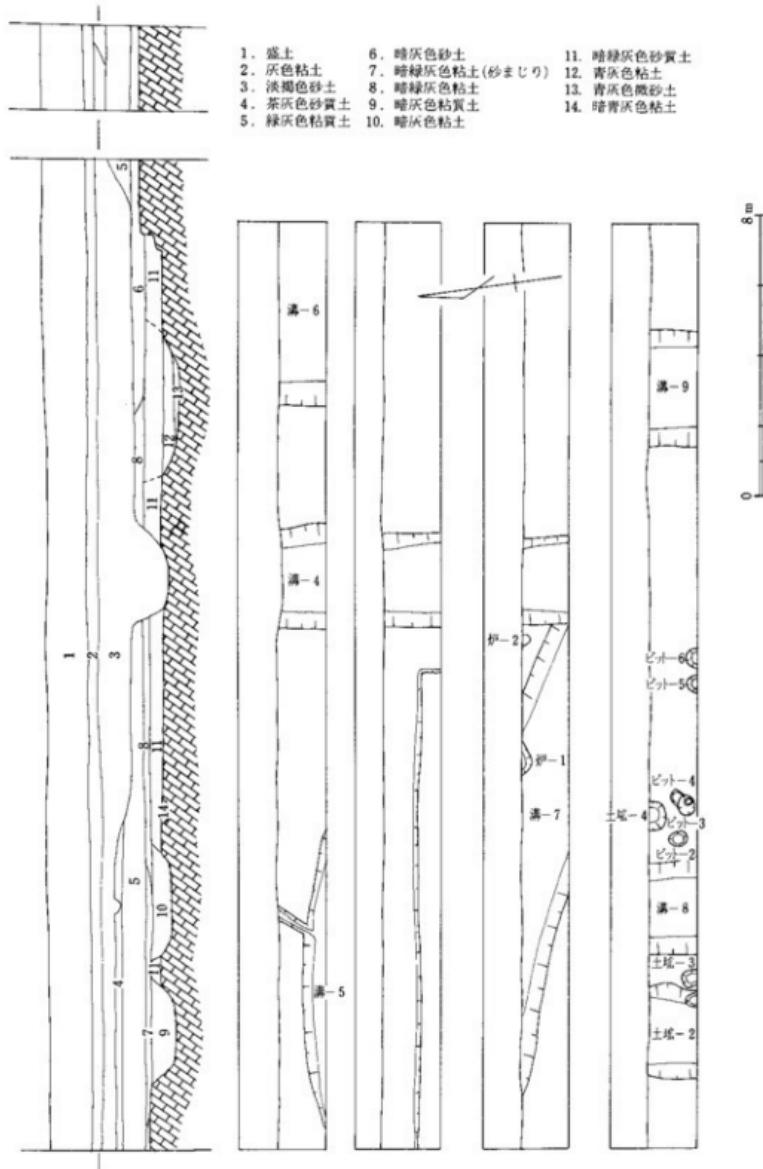


図-52 C、D区平面図、断面図

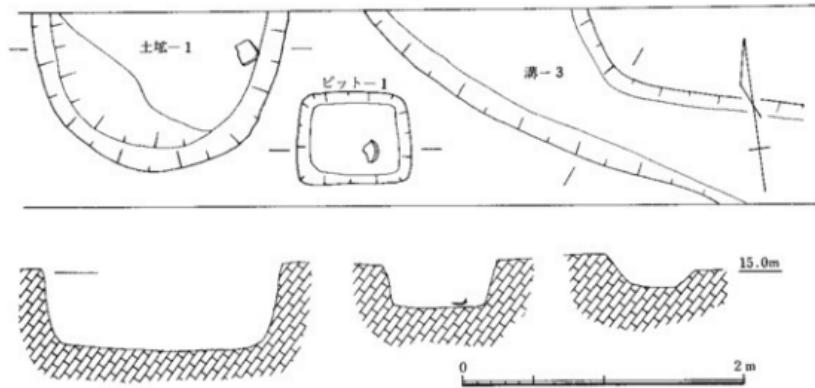


図-53

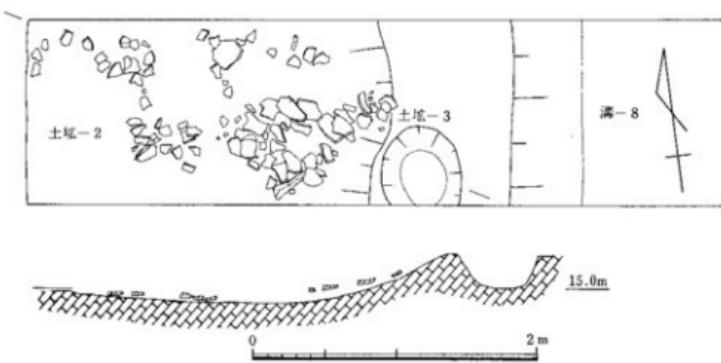


図-54

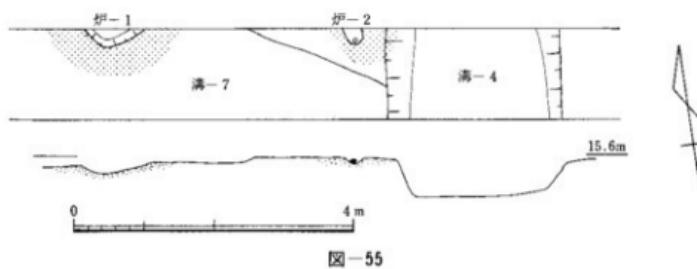


図-55

含んでいる。

土塙-3 土塙-2の直ぐ東側に検出した堀方断面U字形の土塙である。径50cm、深さ35cm。

土塙-4 C区中央部で南側半分だけを検出した。

ピット-2 溝-8の東側に検出した円形のピットである。掘方断面U字形を呈する。直径45cm、深さ37cmを測る。埋土中から須恵器や土師器の細片が出土したが時期は不明瞭である。

ピット-3 唯一の柱穴を持つ隅丸方形のピットである。掘方径56cm、柱穴径26cmを測る。

ピット-4 ピット-3に切られたごく浅い方径のピットである。柱穴が存在した可能性がある。ピット-3の柱穴とは建替えの関係があるかもしれない。

ピット-5 C区東端部で検出した円形のピットである。南側半分は調査区外である。

ピット-6 ピット-5と並んで同様の状態で検出したピットである。掘方断面U字形である。遺物は出土しなかった。

溝-6 淡褐色砂土除去後に検出した溝状遺構で、その西側肩部だけを検出した。東西方向に約5m以上の幅を持つ。深さ40cm。埋土は暗灰色砂質土である。

溝-9 D区東側に検出した溝である。東西幅3.5m、深さ0.4mを測る。埋土は、上層が青灰色粘土、下層が青灰色微砂土である。埋土中から多数の土器が出土した。また、その土器は意図的に破壊されたものかのように小破片に割れていた。

第2節 遺物

各調査区の遺物包含層及び遺構から多数の遺物が出土した。遺物は、須恵器、土師器、瓦器、鉄滓、繩羽口、果実の種子、石器等古墳時代から中世に至るまでの多岐にわたるもののが整理箱86箱分出土した。その中心となるものは7世紀から8世紀にかける時期のものである。各個々の出土遺物を遺構別及び遺物包含層別に略述し、A～D区と追って記述したい。

A区の遺物

A区から出土した遺物は、各遺物包含層から出土したものがほとんどである。遺構から出土したのは溝-1からのみである。

溝-1 主に溝下層から出土したものである。15、17～22、26、31が出土した。6世紀後半頃から7世紀初頭にかけての遺物である。

暗青褐色粘質土 水田下層の遺物包含層で、8、9が出土した。8世紀後半の遺物であり、水田の時期を知るのに貴重な遺物である。

暗青灰色粘質土 遺物が最も多量に出土した。器種も豊富である。6世紀後半から7世紀前半がその主流を成す。11は、最終末の埴輪であろう。

暗青灰色砂質土 下層の遺物包含層で割合大きな破片が多く量的に少ない。時期は6世紀中頃か。25の土釜と29、30の須恵器杯蓋は遺物包含層ながら出土状態から共伴する可能性がある。

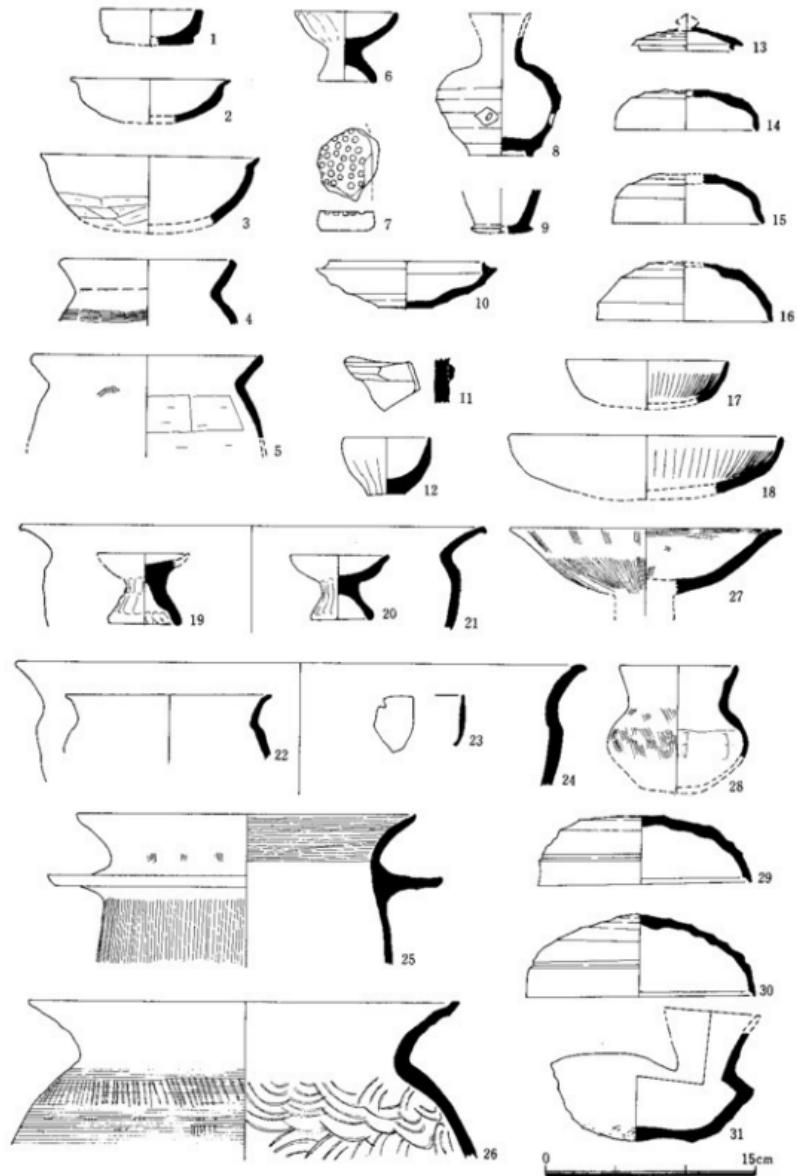


図-56 遺物包含層出土遺物

B区出土遺物

B区から出土した遺物の中で遺構から出土したのはピットー1(36)、溝ー3(32)である。

ピットー1 ピット底部から須恵器杯蓋の4分の1の破片が出土した。7世紀初頭のものか。

暗青灰色粘質土 38は、須恵器の杯底部である。底部中央に朱が塗られている。恐らく十の字が描かれたものだろう。45は、土師器の鉢である。内面に2段の放射状暗文を施こし、体部下半はヘラ削りを行なう。

溝ー3 32の須恵器杯蓋と甕が出土した。時期は6世紀後半であろう。

暗青灰色砂質土 33、34、35、37は須恵器杯蓋身である。口縁端部が内傾する段を有するものは少なく、丸く又は尖がったものが多い。土師器は、器表面を密に調整したものが多い。内面は板ナデ、外面は板ナデ、ヘラ削り、指押え、ハケ目等を行なう。

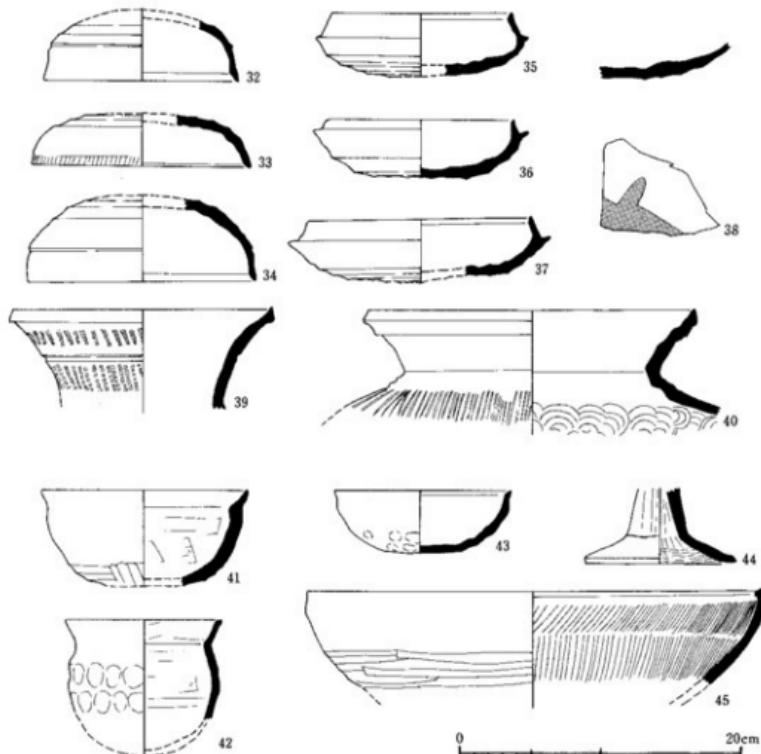


図-57 B区出土遺物

C区出土遺物

上層からの遺物包含層及び遺構から順次述べていきたい。

緑灰色粘質土 瓦畔の埋土か

ら出土した遺物である。須恵器は、杯蓋と身がある。蓋はつまみが欠損するが、中央部がやや突出する擬宝珠で扁平である。身は、高台を伴なうものもあるが、47は、きれいに回転ヘラ切りしたものである。土師器は、

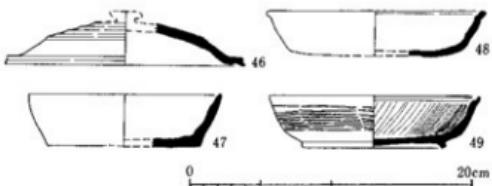


図-58 緑灰色粘質土出土遺物

主に杯類が多い。他の器種の壺や甕も存在するが、全体に細片が多く実測に絶えない。杯は、高台を伴わないもの(48)と伴うもの(49)がある。前者は内外面を板ナデ、底部をナデ調整する。後者は、内面に放射状暗文と2重の螺旋状暗文をつけ、外側はヘラミガキをする。これらは8世紀中頃のものであろう。

溝-8 須恵器は、杯蓋身と壺の底部がある。杯蓋は、宝珠様つまみが付き、内面にみられるかえりは口縁端部とほぼ同じ長さである。杯身は、かえりのあるものと平底で口縁部が直立気味に伸びるものがある。後者の底部には「一」のヘラ記号がある。壺の底部は、体部外面に回転ヘラ削りを施す。土師器には、杯と高杯と甕と壺がある。それぞれの口縁端部は平坦か内傾する。甕、壺、高杯の調整にはヘラ又は板状のものでナデが行なわれている。杯は内面に放射状の暗文を施し外側はヘラ磨きを行なう。外側下半分はヘラ削りを行なうものが多い。7世紀中頃の遺物である。

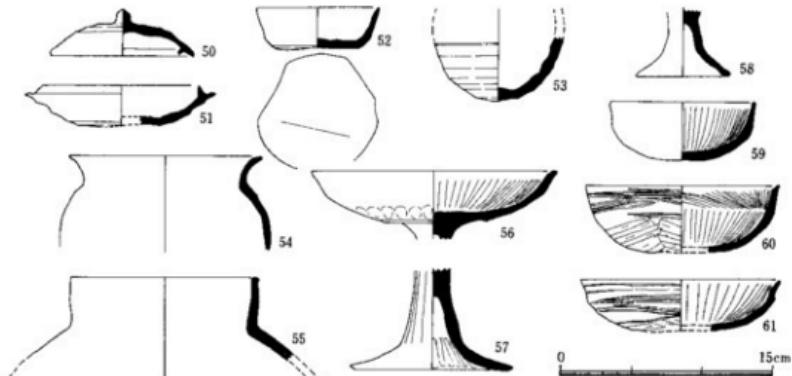


図-59 溝-8 出土遺物

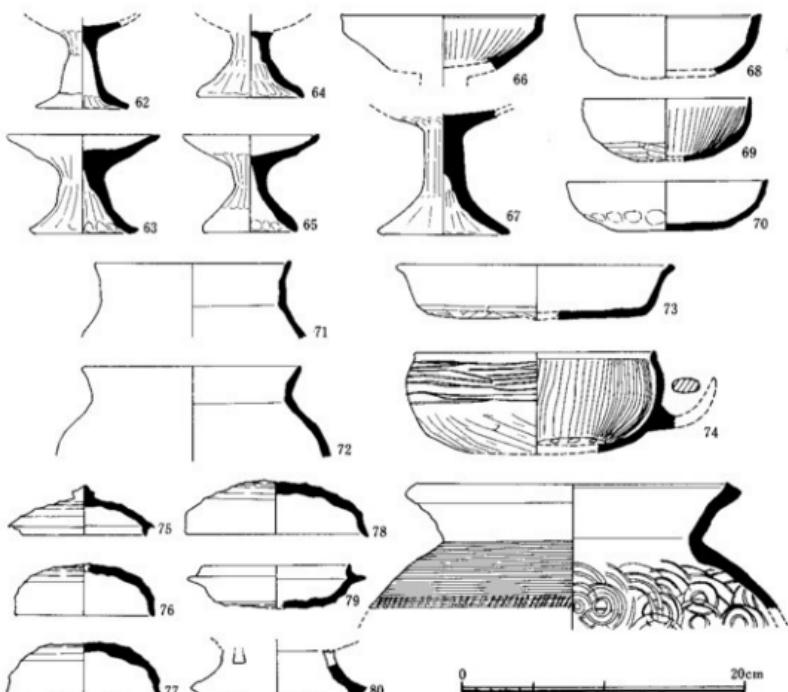


図-60 暗緑灰色砂質土出土遺物

暗緑灰色砂質土 須恵器は、杯と甕がある。杯は、宝珠様つまみが出現する前後のものが多く出土した。口径が10cm前後のものがほとんどを占める。甕口縁は断面四角形に肥厚して終る。この端部は、台付瀬の高台端部と相似したものである。体部外面はカキ目と平行叩き調整を施こし、内面は同心円文叩きである。土師器は、杯、皿、高杯、把手付鉢、甕がある。大型高杯と口縁端部が尖る杯及び把手付鉢の内側には放射状暗文が施こされている。この内、69と74の体部外面下半から一定方向のヘラ削りが見られる。また、74は外面上半は密なヘラ磨きを施こす。他の器種は、体部内外面をヘラ又は板状の工具できれいにナデる。一定の間隔で停止してナデを行なう事からその停止したヘラ当痕が認められる。

土塙-2 須恵器の器種は少なく、杯、壺、甕、甕がある。杯蓋身の口径は、12cm以上を測る。壺の口縁端部は真直ぐ伸びて丸くおさまる。86には浅い沈線がみられる。甕の体部外面は、上半がカキ目調整で下半は平行叩きである。内面は同心円文叩きである。刺突文のある甕の破片もみられた。

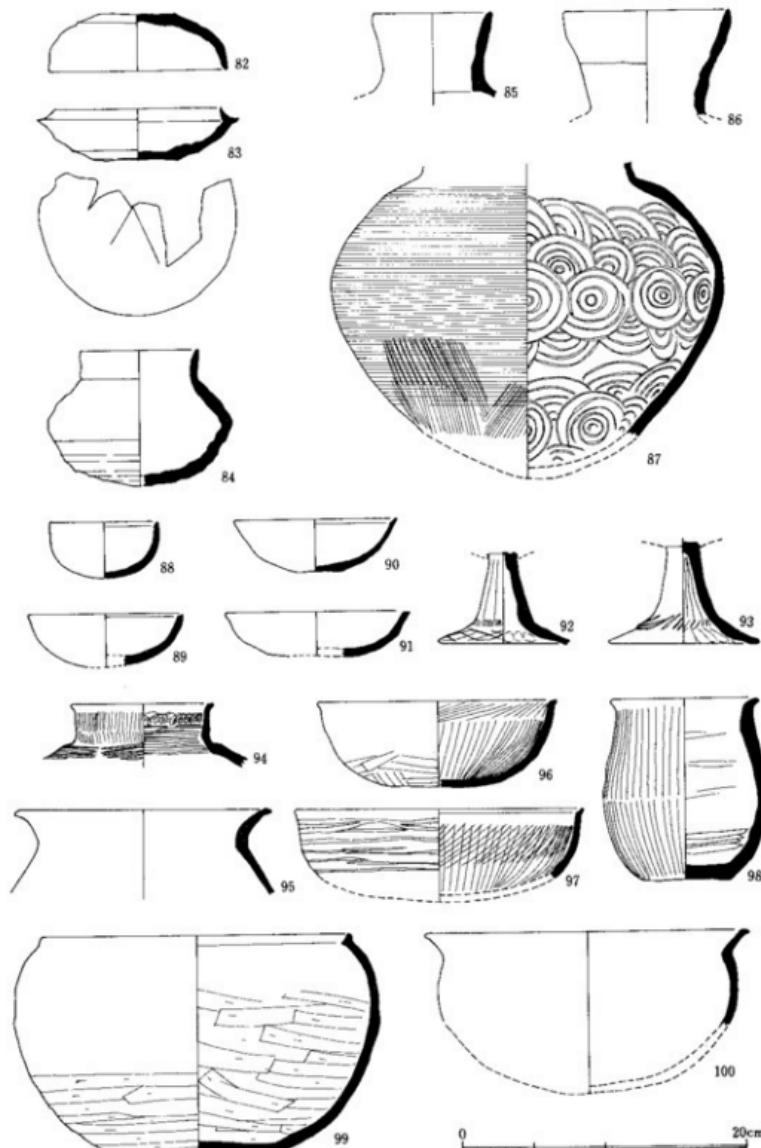


図-61 土塚-2 出土遺物

土師器では、杯は暗文のみられるものではなく、端部は内傾する平面を持つ。内面はきれいに板ナデを行なう。色調は、明茶灰色又は茶灰色で、胎土は精良で金雲母をわずかに含む。高杯は脚部だけである。外面は板ナデ後格子又は放射状の暗文を施す。94は、壺の口縁部である。外面は密なヘラ磨きを施こし、内面はヨコハケ目と螺旋状暗文を付ける。98は、器壁が厚い壺で2次焼成を受けている。砂粒をやや多く含み、色調は灰褐色を呈する。内面は朱塗りである。外面はタタキ調整、内面はナデとヘラ削りを行なう。椀は、内面に2段の暗文を施す。外面は96は板ナデとヘラ削り、97は磨きを施す。99は、口縁端部が内傾する段を持つ鉢である。内面はヘラ削り状の板ナデを施す。外面は指押え整形で下半はヘラ削りを行なう。95と100は、甕と鍋である。口縁端部は外反し水平面を持つ。

D区出土遺物

D区では非常に多くの遺物が出土した。上層から、溝-6、暗緑灰色粘土、暗緑灰色砂質土、溝-9がある。

溝-6 須恵器の器種は少なく、杯と高杯のみである。杯蓋は、つまみの付くものと付かないものがある。付かないものは、口縁端部は、天井部からゆるやかに曲がり短く垂直に屈曲する。器壁は割合薄い。付くものは、かえりが口縁端部より短かくやや退化したもので、縦平な擬宝珠つまみのものが多い。杯身は、かえりの有するものと、平底状のものと高台が付くものがある。106は、完形品で、底部に「○」の朱書がみられる。この形態のものは少ない。平底から外上方に直ぐ伸びるもののが主流を占め一番数量的に多い。高台の付く杯身はごく少ない。110は、器壁が厚く壺の底部かもしれない。

土師器は、杯と甕類が大半を占めた。杯は、大部分のものが内面に暗文を施すもので、口縁端部は丸く終るものと端部内面に沈線が巡るものがある。内面に暗文を施すものが多い。皿は、口縁端部が内側に巻き込むものと丸く終るもの、内傾する段を有するものがある。内面には2段の放射状暗文を施すものが多く、外面は、なでとヘラ磨き、ヘラ削りを行なう。ヘラ磨きは密なものから簡素なものまでみられる。盤は、皿と同様に放射状暗文とヘラ磨き、ヘラ削りを行う。この器種の内底面に螺旋状暗文がみられる。甕も多数出土した。口径が10~20cmと割合小ぶりのものが多い。口縁端部も多種のものがある。調整は、ハケ目を基調とするが、板ナデとヘラナデによって器壁調整するものも多い。土師器の色調は、灰茶色、胎土は、金雲母を少量含み大概精良である。この他に土釜の羽片も多い。時期は7世紀中頃から後半期であろう。

暗緑灰色粘土 須恵器は、杯蓋身、壺、甕がある。杯身は、宝珠様つまみが付くものと口縁端部が乙字状に屈曲するものがある。147は、横瓶の口縁部である。肩部には退化し装飾的になったつまみが付く。また、頭部にも簡素な沈線が一条巡る。

土師器は、杯、椀、皿、盤類が多く、甕や壺は少ない。杯類の口縁端部は、やや外反し内傾

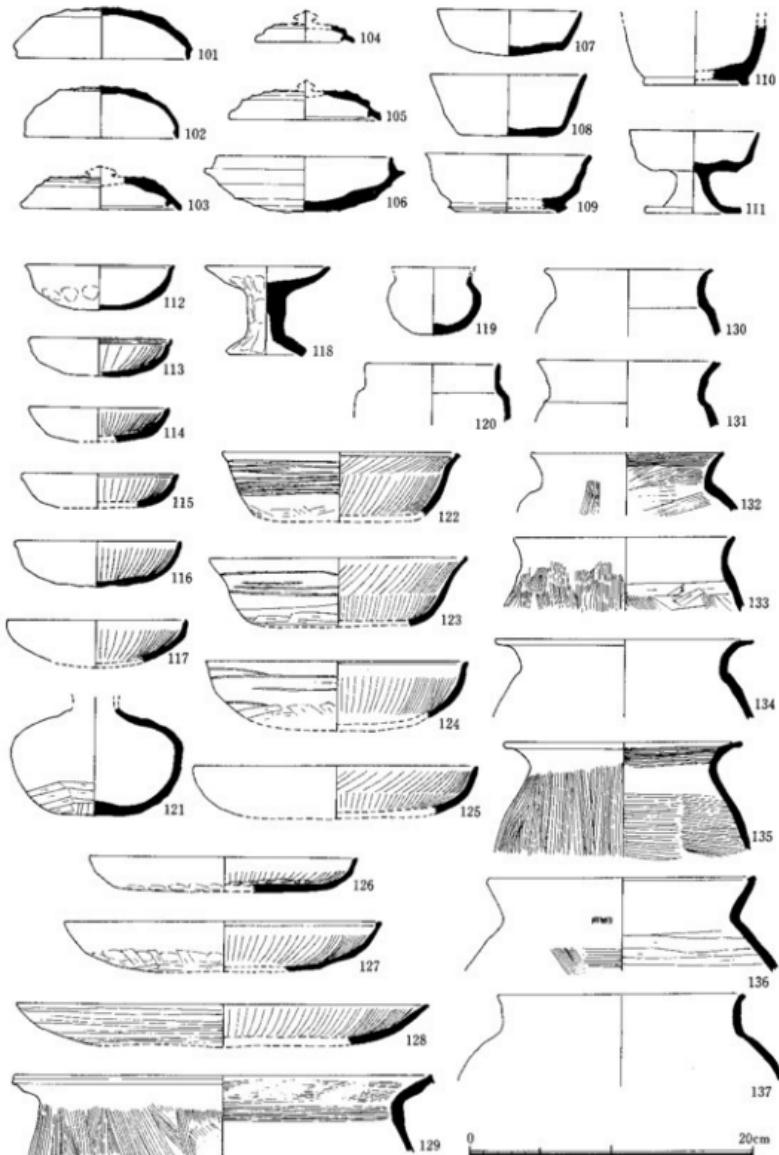


図-62 溝-6出土遺物

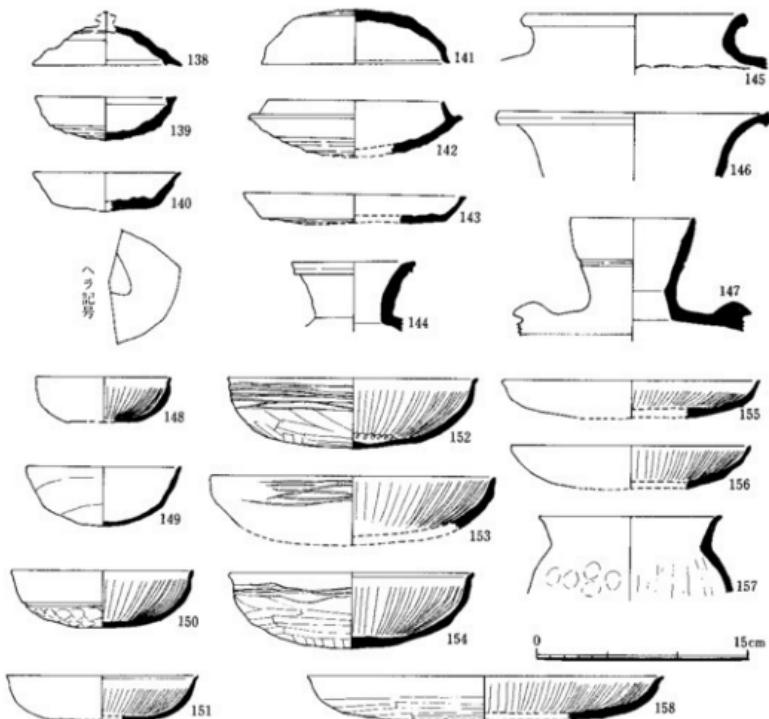


図-63 暗緑灰色粘土出土遺物

する面を持つものと端部が丸く終るものがある。内面には放射状暗文を施すものが多い。椀の外面にはヘラ磨きがみられ、下半はヘラ削り調整である。155と156は高杯の杯部の可能性がある。甕は、全体の調整は板ナデによっている。時期は7世紀中頃のものか。

溝-9 須恵器は、杯、高杯、壺、甕等多数出土した。多くは、破片で故意に割られたものが多い。杯は、立ち上がりが短くなりつつあるものが多く、160は一番新しい要素を持つものである。高杯は、杯体部に2段の段を持つもので、脚部は長脚2段透しであろう。壺は、端部が尖り気味に丸く終るものが多い。甕は、外面にヘラ描文を施す。下半は回転ヘラ削りである。甕は、口縁端部が多種多様である。基本となるのは、断面四角形に肥厚させ、その一端を三角形、丸形、先尖形に変形する。また、端部を肥厚させずに外方又は外下方へ屈曲せるものもある。内面は同心円文叩きが主体であり、その後にナデ消すものもある。外面は、平行叩き後カキ目調整するものが多い。全体に小型の甕が大半を占める。

土師器は、杯、高杯、壺、甕、鉢等がある。杯は、内湾気味に終るものと短かく外反した後

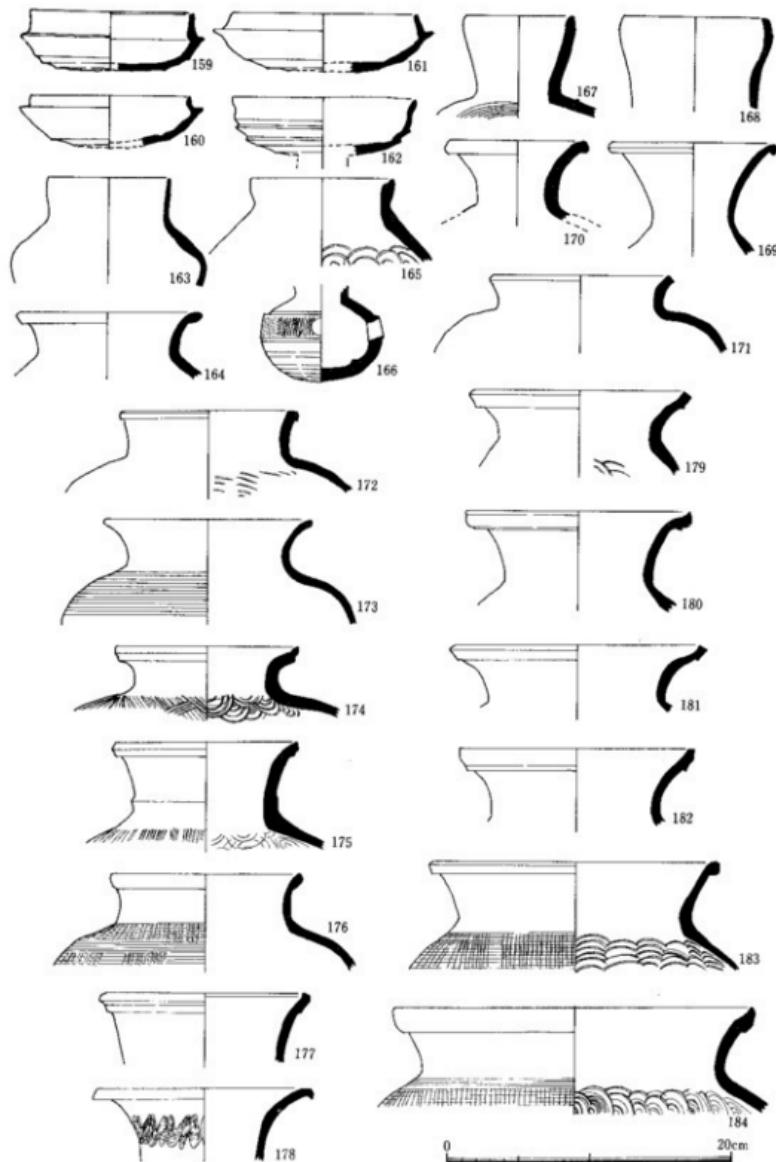


圖-64 滿-9出土遺物

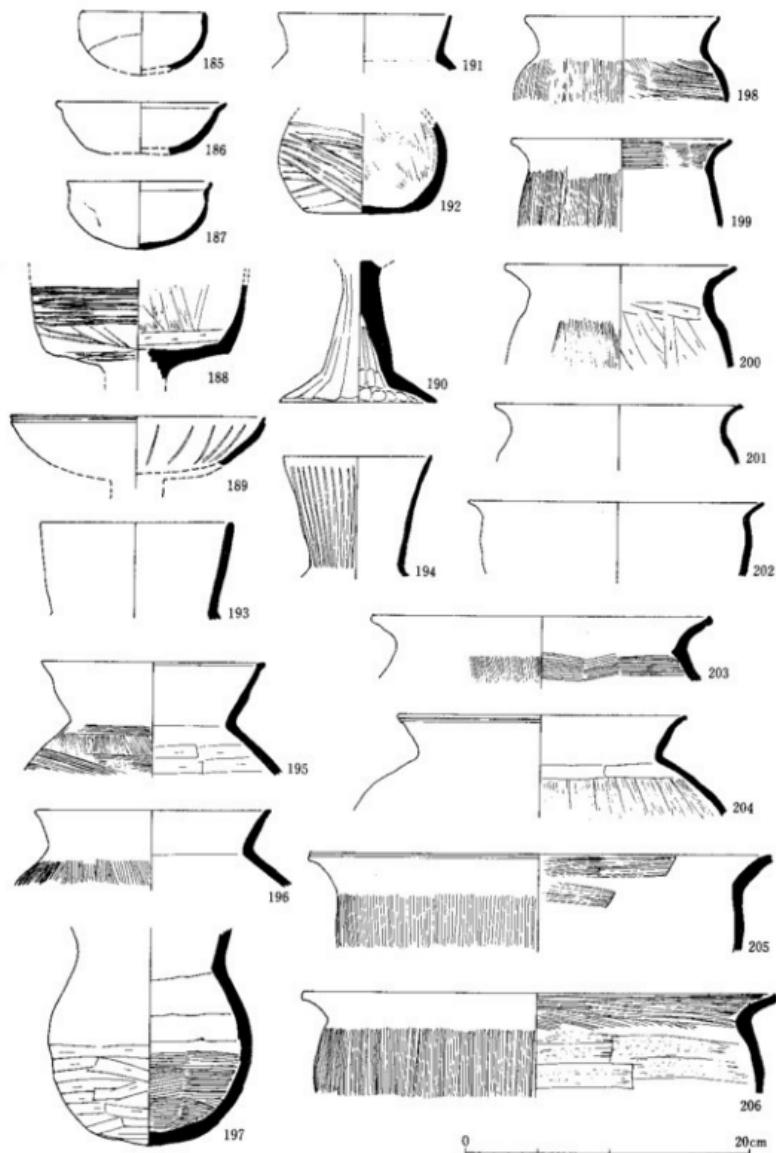


図-65 溝-9 出土遺物

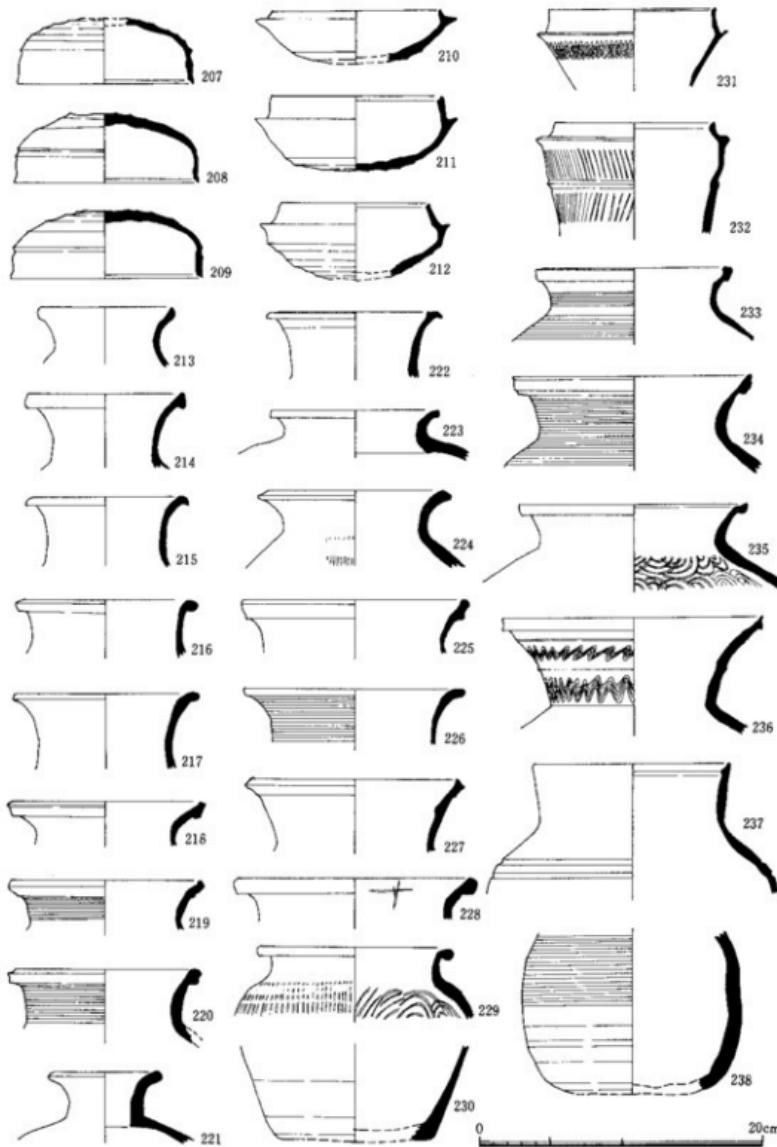


図-66 暗緑灰色砂質土出土遺物

再び内湾する口縁端部を持つもので、内外面を板ナデし表面を平滑にしている。185と186は外面に粘土紐目痕がみられる。粘土紐の巻き上げによる成形である。高杯は、2形態のものがある。188は、内面をヘラ削りに近いヘラナデを施こし、外面に密なヘラ磨きを行なう。脚部及び口縁端部が欠損している。189は、内面に間隔の広い暗文を施こし、外面は板ナデである。壺は、平底と丸底のものがある。口縁は、直口するものが多く、端部は尖る。外面にヘラ磨き、外面下半にヘラ削りを施こすものがある。ヘラ磨きを行なう土器の胎土は、行わないものに比して精良な粘土のものが多い。粘土を厳選しているものと考えられる。甕は、口縁端部が多様である。端部内面に段を有するもの、外面に沈線を巡らせるもの、端部が水平な面を有するもの、外反後わざかに内湾させるもの等がある。調整は、内外面をハケ目と板ナデによる。ヘラ削りやハケ目調整を施こすものより板ナデによって器表面を平滑に仕上げたものの方が胎土が良好である。時期は、6世紀後半から7世紀初頭のものと考えられる。

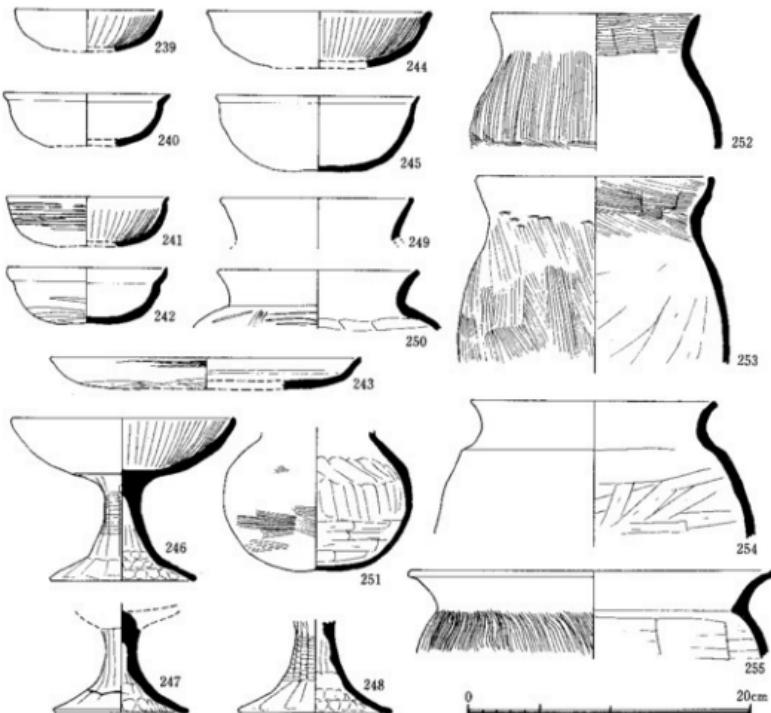


図-67 暗緑灰色砂質土出土遺物

暗緑灰色砂質土 層位的にD区の最下層にあたる。須恵器は、杯、壺、甕がある。杯は、口縁端部が内傾する段及び面を有するものと丸く終るものがある。全体に前者のものが多く、後者のが少ない。壺は、有蓋のものがあり、外面に波状文のあるものと2段のヘラ描き文を施したものがある。底部は、脚が付つものと平底のものも見られる。口縁端部は、外反して丸く終るもの、断面四角形のもの、断面三角形のもの等各種のものがある。調整は、カキ目、平行叩き調整が見られるものが約1/3程度見られる。内面は、同心円文叩きを施すものとすり消したものは少なく、ほとんどが回転ナデ調整によっている。

土師器は、杯、碗、盤、高杯、壺、甕がある。杯は、内面に暗文が有るものと無いものがある。有るものの中部は外反又はそのまま終る。無いものは短く外反した後内湾する。242の体部下半はヘラ削りであるが、ヘラ磨き状のヘラによるまでの部分が見られる。意識的に付けたものでないようである。高杯は、杯部外面にわずかな段を有する形態で、杯内面には放射状と、螺旋状暗文が施されている。脚部は、板ナデにより、角が丸いが多角形に面どりされている。

壺及び甕は、主にハケ目とヘラ削り調整を施す。胎土は、金雲母を多く含み、くさり礫を含み、割合砂粒が混入するものが多い。また、仕上げも雑なものが多い。色調は、灰茶色及び灰茶褐色を呈する。時期は6世紀後半のものである。

その他の遺物

土器類の他に、鉄滓、轆羽口、砥石、瓦、獸骨、木器等がある。簡単に述べていきたい。

鉄滓 鉄滓は、総重量6.3kg出土した。鍛冶における排滓である。C区において鍛冶炉が検出されており、出土が全域にわたっている事から、同様の鍛冶炉が周辺に存在しそうである。鉄滓の大きさは、 $11.4 \times 10.1\text{cm}$ 、865gのものが一番大きく、いわゆる椀形滓である。多くは破片である。鉄分の含有は割合少ないものが多い。

轆羽口 鍛冶における送風装置である。八の字状に拡がる形態のもの（A型）と円筒形のもの（B、C型）がある。C型は、外面が板状工具による叩きで断面多角形を呈し、断面円形のB型と相異なる。破片は多く出土したが、完形となるものは少なかった。

砥石 鍛冶における鉄器の研磨に使用されたものである。砂岩と流紋岩製の中、仕上げ用の砥石である。

瓦 破片が10数個出土した。平瓦片で、上面布目痕、下面繩目叩きがみられる。昨年度の調査（83-2次調査区）において、均整唐草文の軒平瓦と単弁16葉蓮華軒丸瓦が出土しており、同一の時期のものと考えられる。

獸骨 馬の骨が各層から出土した。主に馬の歯が多く、他の骨は軟化しているものが多い。

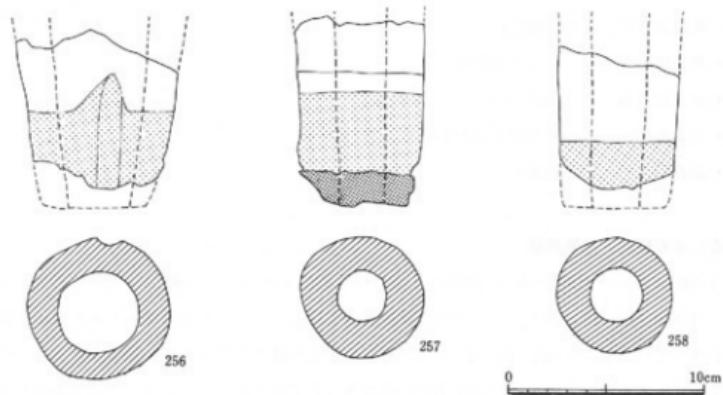


図-68 轆羽口

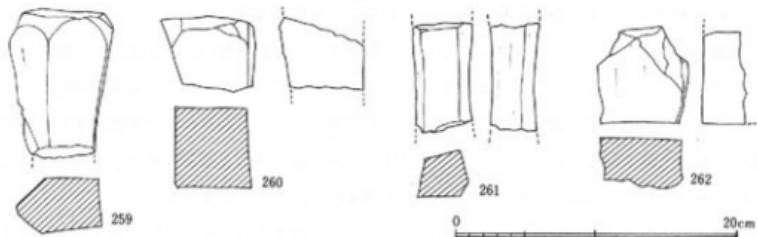


図-69 砥石

No.	現存長	体部外径	体部内径	先端長	壁厚	胎土	色調	特徴
1	6.9	5.5~6.1	2.5~2.9	—	2.3以上	生駒西蘆産	薄茶灰褐色	C-1型
2	9.6	6.1~6.6	2.4~2.6	2.7	3.0	夕	夕	B型
3	8.9	6.2~8.3	3.4~4.7	—	3.6	夕	夕	A型

表-2 砥石

出土区	出土層位及遺構	出土重量	出土区	出土層位及遺構	出土重量
A	暗青褐色粘質土	105 g	C	暗綠灰色砂質土	1,195 g
A	暗青灰色砂質土	115 g	C	土塙-2	5 g
B	暗青灰色砂質土	1,400 g	D	暗綠灰色粘土	300 g
B	道路敷	90 g	D	溝-9	1,610 g
B	土塙-1	75 g	D	暗灰色砂質土	1,425 g

表-3 鉄津出土位置

83-6次調査区（岩崎谷線E区）

- ・調査区所在地 柏原市大県3丁目
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 昭和59年4月18日～4月23日
- ・調査面積 (40m²)

調査に至る経過、調査経過

当該地は下水道岩崎谷線昭和58年度工事の最東端にある（図-50）。当初下水道課からは1. 当該地は既に既設管が入っており、発掘調査を行なうにしても極めて限られた狭小な範囲しか残っていないこと（図-70-1）、2. 付近に住宅が建てこんでおり、調査深度が深くなると現在打ち込んでいる鋼矢板では住宅に影響の出るおそれがあること、などの点を考慮して発掘調査の方法を検討してほしいという申し入れがあった。文化財担当としては、埋蔵文化財の状況として当該地西側のD調査区の成果から、既設管による搅乱を受けていない部分では遺物の存在が予測され、また既設管底部以下においても遺物、遺構の存在が考えられる点を挙げて協議を行なったが、下水道課からの申し入れも考慮し、発掘調査の深度を限定し、地表下3mで打ち切る旨回答した。この深度は新設下水道管管底に相当する。この結果未調査部分が多く、遺構についても十分調査できなかった点、また管底下に記録保存もされずに残された遺物、遺構に対し工事の影響が及んでしまったのではないかと危惧されるなど問題が多く残されることになり、今後十分な調査体制を組むよう下水道課に対し申し入れを行なった。

調査は盛土および砂層を重機により除去していった。地表下約2m、この砂層下部で後述する瓦質甕が検出され、重機による掘削を中止し以下を人力で掘削した。調査期間が短かかったこともあり、盛土以下の砂層部について重機で削ってしまったことは、甕の出土状況からみて他に遺構が存在していた可能性もあり、また堆積の状況を十分に把握できなかったなど反省されることが多い。

調査区内の地区割りはD調査区東端を0とし東に1m毎に区画していった。

層位（図-70-2、3）

層位は調査区西端、東端において観察した。いずれも搅乱部が多く調査区内全体でどのような堆積状況になっていたか必ずしも明確ではないが、現在の道路面はおよそT.P.18.7m、以下1.5m程が盛土、その下は砂層と粘土層が交互に堆積する。概略的にはT.P.17.0m付近は砂層が厚く堆積しており、T.P.16.0m付近から以下では粘土層が多く、比較的安定した地盤を形成していたものと思われる。なお8層は暗灰色粘土層で（溝）の堆積土である。既設下水道管工事の際に上部が搅乱を受けている可能性がある。

遺構（図-70-2、4、図-71、写真図版）

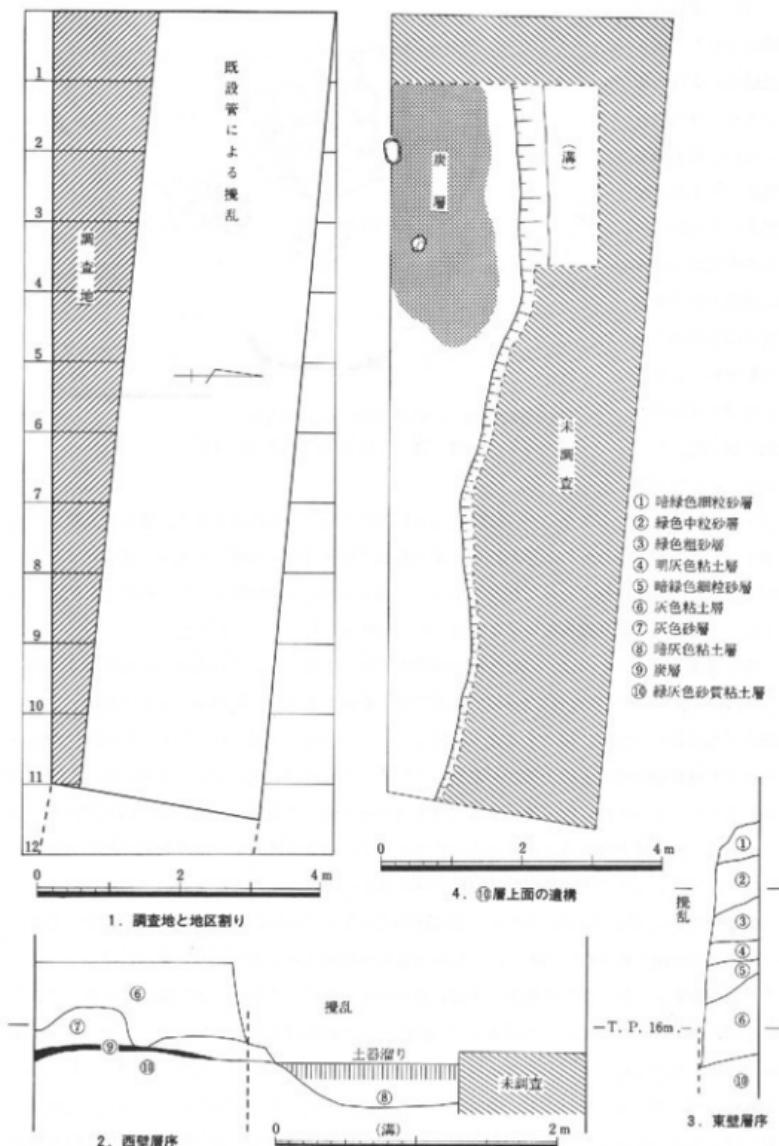


図-70 E調査区地区割り、層序、遺構図

3つの造構面が検出された。第1造構面は⑤層上面にあり、9~11区において瓦質甕を埋置した土塙が検出された(図-71)。この土塙については南側を新下水道管布設工事のための鋼矢板で、北側を既設管布設時の鋼矢板で削られており、正しい形状、

大きさを知ることはできないが、ほぼ径1.4mの円形を呈する皿状の土塙で、甕を置く部分のみ深く掘り込まれていたものと思われる。深さ25cmで掘り込みは⑥層まで及ぶ。甕は底部がなく胴下半部が土塙内に据えられた状況で出土し、胴上半部および口縁部はやや散乱した状況で出土した。これはやはり鋼矢板による搅乱をある程度受けたためと思われる。

第2造構面を示すものは、(溝)2区の堆積土⑧層の上部において検出された土器溜りである(図-70 2、写真図版)。径1.5m程のほぼ円形の範囲に出土し、約15cmの厚さで堆積している。既設下水道管の下底部に接するように残っており、一部は削平されてしまった可能性が強い。それでも概数6000点の大小土器片が密集している。土器には6世紀中頃~8世紀代のものが含まれている。レベル的には(溝)を含む第3造構面と同一であるが、遺物の時期差が大きいことや(溝)内堆積土中に残されていることなどから、第3造構面よりは時期的に新しいものとして区別した。なおこの土器溜りはD区で検出されたものの一部をなすものである。

第3造構面は⑩層の上面にあたり、調査区内南西半2~5区において炭の広がりが、北半には(溝)が検出された(図-70 4)。(溝)は⑧層を堆積土とし深さ40cm、東西に延びている。ただし調査範囲が狭いことや搅乱、未調査部分が多いため、はたして溝と断定できるかどうかに疑問が残る。仮に(溝)としておく。(溝)内からは轆羽口が出土している。この(溝)の南北平坦地に東西4m以上、南北2m以上の範囲で厚さ5~10cmの炭の広がりが認められる。南北断面(図-70 2)でみると、中央部がやや高くなっている。炭層からは鉄滓が、炭層と⑩層にはまれるようにして砥石が出土している。この第3造構面は鍛冶関係の工房址的な性格をもつ造構面であろう。

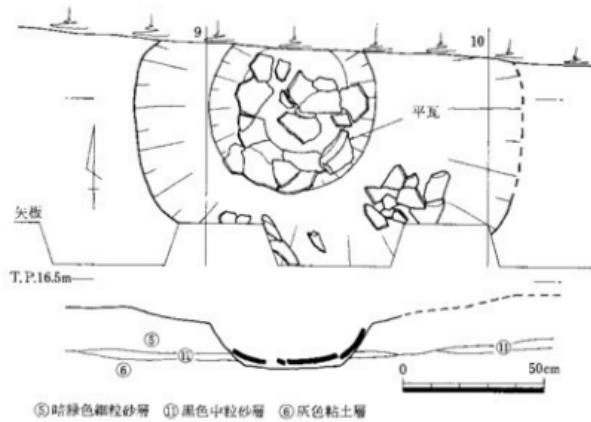


図-71 ⑤層上面の土塙(9~11区)

遺物

⑤層上面土壌内出土の瓦質甕(図-72)

破片数が全体の $\frac{1}{2}$ 程度しかなく、特に底部の形を復原するには困難があるが、口縁部および口縁端部は短かく外方に折り返されただけのもので、頸部は短かく直立気味にたち、胴部は最大径が胴上半部にあってやや肩のはるような形状を呈すものと思われる。底部はおそらく平底であろう。口縁部、頸部の内外面の調整はナデ調整、胴部外面は横、斜方向の平行タタキ調整、内面は8~9本/cmの細かい横、斜方向のハケ調整が施されている。胴部器壁の厚さは4~5mmと薄く丁寧に作られており、焼成良好、胎土は微細な長石粒を含むもの精良である。法量は高さ50cm、口径36cm、最大径57cm。

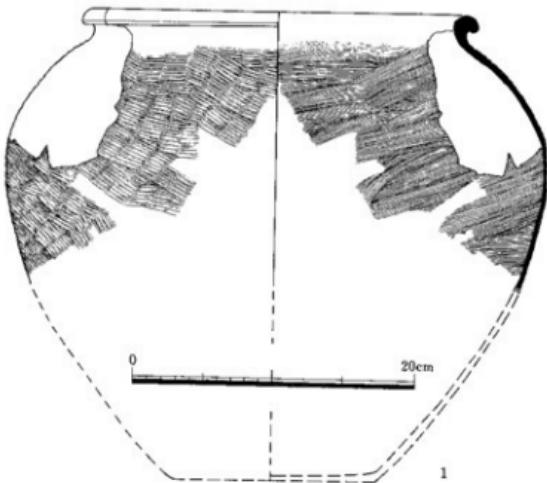


図-72 土壌内出土の瓦質甕

こうした瓦質の甕は市内ではこれまで破片として稀に出土していたが、本例のように大きさや形状が復原できるようなものは初出である。従って柏原市域での時期的状況は不明であり、今回も共伴遺物がないため正確な編年的位置を示すことは無理であるが、河内や和泉地域の周辺諸遺跡例と比較すると、口縁部から頸部の形状から判断し14世紀後半から15世紀前半にかけての時期のものと考えられる。

⑥層出土の硯(図-73 1)

⑥層からは硯の破片が一点出土している。粘板岩製の長方硯で陸部が残っている。断面図にみると右側辺部では上半部に突出がみられるのに対し、下半部ではこの突出がもともと存在していないようだ。

⑦層出土の遺物

⑦層からは概数コンテナバット1杯程度の遺物が出土している。内訳は高杯、甕等の土師器片、杯、高杯、甕、提瓶等の須恵器片、平瓦片である。平瓦凹面は布目で凸面のタタキは有輪綾杉、荒い繩、無文である。

⑧層出土の遺物

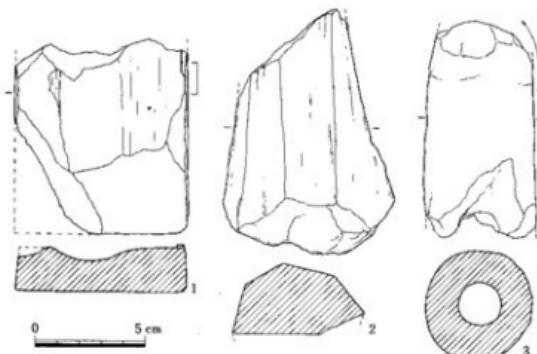


図-73 瓦、砾石、輪羽口

⑦層からは概数コンテナパット1杯程度の遺物が出土している。内訳は高杯、甕、壺、瓶、羽釜等の土師器片、杯、甕等の須恵器片、平瓦片である。平瓦凹面は布目、凸面のタタキは荒い繩、無文である。

⑧層上部土器窯内内の遺物(図-74)。

およそ5500点の土師器片、830点の須恵器片が出土している。この中で器種がわかり、接合しないあるいは同一の個体ではないと判断される破片数をみると土師器杯(口縁)39、高杯(脚)60、甕(口縁)50、甕(口縁)100、羽釜(口縁)41、瓶(底部)6、甕(体部)6、壺等の把手15、須恵器蓋杯(つまみ、口縁)45、甕(口縁、底部)52、高杯(脚)17、甕(口縁)13、提瓶(口縁、肩部)5点となり、これらの数値は土器窯内内の各器種のおよその個体数を示しているものと思われる。

復原できた土器の数は少ないが若干のものについて特徴を記す。土師器杯(2)は小形で口縁端部はやや鈍く外反し、内面に正放射状暗文がみられる。淡赤褐色を呈し、焼成良好。甕には小形のもの(4)と中形のもの(3、5~7)とがある。4は「く」字形に外反する口縁部で体部は球形のものと思われ、内外面ともナデ調整が行なわれている。淡赤褐色で焼成良好、胎土にはクサリ礫が含まれる。内面には煤が付着している。中形のもの5、6は3と類似する。5の胎土にはわずかに雲母が含まれる。5は口縁部内面、6は内外面に煤が付着する。3、7の甕には体部外面にハケ調整がみられる。3の口縁部外面はナデ調整が十分でなく、先行するハケ調整が部分的に残っている。両者ともに淡赤褐色、焼成良好、胎土にわずかに雲母を含む。甕は直口形態(9、10)で頸部外面縱方向のヘラ磨き、暗文がみられ、体部上半は横方向のヘラ磨き、下半は削り、内面はナデ調整が行なわれている。頸部と体部の接合部内面は指オサエや削りがみられる。淡赤褐色を呈し焼成良好、胎土にはわずかに雲母が含まれる。小形甕(8)はやや外反する口縁と中央に最大径をもつ算盤玉状の体部で、内外面ともナデ調整、体部下半はヘラ削りがみられる。淡茶褐色で焼成堅緻、胎土は密でわずかに雲母を含む。

須恵器杯は口径が小さく、深くたちあがりの長いもの(11)と口径が大きく、浅くたちあがりの短かいもの(12、13)とがある。焼成堅緻、胎土にわずかに雲母を含む。16はつまみの付

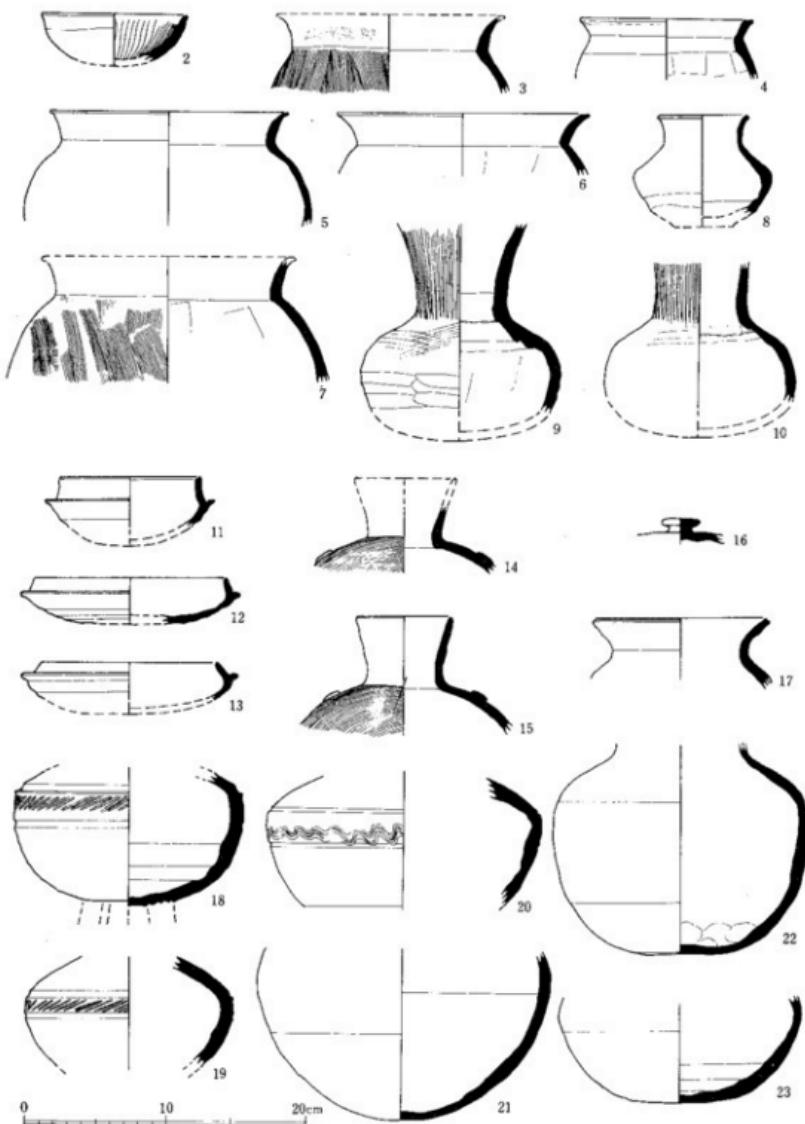


図-74 ⑥層上部土器窯内内の遺物

く杯蓋。提瓶（14、15）の把手はいずれもボタン状突起となるもので、14は灰褐色、15は暗灰色を呈し焼成堅緻。甕（17）は小形で「く」字形に外反する口縁をもち、残存部では内外面ともナデ調整。灰白色で焼成良好、胎土にはわずかに雲母を含む。壺には脚の付くもの（18、19）とつかないもの（20～23）がある。18、19は脚付長頸壺と思われ、18の体部底面には3方向の透しの痕跡が残る。体部には上下2本の沈線間に刺突文が施される。両者とも内面および体部外面上半は回転ナデ調整、下半は回転ヘラ削りとなっている。18は暗灰色、19は明灰色で焼成堅緻。脚のない壺には体部上半に最大径をもち肩のあるもの（20、21）と球形の体部で丸底のもの（22、23）がある。前者は長頸壺、後者は小形壺の形態を呈するものであろうか。20は上下2本の沈線間に3条の竹管による波状文がみられる。施文方向は左→右。内面、体部上半はナデ調整、下半は回転ヘラ削り。灰白色を呈し焼成良好。22は内面下底部に指頭痕が残り外面下半は削り調整後横ナデ調整、他の部分は横ナデ調整。灰白色を呈し焼成不良。21の内面下半はナデ調整、上半から外面は回転ナデ調整、下半は回転ヘラ削り。灰白色を呈し焼成良好、胎土にクサリ礫を含む。23も同様の調整、灰白色で焼成は堅緻。

他にわずか2点であるが平行タタキ調整の製塙土器片も出土している。

以上のような土器の特徴から、この土器溜り内には6世紀初頭～8世紀代の長期間にわたる遺物が含まれていると思われ、その出土状況からみてこれらの遺物が一括廃棄された要因について留意しておく必要があろう。

⑧層下部（溝内堆積土）出土の遺物

⑧層下部すなわち（溝）内堆積土中から馬歯が顎骨から遊離して散漫な状況で出土した。臼歯でおそらく成歯のものと思われる（写真図版）。

また鷲羽口が一点出土している（図-73 3）。筒状の形態で、胎土中には石英、雲母、角閃石等が含まれている。

⑨層（炭層）出土の遺物

鉄滓の総重量は840 g。表面の気泡は少なく塊状のもので椀形滓はない（写真図版）。

砥石（図-73 2）は破損品であるが多角柱状のものと思われ、凝灰岩製。

1984年度市内遺跡群発掘調査一覧

本郷遺跡

(1984.1.1~12.31)

年次	所在地	面積(m ²)	申請者	用途	区分	担当	調査期間	概要
84-1	本郷4丁目245-1	897.11	㈱工苑住宅	分譲住宅建設	原図者 安村	5.30	2×2mのトレンチを設定し、GL-1.8mまで掘削。遺物、遺構なし。	
84-2	本郷3丁目745-3、747-1,755-1,756-1	1567.29	柏元孝治	マンション建設	*	*	9.26~10.4	5×8mのトレンチを設定し、GL-3.9mまで掘削。6世紀代の溝を検出。

大県遺跡

84-1	大県4丁目1-16~22	178.82	柏原市建設部	下水道管埋設	公 共	北野	1.6~2.27	本書3ページ参照。
84-2	平野2丁目338~339	69.0	大阪ガス㈱	都市ガス管埋設	原図者 桑野 花田	1.18~1.20	GL-60cmで遺物包含層を確認。 縄文、弥生土器が出土。	
84-3	平野1丁目101	671.2	㈲松柏	賃貸住宅建設	*	北野	9.3~9.8	135m ² を調査。GL-7.5mまで掘削。 弥生時代~中世の遺物、遺構を確認。
84-4	平野1丁目2-7	470.19	株日本ボック トグループ	分譲住宅建設	*	安村	10.15	GL-1.5m以下で花崗岩の自然石が存在する。この下に遺物包含層が続く。
84-5	平野2丁目12先	39.32	柏原市建設部	下水道管埋設	公 共	北野	12.13	縄文土器、土師器、須恵器出土。 器は早期の押型文土器。
84-6	平野2丁目11先	48.0	*	*	*	*	12.14	土師器、須恵器、瓦等出土。
84-7	大県4丁目47-3	182.54	山中耕作	個人住宅建設	国 庫	*	12.17~ 12.27	奈良時代の建物址、中後の造構面を検出。 須恵器、土師器、鉄矛、瓦等が出土。

大県南遺跡

83-6	大県3丁目509-1	40.0	柏原市建設部	下水道管埋設	公 共	桑野	4.18~4.23	本書76ページ参照。
84-1	大県4丁目422~426	350.0	*	道路幅拡張	*	北野	11.12~ 12.8	7、8世紀の建物址、溝、道路敷石を検出。

太平寺遺跡

84-1	安堂町903-1	453.0	古村正義	宅地造成	国 庫	桑野	4.11~4.17	調査地北半では削平を受け GL-50cmで地山。南半では段谷を検出。6~8世紀の須恵器、土師器。
84-2	*	162.36	山中恭一	個人住宅建設	*	*	*	84-1次調査参照。

安堂遺跡

84-1	安堂町697-1	182.83	安堂町会	安堂老人会 館建設	*	安村	8.30~9.8	奈良寺跡推定地の調査。約43m ² を掘削。 近世の石垣を検出。奈良時代前期の瓦瓦 礎石、近世陶磁器が出土。
------	----------	--------	------	--------------	---	----	----------	---

高井田廃寺(鳥坂寺跡)

84-1	高井田278	1200.0	高井田土地 整理事組合	上地区面 整理事	原図名	田中	4.10~8.13	寺院址に伴う建物址、炭焼き窯等を検出。
------	--------	--------	----------------	-------------	-----	----	-----------	---------------------

青谷庵寺

84-1	青谷164-1他	8250.0	安田光憲	ゴルフ練習場建設	国 庫	桑野 竹下 田中	4.25~ 11.13	宮跡と思われる建物1棟、溝、回廊、石数等を検出。
84-2	青谷130-11	2.0	大阪電力	電柱設置	原因者	田中	10.3	G L-1.25mで地山に達する。溝1条を検出。
84-3	青谷152、157	885.94	柏原市長	駐車場造成	公 共	田中	11.1~ 11.21	江戸期の寺跡に伴う土塙、溝を検出。この寺は極楽寺と云われる。

高井田横穴古墳群

84-1	高井田622-1	560.0	畠本公三	個人住宅建設	国 庫	北野	8.22~8.23	2.5×3mのトレンチを設定、約1mで地山に達し、遺物、遺構なし。
------	----------	-------	------	--------	-----	----	-----------	-----------------------------------

平尾山古墳群(太平寺支群)

84-1	大槻4丁目641-1	320.56	正伸住建	宅地造成	・	安村	10.23~ 10.26	7~8世紀代の墓柱建物、溝、土器等を検出。
------	------------	--------	------	------	---	----	-----------------	-----------------------

田辺遺跡

84-1	田辺2丁目 2012-2他	952.66	平川住宅㈱	宅地造成	原因者	桑野	4.10	3ヶ所にトレンチ設定。G L-0.3~1mで地山に達し、遺物、遺構なし。
84-2	国分木町7丁目 910-1他8筆	4495.0	畠本富太郎	宅地造成に伴う道路建設	・	北野	5.7~5.12	100mを調査。奈良時代~中世の建物、溝、鍛冶炉、土塙等を検出。
84-3	国分木町7丁目 1-20		柏原市長	屋内運動場建設	国 庫	・	9.27~10.1	7世紀代の鍛冶関係の遺構、遺物検出。

玉手山遺跡

84-1	玉手町142-22	1484.0	大穂㈱	分譲住宅建設	原因者	桑野	1.20~1.25	120mを調査。G L-1.3mで地山に達し、遺物、遺構なし。
84-2	慈ヶ丘1丁目277	808.68	西村義雄	個人住宅建設	・	安村	4.4	1.2×1.8mのトレンチを設定。G L-1mで地山に達し、遺物、遺構なし。
84-3	玉手町145-35	9711.95	㈱トーメン	マンション建設	・	桑野	5.7~10.2	横穴墓、埴輪円筒棺、古墳周溝、火葬墓、中世祭祀遺構を検出。纏文~近世の遺物が出土。
84-4	慈ヶ丘2丁目 315-3他3筆	1371.51	明広住宅㈱	宅地造成	・	・	10.8	2ヶ所にトレンチを設定。G L-1.5mで地山に達し、遺物、遺構なし。
84-5	円明町888-4、3	2793.27	石崎 達	宅地造成	・	田中	11.27	6ヶ所にトレンチ設定。甌土層が大半で、一部に7世紀末のピット、溝を検出。

国分寺跡

84-1	国分東条町3871	423.64	中尾輝彦	個人住宅建設	国 庫	北野	2.27	削平を受けており、表土下10~30cmで地山。遺物、遺構なし。
------	-----------	--------	------	--------	-----	----	------	---------------------------------

松岳山古墳群

84-1	国分市場1丁目 3108-4	181.91	大向興産	宅地造成	原因者	安村	7.4	1×5mのトレンチを設定。G L-1.5mまで掘削、遺物、遺構なし。
84-2	国分1655 (東峰)	10.0	瀧山房太郎	果樹園の水槽製作	國 庫	・	12.17~ 12.26	平壙状態の古墳石室の現状の記録。銅鏡、鏡類等出土。

図 版



調査区（中央部の山は高尾山）



1. 遺構（A区）



2. 遺構（A区）

図版三 大県遺跡（遺構）



1. 遺構（A区）



2. C区断面



1. 鋼冶炉（A区）



2. 鋼冶炉（A区）

圖版五 大縣遺跡（遺構）



1. A区断面



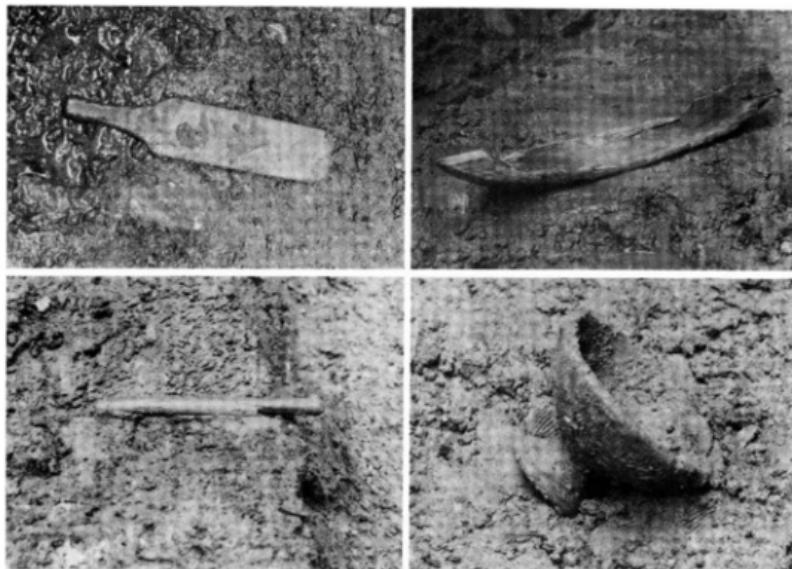
2. B区断面



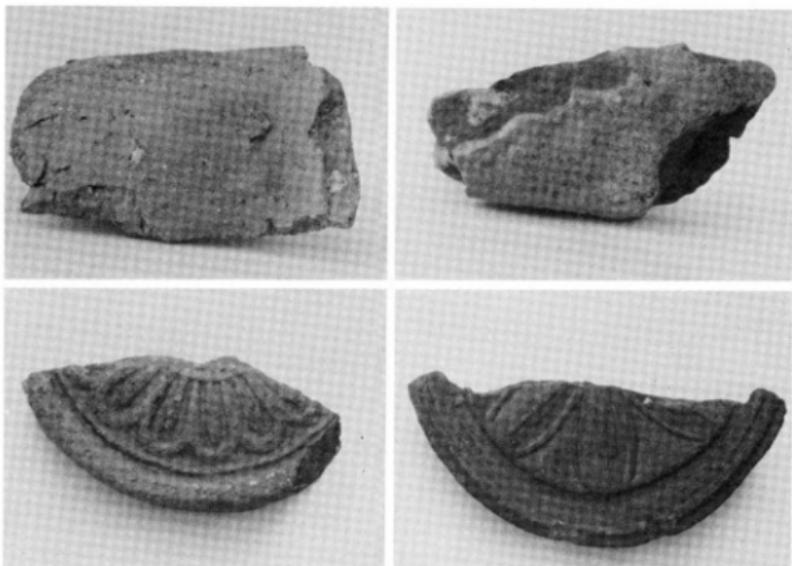
1. 作業風景（B区）



2. 作業風景（A区）

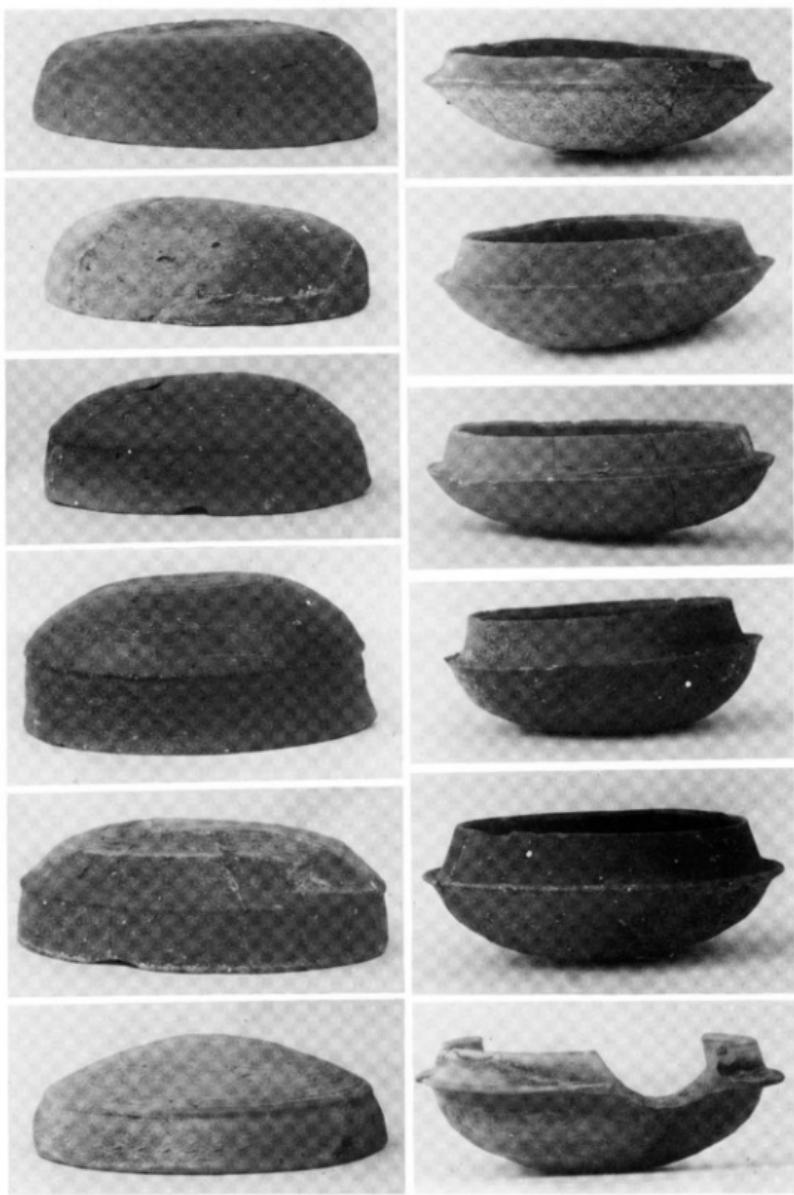


1. 遺物出土状態

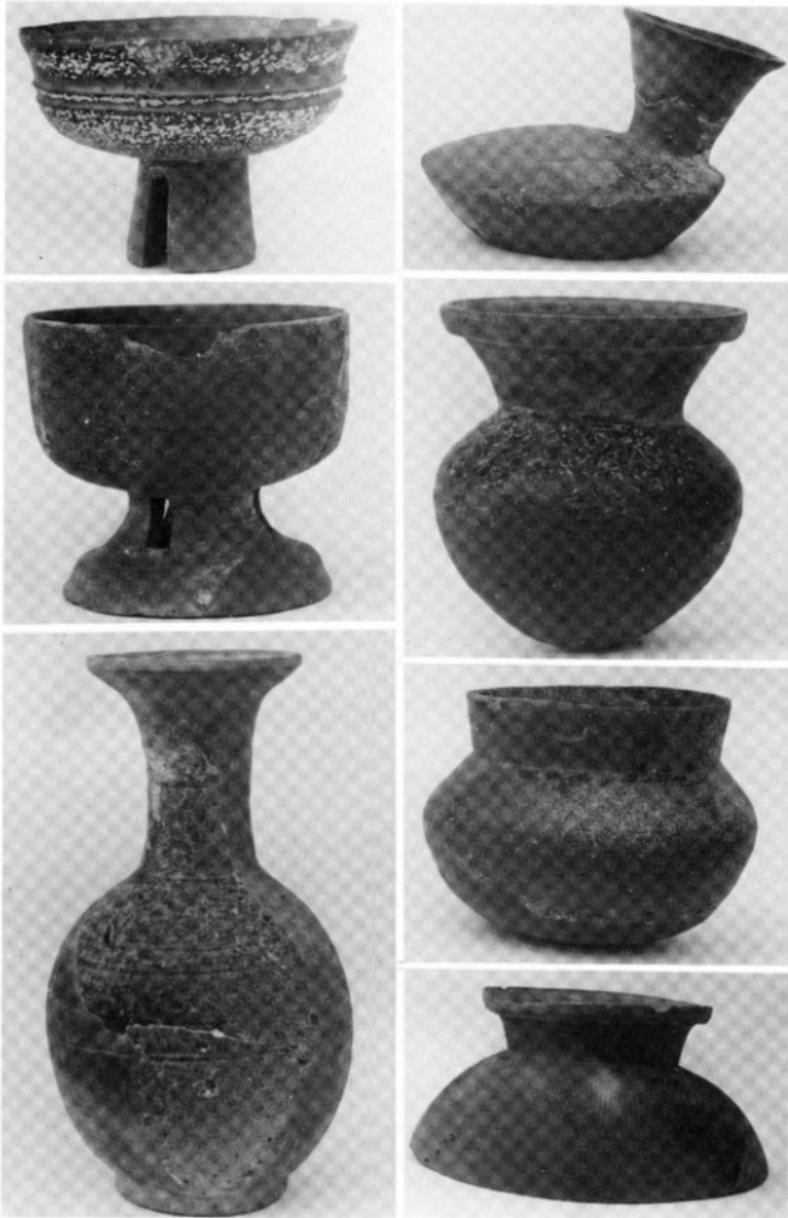


2. 出土遺物（包含層）

圖版八 大縣遺跡（遺物）

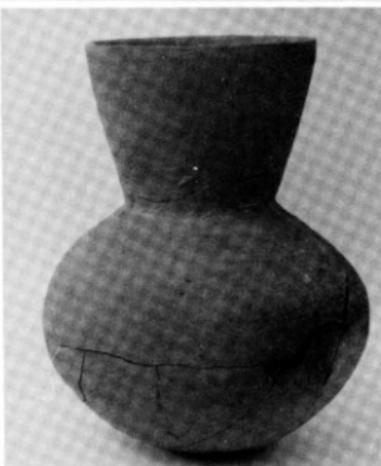


出土遺物（包含屬）



出土遺物（包含層）

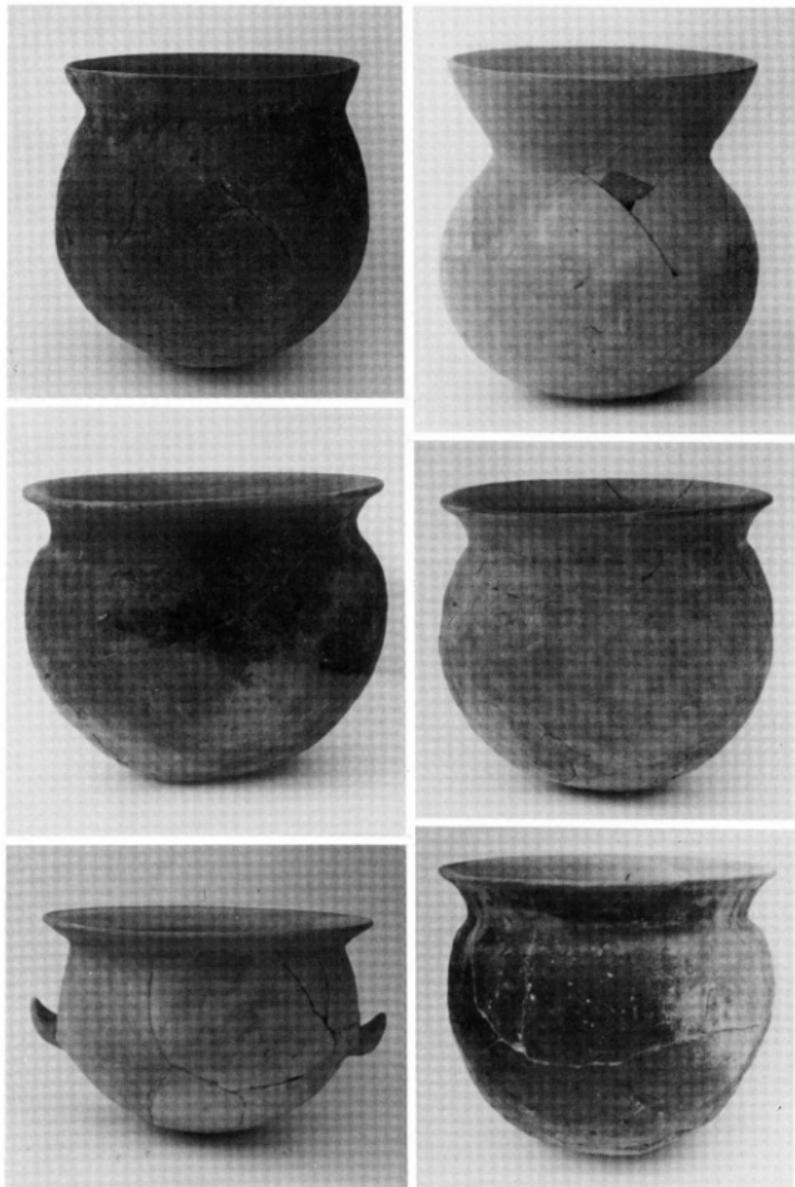
図版十 大県遺跡（遺物）



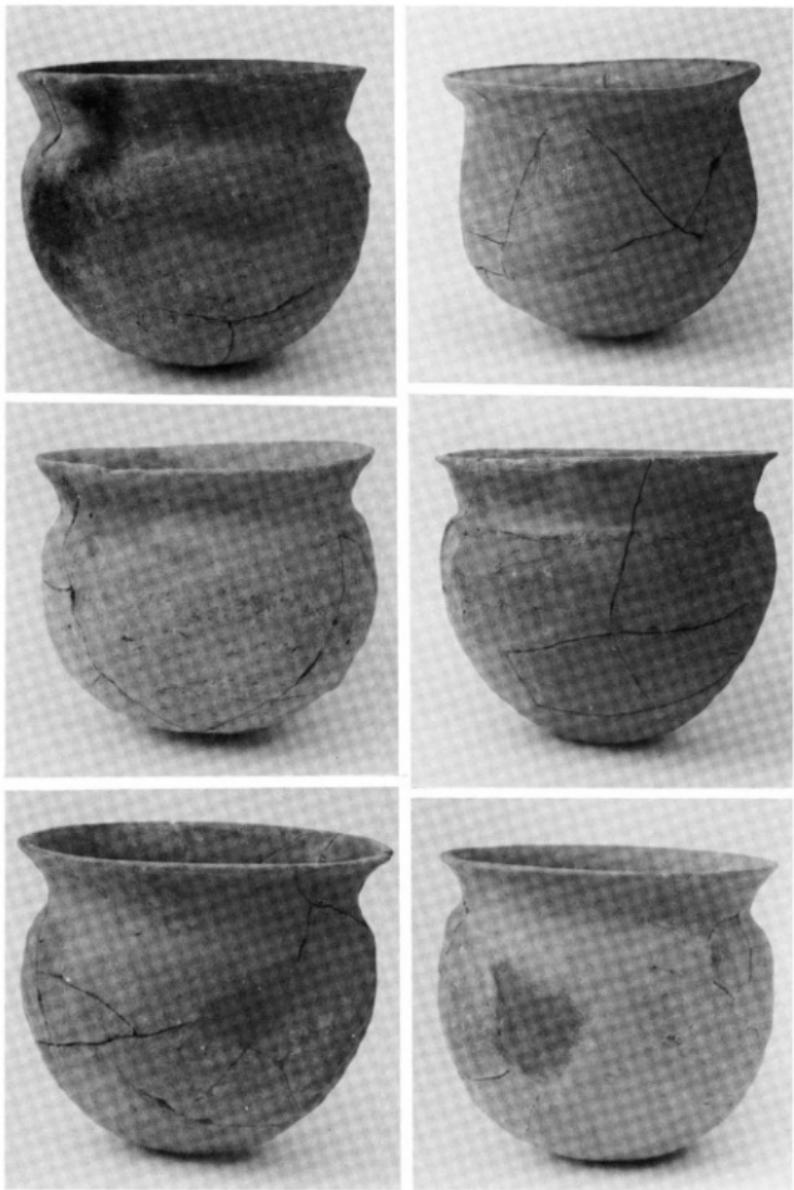
出土遺物（包含層）



出土遺物（井戸-1）

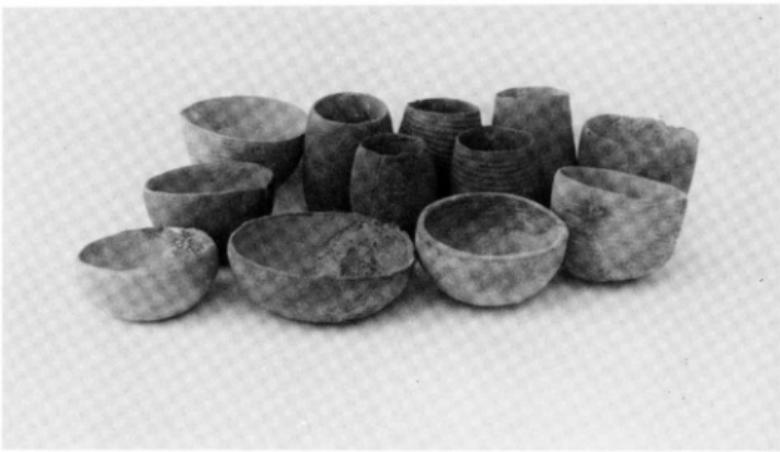
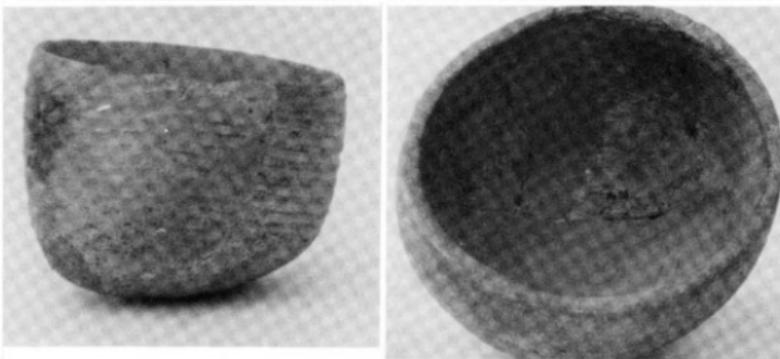
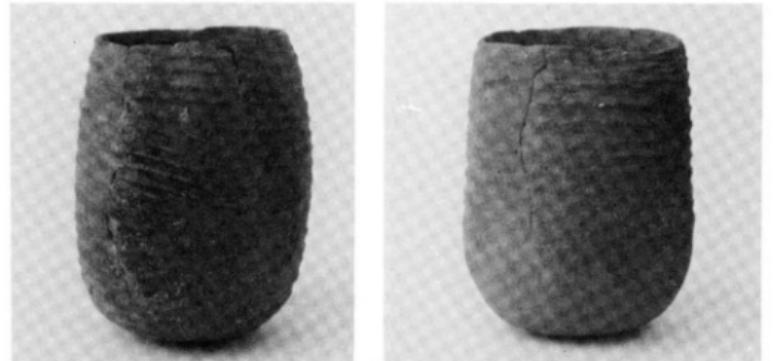


出土遺物（井戸-1）

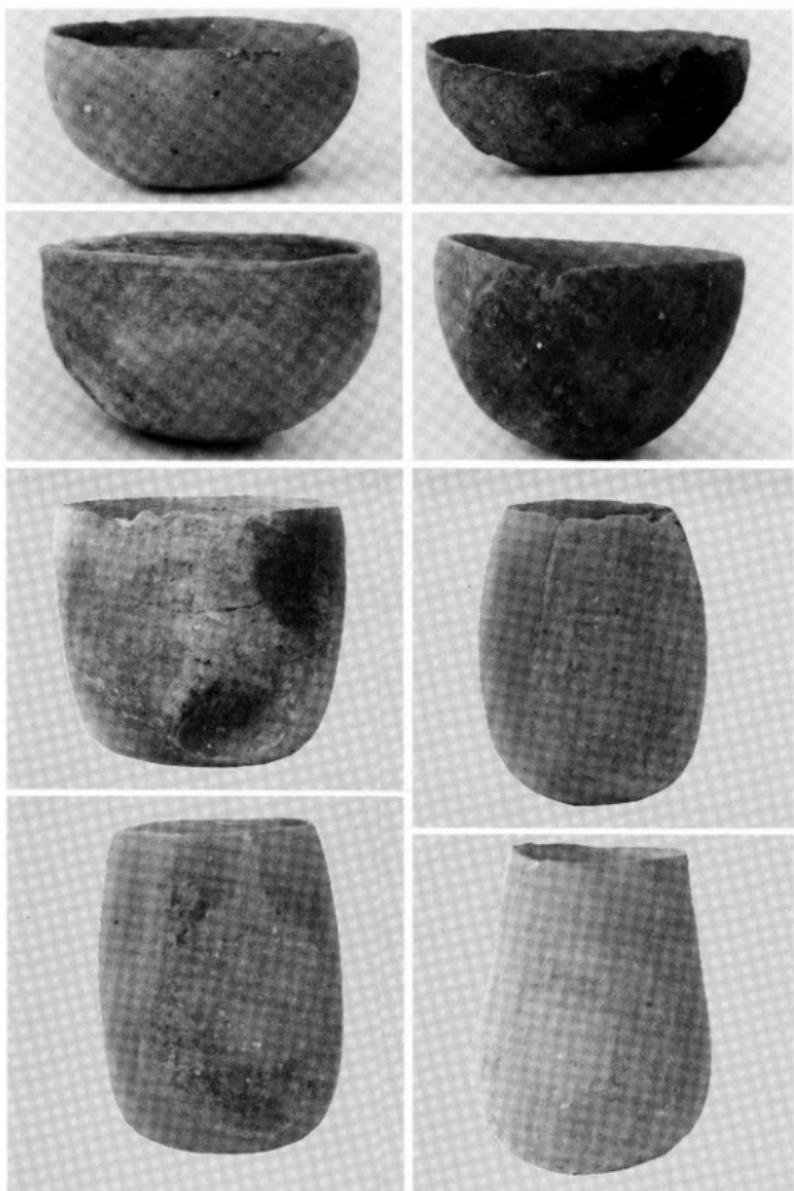


出土遺物（井戸-1）

図版十四 大県遺跡（遺物）

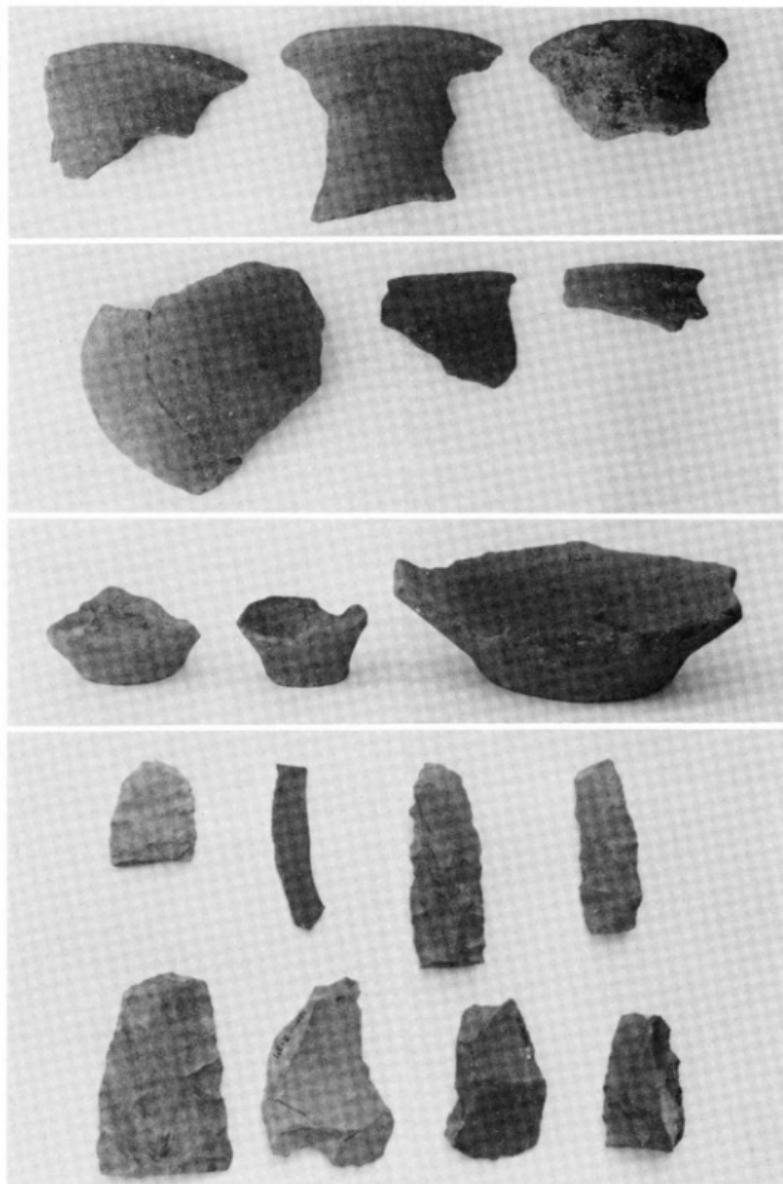


出土遺物（製塩土器）



出土遺物（製塩土器）

図版十六 大県遺跡（遺物）



出土遺物（弥生土器、石器）



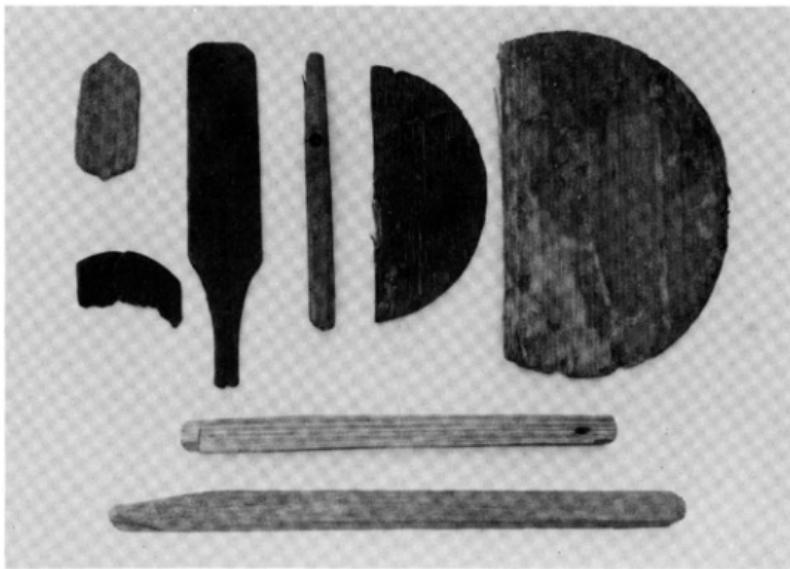
1. 繩羽口



2. 鉄滓

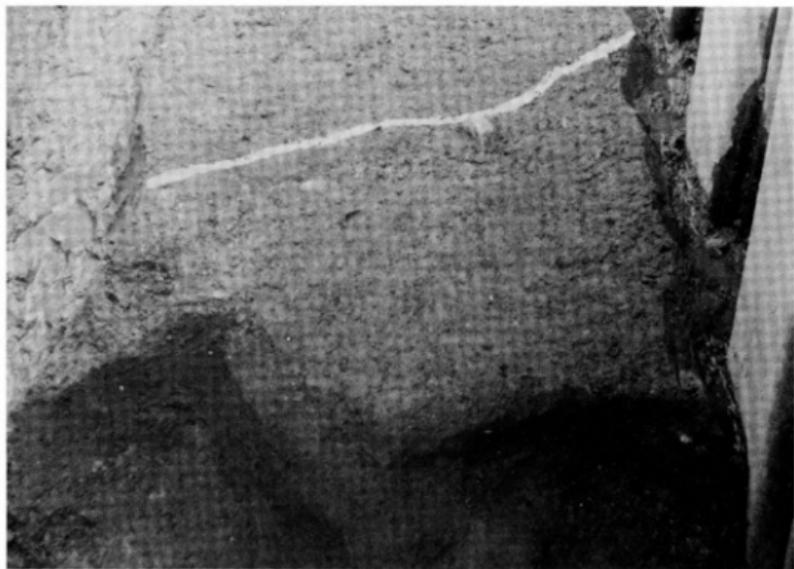


1. 獸骨

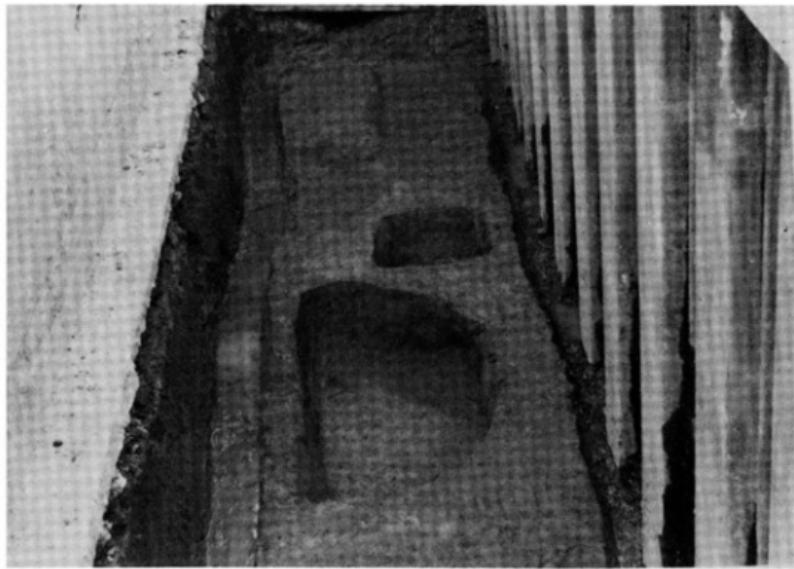


2. 木器

図版十九 大県南遺跡（遺構）



1. 遺構（A区）



2. 遺構（B区）

図版二十 大県南遺跡（遺構）



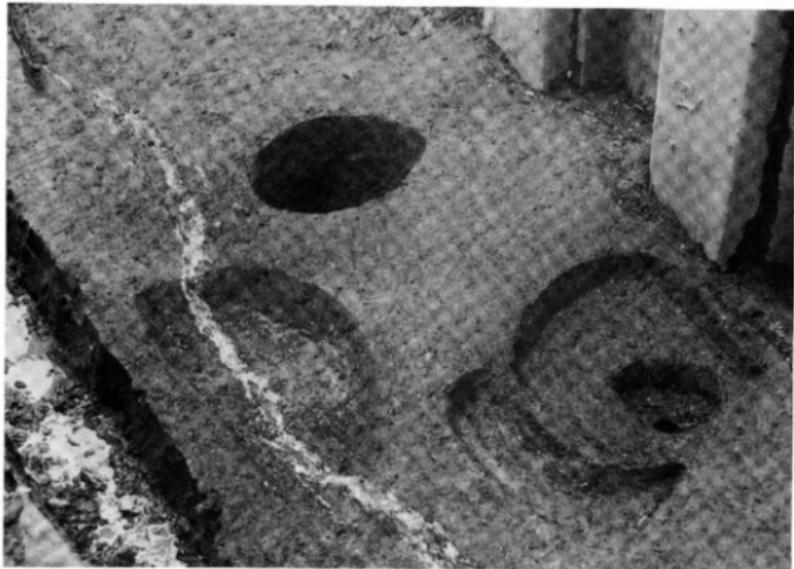
1. 土塙-2



2. 遺構（C区）



1. 溝-5



2. 遺構 (C区)

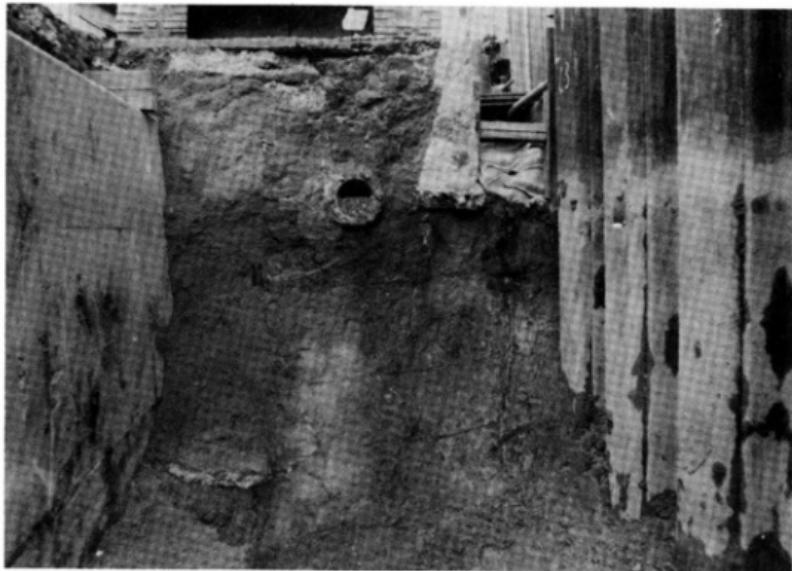


1. 遺構 (C区)



2. 遺構 (C、D区)

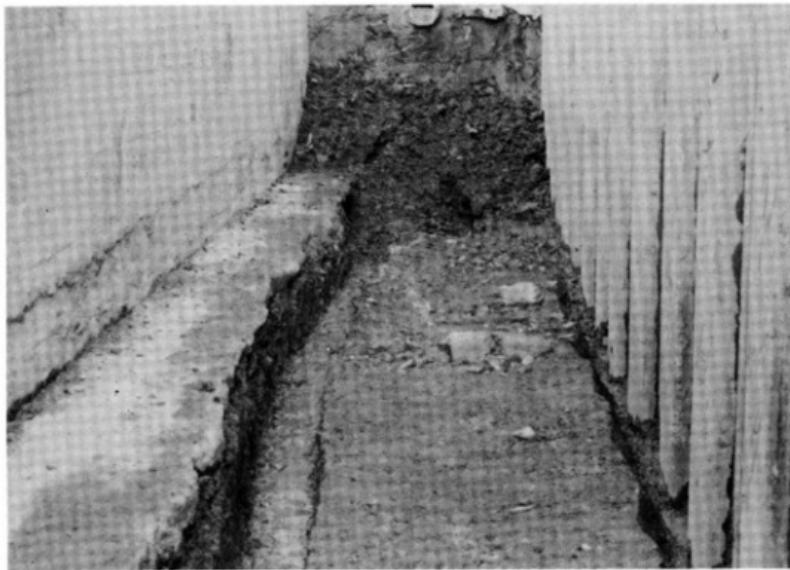
圖版二十三 大縣南遺跡（遺構）



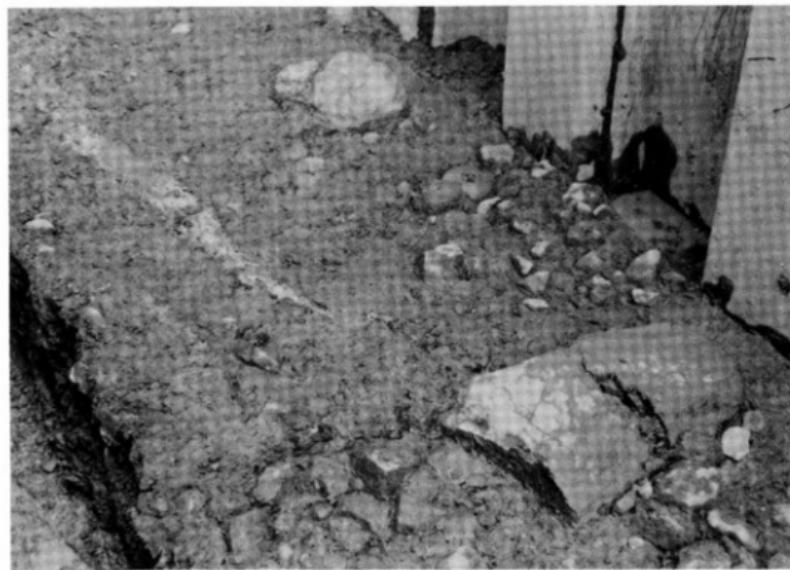
1. D区断面



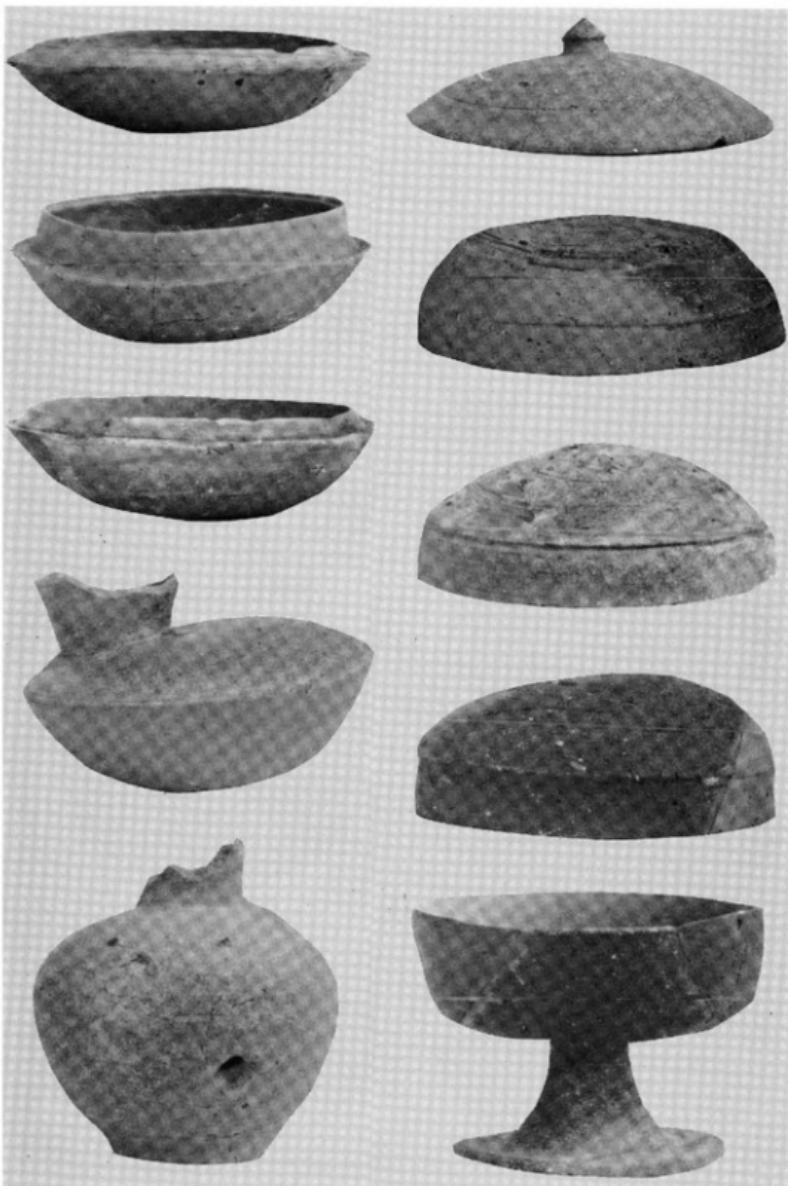
2. 遺構（C区）



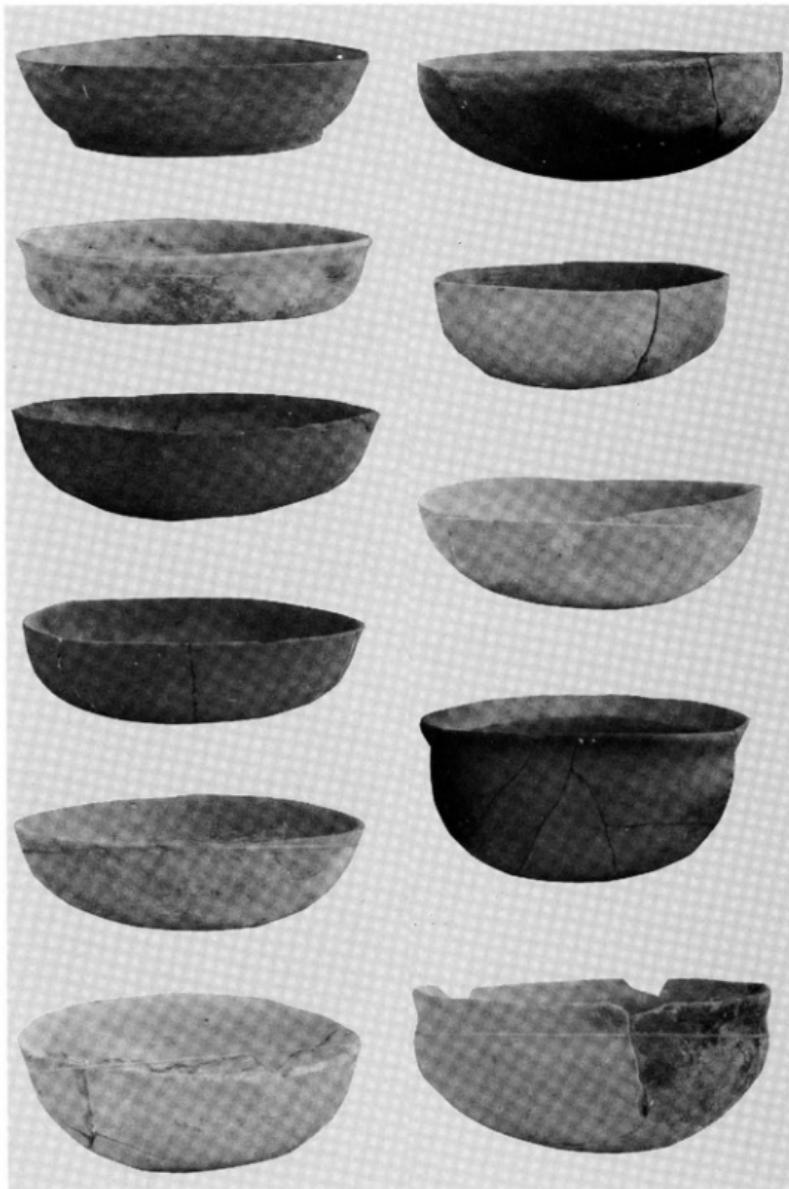
1. 遺構 (D区)



2. 遺構 (D区)



出土遺物1

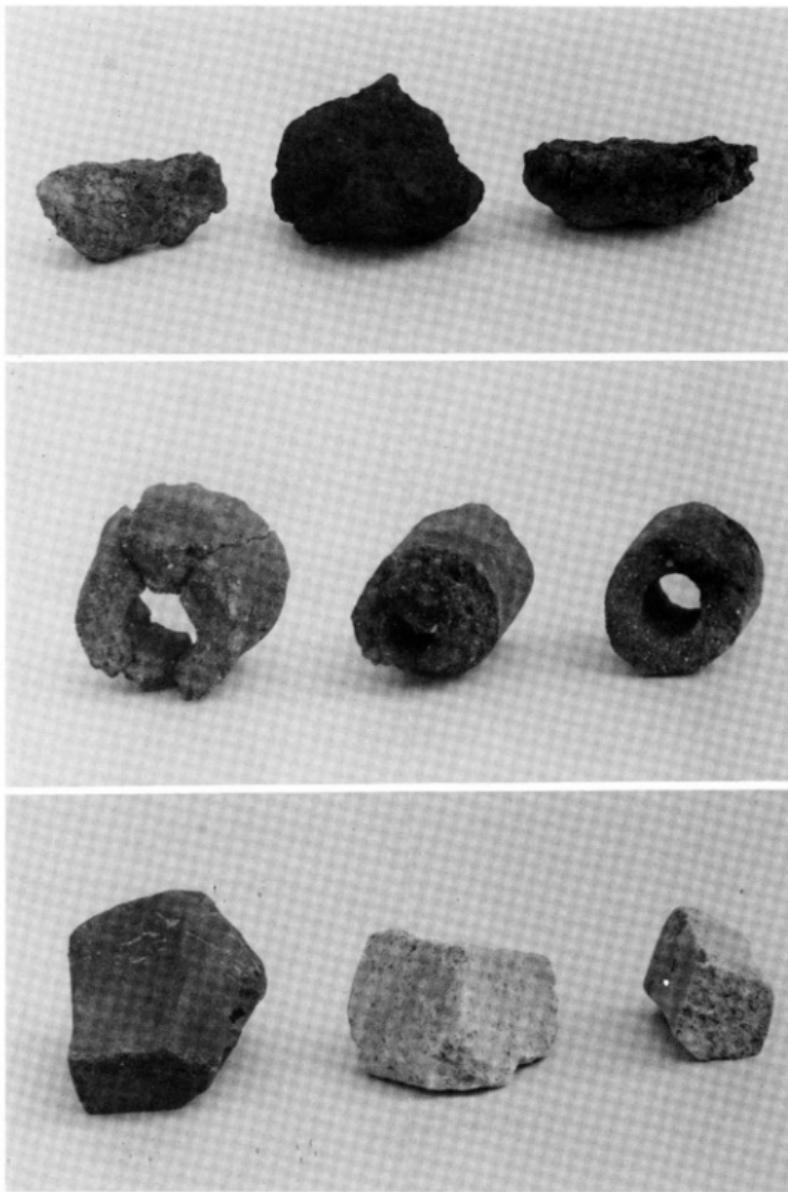


出土遺物 2



出土遺物 3

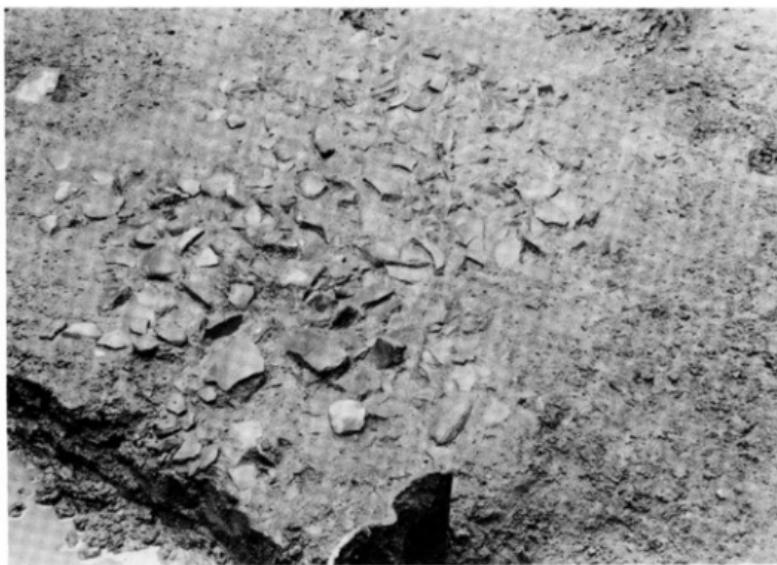
圖版二十八 大縣南遺跡（遺物）



出土遺物（鐵淬、繩羽口、砥石）



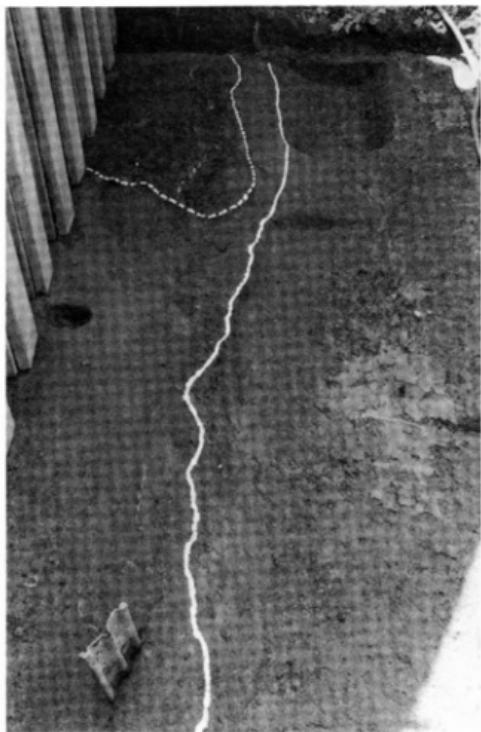
1. ⑤層上面瓦質甕の出土状況（東北から）



2. ⑧層上部土器溜り（西南から）

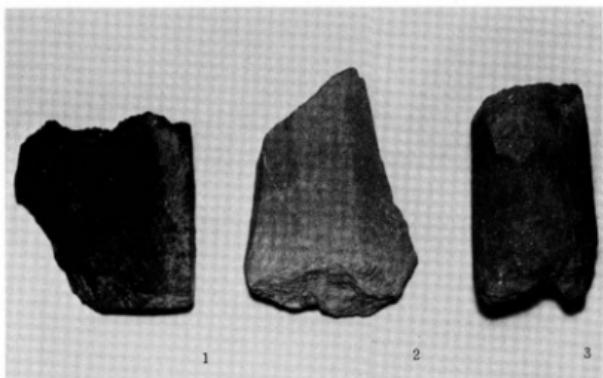


西壁の土層（東から）



⑨層上面の遺構（東から）

図版三十一 大県南遺跡E区（遺物）





8



9



15



18



22



20

土器溜り内の土師器、須恵器

大県・大県南遺跡

——下水道管渠設工事に伴う——

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内線716

発行年月日 昭和60年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

